

周りにしか行く場所がない (二百五十枚)

もくじ

- プロローグ——あなたとわたし
1. 林檎が落ちる／落ちた林檎
 2. 製造された愛
 3. まるつきり別の話
 4. 墓参り
 5. 小さな仕掛け
 6. 新しい溺れ場所
- エピローグ——わたしたち

時々、私は今までどこにいたんだろうって思う

自分は何者なんだろう

居場所はあるんだろうかって

自分をごまかすのは一人きりでは難しい

こんなところでただ一人

——アイリーン・キャラ「アウト・ヒア・オン・マイ・オウン」

あるものとわすれつゝなほなきひとをいづらとゝふぞかなしかりける

——紀貫之『土佐日記』

プロローグ——あなたとわたし

目を覚ますと、そこは暗く、ひんやりとした部屋で、あなたはその白っぽい天井に見覚えがない。さらに悪いことに、あなたは自分が誰なのかわからない。

自分が誰で、ここがどこなのか、そのどちらかだけでもわかればすべて解決するのだが、とあなたは顎まで潜り込んだベッドの中でぼんやりと思う。その二つの問題はそれぞれがお互いのヒントのようなものになっていて、片方を忘れても、もう一方さえ憶えていれば、すぐに必要な情報を取り戻すことができるはずだ。

でも今はだめだった。母親の旧姓も、初めて飼ったペットの名前も思い出せなかった。

部屋には闇と寒さが居座っている。部屋の温度も明るさも、何もしなければ保つことはできない。それは現代においては空調や照明のスイッチを押すだけの簡単な作業かもしれない。しかしそれさえできなくなる時間というものが誰の生活にも存在していて、その時間に闇と寒さはあなたの部屋に侵入し、あなたを取り囲む。そしてあなたのことを上から眺める。今のわたしがしているように。

わたしは少し考えてからあなたに名前を与える。戸成となりニコ。平和の和と書いてニコと読ま

せる。風にそよぐ動物の和毛にこげのように、誰かを優しく温められる人間であるように。あとは

あなたの人生だ。好きなように生きればいい。

あなたは自分の名前を思い出す。意識が起動し、記憶の読み込みを始める。でも記憶は本当にそこにあるのだろうか、とあなたは不安に思う。意識の周囲には砂嵐のようなものが吹きすさび、視界は閉ざされている。何一つ手掛かりはない。

ううん、記憶はあるに決まっている。だって、名前があるっていうのはそういうことじゃないか。あなたは自分にそう言い聞かせ、混沌の中に歩みを進めていく。目で見えるよりも先に身体そのものを押し込んでいく。

1. 林檎が落ちる／落ちた林檎

ここはあなたの部屋だ。言うまでもないことだ。もう何年にもわたってその胎内であなたに寝食させながら、あなたの個人生活の惨めさや汚らしさ、そうしたマイナスのベクトルに流されまいとするあなたの日々の努力——まったく努力できない日もあったが——を目撃してきた二階建て木造アパートの上階の部屋。それら二つの勢力が今のところはなんとか均衡状態を保っている、文字通り兎の巣のように狭い部屋。どうしてあなたはそんな場所のことを忘れられたのか？

あなたは昨日三十歳の誕生日を迎えたばかりで、この週末は恋人とともにそれを祝った。だが——ああ、そうだった——二歳年下の恋人には他に好きな女性がいた。あなたの友達の一人だった。あなたはその友達のことがとても好きで、彼女がいかに素晴らしい人物であるかについて彼によく話して聞かせていた。天使のように愛らしい六鹿茉莉^{むじかまり}。去年あなたがテニススクールで知り合った二十四歳の図書館員で、二週間に一度の練習日には二人で一緒に昼食を食べに行っていた。

あなたと六鹿茉莉には読書という共通の関心があり、たまたま住んでいる場所も近かった。二人とも学生時代から一人暮らしをしていて、ゆっくりとした話し方をするところも波長が合った。共通点だけでなく、違っている部分が多かったのもお互いに話しやすかった理由かもしれない。あなたは明治後期から戦後にかけての日本の小説、特に白樺派を好んで読んでいたが、六鹿茉莉は十九世紀以前に書かれたヨーロッパの大長編を愛好していて、大学では『モンテ・クリスト伯』について卒業論文を書いた。あなたが週に三度のランニングに加えて球技がやりたくなってテニスを始めたのに対し、六鹿茉莉の動機は職場以外での知り合いを作ることであった。あなたの話すスピードが遅いのは自分の考えをできるだけ正確に言葉にするためだったが、六鹿茉莉の場合は元々の性格がおっとりしているようだった。

数ある稽古事の中から進んでテニススクールを選んだわりに、六鹿茉莉は運動が苦手だった。あなたを含む他の初心者クラスの生徒たちと比べても、彼女の上達スピードは明らかに遅かった。これまでに運動をした経験がほとんどなかったということもあるのだろうが、六鹿茉莉は下半身の動きを上半身の力に変換するという多くのスポーツに共通する基本的な原理が理解できないらしく、素振りのときにはまずまず問題ないようにも見えたが、ボールを使った練習になると、たちまち腕だけでラケットを振るような打ち方になってしまった。一つ一つの動作を丁寧に行う性格と、献身的とさえ言えそうな運動量のおかげで、ミスの数は他の人たちとさほど変わらなかった。しかし後のことを考えるなら、今はミスの多さに目をつぶってでも正しいフォームを身につけたほうが良さそうだった。コーチを務める体育大学の女子学生にもそのように指導されてはいたが、六鹿茉莉は自分のやり方をなかなか変えることができなかった。

六鹿茉莉の運動音痴はあなたの中で彼女のもう一つの特徴と奇妙に結びついていて、あ

あなたはそれらをしばしばセットで思い浮かべた。それは二つの特質のあいだに「六鹿茉莉の身体」という共通項があったからなのかもしれない。あなたは六鹿茉莉の首の辺りには目に見えない接合面のようなものがあり、彼女の頭と身体は本当はそれぞれ別の人間から持ってきて来られたもののではないかと夢想している自分に気づくことがあった。それくらい彼女の身体はその人形のように小さくピントの合った顔立ちとは異なるメッセージを発しているように思えた。もう一つの特質、それは服装の野暮ったさだった。

六鹿茉莉は幼稚園の頃からの女子校育ちで、郊外の女子大学に入るまで麻布にある大きなマンションで弁護士の両親とともに暮らしていた。あなたのように文化と呼べそうなのがほとんど何一つない地方（そこはメインストリートの文化と合流するには東京から遠すぎ、独自の文化が花開くには東京に近すぎた）で育ったのならともかく、彼女のような環境にあつてなぜこれほど垢抜けずにいるというわけではない。それ以前の問題なのだ。そもそも彼女は自分の皮膚が現在何によって覆われているかということについて一切の関心がないらしく、Tシャツとパーカにジーンズという格好が多かった。だいたいTシャツは大きすぎ、パーカはくたびれていた。

あなた自身は生活に少し余裕が出てきてからは質の良い洋服を身に纏うことが好きになった一方、自分の着るものにこだわりすぎることに對して卑しさのようなものも感じていたので、少しも飾ることのない六鹿茉莉と一緒にいると落ち着けた。いわゆるファッションセンスなどというものが友情の妨げになることはあってもそれを深めることはまずないということも経験から学んでいた。それでも茉莉なら似合うような可愛い洋服がいくらかもあるだろうに考えると、その自意識の痕跡が感じられない服装があなたにはひどく惜しく感じられた。そのことを六鹿茉莉に話すと、彼女はいつもまるで自分の服を初めて見るような目で見て、「あはは」と楽しそうに笑った。

普段着との対比のせいもあるのか、シンプルな白いテニスウェアを着て長い髪一つにまとめた六鹿茉莉は、クレイコートの上で際立って美しく見えた。そのぎこちない挙動までもが愛すべき個性のように思えて、あなたは気がつく彼女から目を離すことができなくなっていた。コーチや他の生徒たちも——平日の午前中の回だったせいかな、そのほとんどがパートタイムで働く主婦だった——みな感嘆したように六鹿茉莉の姿を見守っていた。本人は真剣そのものだったが、プレイ中の六鹿茉莉は同じ女性の目から見ても何か息を呑むようなものを発散していて、あなたはここに男性がいなくてよかったと他人事ながらほっとすることがあった。あなたが最初に六鹿茉莉にランチに行かないかと声をかけたのも、考えてみれば彼女のそんな姿態に誘われるようにしてだったかもしれない。

「ニコちゃんはすごいね」「ニコちゃんはいいなあ」と六鹿茉莉は口癖のように言ったが、あなたからすれば、六鹿茉莉にはその容貌の他にもあなたにはない重要な美点の一つあった。それは簡単に言えば精神的な余裕のようなものだった。六鹿茉莉は温和で気立てが良く、相手の意向を何であれ常に支持するような空気を持っていた。まるで彼女の胸の中には――

―それはサイズの面でもあなたのそれよりも二回りほど大きかったのだが――広いスペースのようなものがあって、そこに他者の存在や未知の新しい体験をいくらでも容れることができるみたいだった。

六鹿茉莉は人を自然に愛し、人から自然に愛される女性だった。彼女の話はかつて親交を結んだ世界各国からの留学生たちの興味深いエピソードに満ち（六鹿茉莉はミッシヨン系大学の国際交流サークルに所属していた）、図書館では年中行事のたびに子どもたちのためにそれに関連した読み聞かせ会を企画し、時間があるときには献血に行き、骨髄移植のドナーになったことさえあった。あなたは仕事中の六鹿茉莉と図書館のカウンターで何度か会ったことがあったが、一緒に働いている中年の女性職員の口ぶりからも六鹿茉莉がまるで娘のように可愛がられていることがわかった。普段なら他人に心を開くのに時間がかかるあなたも六鹿茉莉の前では少しも緊張せず、初めて食事に行ったときには自分の生い立ちのことから社会問題に対する持論のようなものまで、自分でも驚くほどたくさん話を話してしまった。

「戸成さんの彼女に一度会ってみたいな」とあなたの恋人はある日、いつものように六鹿茉莉のことを話していたあなたに言った。「そんなに面白い人なら」

そのからかうような調子にあなたはやや狼狽しながら、「私だって無批判に好き好き言ってるわけじゃないんだよ」と反論した。「本当にいい子なんだから」。六鹿茉莉と出会ってから半年、あなたは自分が彼女のことを話題にしすぎることを少々恥ずかしく思うようになっていて、恋人のほうから彼女のことを訊かれたとき以外は努めて話さないようにしていたのだ。

それでもあなたは喜んで彼を彼女に引き合わせた。自分の好きな人たち同士を引き合わせること――彼の提案を聞くまでは考えもしなかったが、それはあなたにとってこの上なく魅力的な行為に思えた。理科室の子どもみたいな気分だった。二つの別々の世界がフラスコの中で一つになって化学反応を起こし、そこから新しい、見たこともないような美しい色をした何か――営利のためでもなく、大義のためでもなく、互いの好意だけによって成り立つ純粋なコミュニティのようなもの――が生まれそうに思えた。自宅で一人きりで働いているあなたにとって、それはとても大切なことだった。

それが昨夜のことだ。あなたはいつも金曜の夜から月曜の朝まで彼と一緒に過ごし、彼の部屋に泊まることにしていて、今回のあなたの誕生日は日曜日だった。二人でのお祝いは土曜の夜、日付を跨ぎながらやることにしていたので、誕生日の当日は特に予定を入れていなかった。じゃあその日に三人で晩ご飯でも食べに行こうよ。

「もう戸成さんとは付き合っていけないかもしれない」と彼は部屋に着くなり言う。「ごめん、僕は六鹿さんのことが好きだ」

「今日会ったばかりでもう好きになっちゃったの」とあなたは彼の言葉が冗談なのか本気なのか決めかねて、少し笑って尋ねる。

「ううん、もうずっと前から好きだったと思う。たぶん、戸成さんが彼女のことを最初に教

えてくれた頃から。夏の終わりくらいだったかな。だから今日会ったのもただの確認、のようなもので、前から気持ちは決まっていたんだ、ごめん」

あなたは彼の話に何か続きが——今の言葉の意味をひっくり返しまではしなくても、多少はその方向性を変えるような続きが——あるのではないかと思ってコート脱ぎ、ダイニングテーブルの椅子に腰掛けてそれを待ったが、沈黙が耳の中に残っている言葉を正式なものとして確定しただけだった。

「そんなことってある？」と言ってあなたはテーブルに手をつき、向かいの椅子に座った彼に訴える。「その気持ちが本当なのだとしても、三雲くんが好きになったのはあの子自身じやなくて、私が説明するあの子のことでしょう。それはただの言葉で、私抜きには存在しないかもしれないもので、実際の彼女とは多かれ少なかれ違っているんだよ。そのことはわかってるの？ 第一、あの子は三雲くんのことなんて全然好きじゃないかもしれないじゃない」

しかし三雲くんはすでに恋に落ちていて、あなたが何を言ったところで彼をその深く狭いクレバスの底から引っぱり上げることはできない。

「戸成さんの言っていることはわかるよ。その通りだと思うし、僕は大変な間違いを犯そうとしているのかもしれない。でももうそうするしかないんだ。たとえ後悔して、やっぱり戸成さんのもとに戻りたいと思うような事態になっても、今の僕は彼女のほうに進まざるを得ないんだ」

「一度行ってしまったら、もう私のところに戻ってくることはできないよ」とあなたは重たい氷の塊を蹴落とすような声で言う。

「わかってるよ」と彼は言う。「全部わかってる」

そのときあなたの中に湧き上がってきたのは、奇妙なことに、三雲くんのことを守らなくてはという使命感だった。いま彼が囚われている根拠のない（とやはりあなたは思う）幻影、それはおそらく彼の空虚さから生まれてきたものだ。これまで生きてきて満たされず、あなたと出会うことによっても満たされることのなかった彼の心の一部が、あなたの語る一人の女性の話を利用して世にも美しい幻影を作り出してしまったのだ。高校卒業後、何度か仕事を辞めてからあるカルト教団に入信してしまった一人の友人のことをあなたは思い出す。私は彼女を守ることができなかった。でも三雲くんのこととは守らなくてはならない。自分の弱さにきちんと直面させ、目を覚まさせなくてはならない。

あなたの喉の奥にひとまとまりの言葉が装填される。あなたはそれらの言葉が最大の効果を發揮するように、順序を入れ替え、細部を変更する。初めの言葉が終わりの言葉の微妙な暗示となるように、終わりの言葉が初めの言葉の再発見となるように、工夫を凝らす。それはあなたの得意とするところだ。

しかしそれを使って三雲くんの幻影を殺害する直前、あなたは自分が振りかざそうと

しているのが単なる「正しき」にすぎないことにはっとして気づき、その完璧な兵器を胃のほうまでぐくりと飲み下す。

あなたは正しさなどというものがごくわずかな例外的状況を除いてもうとつくの昔に時代遅れになってしまったことを知っている程度には若く、時代遅れだと知りながらそれを感情のままに相手にぶつけることができなくなる程度には年を取っていた。あなたの人生は今や第四の十年期に差し掛かっていて、それはどれだけ幸福に生きてきた人間であろうとも、自分が生きているのが陽のあたる草原というよりはむしろ故障がちなエアポンプの付いた水槽のような場所であり、どんな形であれそこから出ていくことが少なくとも全面的な不幸ではないということに実感として気づき始める時期だった。そしてそれは誰もが大なり小なり何らかの信仰に縋^{すが}り始める時期だった。

三雲くんが自分の責任で行動する以上、そして恋人の友達を好きになることが何ら違法行為ではない以上、彼の信仰の内容が気に入らないからといってそれをまやかしたと主張するのはただの傍^{はた}迷惑な独善にすぎない。四方を囲うガラスのことを忘れさせてくれるものを手に入れられるのは、かえって幸運なことなのかもしれない。カルトに入った高校の友達は今どうしているだろう？ もしかしたら私なんかよりもずっと幸せにやっているのかもしれない。こんな私なんかよりも。

「別れないでほしい」と自分が言うのをあなたは聞く。その言葉につられるようにして涙も出てくる。こうなったらおしまいだとわかっているのに、目と口の身勝手な振る舞いを止めることができない。惨めな気分だった。恋愛はこんなふうにしてあらゆる価値をゼロにしてしまうんだ、とあなたは思う。現実認識の精度も、道徳的な適切さも、愛情の深さも、全然無関係になってしまう。これも結局は力の問題なんだ。人生の他のすべての局面と同じように。

三雲くんはダイニングテーブルの向こう側で腕を組み、難しい顔をしてうつむいている。あなたにはテーブルが体育館の床みたいに広く感じられる。昨夜はワインを飲みながら楽しく誕生日会をしたのに、日本人の若手デザイナーが作った素敵なネックスを贈ってくれたのに、確かにセックスの頻度はしばらく前から減ってきてはいたけど、どうしてこんなことになってしまったのだろう、とあなたは思う。これ以上アクセスできない過去が増えるのは嫌だ。今の私にはもうそれは賄^{まかな}いきれない。

あなたがこれまで付き合ってきた男性たちは時折夢の中に現れて、あなたを過去へと引き戻した。彼らの好きだったところや当時のあなたの気持ちをリアルに思い出させた。起きてそれが夢だったことに気づくたび、あなたは現在の自分の人生が本来予定されていた筋から大きく逸れ、脇道のまた脇道に入った名もないサイド・キャラクターのエピソードみた

いなものになってしまったような気がした。時間の中を空間のように自由に歩き回ることができれば、どこかにまだお話の主人公みたいな人生を歩んでいる自分がいるような気がした。しかし現実には、それはもはや誰とも語り合うことができず、立ち入ることもできない過去の可能性にすぎなかった。

別れた理由はありふれたものだ。普遍的とさえ言えるかもしれない。自分の言葉よりも相手の言葉を深刻に受け止めやすく、自分が与えている影響よりも相手から受けている影響のほうが目につきやすく、自分の外にいる相手よりも自分の中にある相手のイメージを愛し、憎んでしまう人間生来の避けがたい傾向。しかもそれをナイフジャグリングみたいに二人の人間が向かい合って同時に行うことになる。呼吸が合っているときにはスリルに満ちた夢現ゆめうつのひとつときを楽しむことができる。だがそうでないときには血を流しながら相手を

非難することになる。そんなことは初めて男の人と付き合った高校生の頃からわかっていった。だからそうならないようにいつも注意していた。エーリッヒ・フロムだって読んだし、ジョン・グレイだって読んだし、M・スコット・ペックだって読んだ。瞑想みたいなことも試してみた。それでも誤解やすれ違いは繰り返した。

そのうちにあなたはこう思うようになった。ひょっとしたらこれは必要なものなんじゃないか。どちらかが失敗や失言のようなことをして、もう一方が口論の火蓋を切り、自分たちの間に広がる見えないダンジョンのようなものに二人して入っていくこと。途中で相手と巡り合えればクリアだ。通路を照らす灯りはなく、ヒントは遠くからかすかに響く互いの呼び声だけだから、私たちはできるだけよく通る声を上げ、耳を澄まさなくてはならない。暗闇の中でうまく出会い、互いの身体を手探りで確認し合ったとき、私は確かにそれまでよりも恋人との絆が深まったように感じた。そういうことなら言い合いになることを恐れず、むしろ積極的に取り組んでやろうと思った。

しかしダンジョンはクリアするたびに複雑になり、聞こえてくる声は小さくなっていった。相手がいるのは自分と同じフロアなのか？　そもそも相手はダンジョンに入ってくれたのか？

耳を傾けつつ大きな声を出すことだったはずの課題は、次第に相手の愛情ロミオとジュリエットを信じることに変わっていった。ある時点で私は難易度の高すぎる迷宮の中で恋人と出会うことを諦め、言語的な努力を無言の信頼で置き換えた。ここから先はわかり合うのは難しいけど、完璧な恋人たちなんてどこにもいないし、私たちはお互いの違いを思いやりとユーモアをもって受け入れたいと思っているよね。その気持ちさえあれば十分だよ。ああ、だがそれも二人の人間が同時にやることだ。私とかつての恋人たちはやがて信頼と疑惑のあいだで四人のジレンマみたいなものに陥ることになった。

「書かれるのが嫌なんだ」と三雲くんは言う。

「え？」と言ってあなたは考えを中断し、涙を拭う。

「もう書かれたくないんだ、君の小説に。嫌なんだ、自分の生活が公開されているみたいで」

「え」とあなたはもう一度言う。「私は三雲くんのことなんて書いてないよ」

「書いてるじゃないか」と彼は組んでいた腕をほどこき、顔を上げながら静かに言う。その抑揚の少ない、穏やかなのか感情に乏しいのかよくわからないいつもの話し方と、こちらをまっすぐに見据えるウェリントン眼鏡の奥の実際よりも少し小さな瞳があなたの口をつぐませる。「名前は変えてあるけど、君が新しい小説に書いたのは僕らのことじゃないか。昔の小説だってみんなこれまでの恋人とのことだろう。雑誌にも書かれていただろう、私小説的だって。そうやって君は恋人との関係を利用してきたんだろう」

「私は三雲くんのこと、これまでお付き合いした人のことも、小説に書いてはいないよ」

とあなたは自分の言葉を一言ずつ手に取って検^{しら}べるようにして言う。「確かに実際の会話だとか起こった出来事を素材として使いはしたから、利用しているって言われたらそうなのかもしれないけど、はめ込まれている文脈は全然違うし、話自体は完全なフィクションだよ。三雲くんはあまり小説を読まないほうだからわかりづらかったかもしれないけど、小説ってそういうふうにして書くんだよ——少なくとも私の場合はだけ。文芸誌の書評だって、ちよつと書き方が難解だったけど、あれは私の小説の私小説的なポ^いーズ^ズについて書いてあったんだよ。私はよくそういうことをするの。自分の人生からそのまま設定を持ってきてそこで架空の事件を起こしたり、逆に架空の設定の中で実際の事件を起こしたり。そうすることで生じる事実と虚構のあいだの緊張が面白いと思うからだ。だから正確に言えば、私が小説に書いているのは事実でも虚構でもなくて、たぶん別の何かなんだよ」

「僕が言っているのはそういうことじゃない」と三雲くんはあなたの目を見つめたまま言う。「事実だとか虚構だとか、そういう細かい話をしているわけじゃない。そんなことに僕は何の興味もない。結局はトレーダーになるような人間だからね。僕が働いているのは、噂だろうが思惑だろうが、説得力さえあれば何だって物を言う業界なんだ。社の内外で政治的な嘘が飛び交っているし、僕自身だってそこに首まで浸かっている。言い方が良くなかったかもしれないけど、僕は君が恋人との関係を利用してきたのが悪いと言っているわけでもない。それによって収入を得て、ある程度生活が成り立っているんだから。ある意味、自分の体験を活かしているっていうことなのかもしれないし。誰にでもできることじゃないと思う」

そこまで言ったところで三雲くんは少し視線を下げ、話を続ける。

「僕が耐えられないのは、君が小説を書くことによって僕との関係を維持しているんじゃないかということなんだよ。いつも自分の一部を小説のために取っておいて、問題があってもまともに取り合わずに、一人の世界に引きこもってそれを勝手に解決して。僕にだって似たような部分はあるんだよ。なかなか表に出てこない、すごく個人的な部分。でも君は僕のそういうところには何の関心も払わなかった。そういうのは各自でどうにかすればいいと考えているみだだった。君と一緒にいると僕らのあいだには少しも問題がないみたいと感じられて、僕もいつからかそんなつもりになっていた。でも僕はいつも苦しかった。そ

の苦しさがどこから来ているのかずつと言葉にできなかったんだけど、六鹿さんのことを好きになってようやくわかったんだ。僕は誰かと自分の寂しい部分を分かち合いたかったんだって。六鹿さんのことを考えているときだけは救いのない孤独感を忘れることができたんだ。僕が『君は僕らのことを小説に書いている』って言うのはそういう意味だよ。君のシステムは完璧すぎるんだ。これから僕と別れても、君は少し悲しんだ後で、それをまた君の言う『別の何か』に活かしてしまうんだろう。それが僕にはやりきれないんだよ」

あなたは三雲くんの話を理解することができない。全身を耳にして一言も漏らさずに聞いていたはずなのに、それはあなたの指のあいだからさらさらとこぼれ落ちてしまう。彼の

話はあなたには柄が^{がら}大きすぎて、あなたの視野には収まりきらなくて、その全貌を一度に見渡すことができない。三雲くんは何を言っているんだろう？

こういうことはこれまでも何度かあった。三雲くんが普通に話していることの意味があなたの頭からふっと消えてしまうことが。それが三雲くんの話し方に論理性がないためなのか、あなたの聞き方に論理性がないためなのか、あなたは判断できなかった。そんなとき、あなたはよく車のギアのことを思い浮かべた。たぶん私の頭はいつも一速とか二速でじりじりと動いているんだけど、三雲くんはそんなところはさっさと通過してもっと軽いギアでびゅんびゅん飛ばしているんだろう、ちょうどあの格好いい車みたいに。

三雲くんは形態美と実用性を兼ね備えた真つ黒な（「ジェットブラックメタリック」と三雲くんは訂正した）ドイツ製のスポーツカーを持っていて、それが芸術品みたいにマンションの地下駐車場に鎮座していたが、あなたはその数字やアルファベットのついた名前を何度聞いても憶えることができなかった。自動車の原理みたいなことはむしろ好きなほうだ。一速や二速でばかり走っていたら燃料も食うし、エンジンに負担もかかる。そういうことは知っている。でも実体としての個々の車にはどうしても興味を持つことができなかった。それは古くなっていくものだし、壊れるものだし、無数のコピーを持つものだ。そうしたあまりに現世的なものに時間やお金を費やすのは、生き方として安易すぎるのではないかとあなたには思えた。

しかしあなたは自分が三雲くんの車に乗せてもらうのを楽しんでいることも否定できなかった。まだ恋人になる前のデートで初めて助手席に座り、いつも歩くばかりだった表参道を抜け、青山通りを赤坂方面へ滑るように走っていったとき、あなたはかつて味わったことのなかったような安心感を覚えた。恋人の車でドライブすることが好きな女なんて低俗で保守的で業突く張りの感じがして嫌だった。しかし柔らかなレザーの座席にもたれ、三雲くのかける音楽を聴きながら心地よいスピードで現れては流れ去っていく街並みを気の向くままに眺めていると、あなたは水族館の巨大水槽に開けられたトンネルの中を歩いているときのような気分になった。不思議な形をした建物や優しく樹冠を掲げた木々はあなたのために存在していて、あなたの目を楽しました。道行く人々も漂白されたようにその本来の生々しさを失い、単なる映画のエキストラみたいに見えた。

皮肉なことに、あなたは三雲くんの車のガラスに囲まれることによって初めてこの人生という名の狭苦しい水槽の外側に——もちろんそれは一時的で安全な錯覚体験であるわけだが——立つことができた。この街は車のために作られているんだ、とあなたはそのときにはっきりと確信した。そしてそれこそがこれまで街を歩くときに感じていた違和感の正体だったのだという気がした。この街は車で走るためのものであって、歩くためのものではない。ここは生身の人間が歩くには広すぎるし、硬すぎるし、うるさすぎる。風は強すぎるし、空気は汚れすぎているし、他人の数は多すぎる。

「三雲くんは私が街を歩いているときの気持ちを知っているの」とあなたは言う。

「え？」と三雲くんは言う。あなたと同じように。そして一生懸命築き上げてきた話題を突然変えられたときに男性がよく見せる絶望に似た表情を浮かべる。でもあなたは自分が少しも話題を変えてはいないことを知っている。これでいいんだ、とあなたは思う。たぶん私たちはいま正しい道を進んでいるんだ。

「それは質問？」と三雲くんは尋ねる。

「質問」とあなたは答える。「三雲くんはさ、東京の人でしょ。それで車が欲しかったから、就職してから実家でお金を貯めていた。二年前に私と出会う少し前まで。でも私はもう十二年も一人で暮らしているの。壁の薄いアパートを転々としながら、自分で自分のために食事を作って。車なんて買うお金もなければ維持するお金もない。それがどういう気持ちのするものなのか、わかる？ その時々恋人と一緒に暮らそうとしたこともあった。でもどういうわけかいつもそれは実現しなかった。学生のときに付き合っていた人には『自分たちで家賃を払えるようになるまでそういうのはよくないよ』と言われた。私は耳を疑った。だってそうでしょ？ 親に経済的に援助してもらっていることと、恋人のそばにいたいと思う気持ちのあいだに何の関係があるっていうの？ 前にも言ったけど、恋人になった相手が実は既婚者だったなんてこともあったし、それから遠距離恋愛をしたこともあった。私は会社は何の未練もなかったから、仕事を辞めて彼の街に行くよって言ったんだけど、なんだかんだ有耶無耶になって別れてしまった。別れ際にあれはどういうことだったのって訊いたら、『一時の感情で君に誤った判断をさせてはいけなと思った』って言われた。みんなもうどうしちやっただろうって呆れるしかなかった。誰ひとり精神的に独立している人間はいないし、他人の精神的な独立を認めることのできる人間もないみたいに思えた。

私ね、まだ会社に勤めていた頃、週末が来て一人になることがとても怖かったの。部屋で一人きりになったときに向き合わなくてはならないもののが。夜になれば本を読んでもできなかった。だから土曜日になると私は朝から家を出て、あてどもなく街を彷徨った。行き交う人たちはみんな確固として歩みを進めていた。信号が点滅し始めたり、電車のドアが開まりそうになると、彼らは小走りになって先を急いだ。誰もがどこかからどこかへ向かっていた。

私には行くべき場所もなかったし、帰るべき場所もなかった。私のことを待っている人も

いなかった。街にいと自然と歩く速度は遅くなって、ほとんど立ち止まりそうになった。でも本当に立ち止まりそうになると、見えない力のようなものが働いて私の足を強制的に動かした。街は立ち止まるための場所じゃなかった。そうする人がいるとすれば、それは誰かと待ち合わせをするためであり、携帯電話を使うためであり、タクシーを捕まえるためだった。そこは通り過ぎるための場所だった。

だから赤信号にぶつかると心からほっとしたの。誰に気兼ねすることもなく足を止めることができたから。赤信号の前で、私と他の通行人たちの利害は束の間一致した。信号が青に変わるまでのほんの少しのあいだ、私は心を一点に集中させて目の前の景色を見つめ、周囲の音に耳を澄ませた。そうすることに何の意味があるのか、自分でもわからなかった。何かの答えでも探しているんだろうかと思ったけど、答えなんてどこにもなかった。質問すらなかった。

周りにしか行く場所がない、と私はそんなときいつも思った。そういう名前のレコードを昔買ったことがあったの。一度聴いただけでどこかにしまっちゃったんだけど、そのタイトルと赤信号みたいな色のジャケットはなぜか印象に残っていた。ノー・プレイス・トゥ・ゴー・バット・アラウンド。今いる場所から十メートル先に行くこともできるし、百メートル先に行くこともできる。でも目的地はない。周りにしか行く場所がない。

信号が青になると、私はまたのろろと歩き出して、すれ違う人たちの顔を一つずつ確認していった。彼らにはそれぞれに一言では語りつくせない人生があるはずだった。私には想像もつかないような面白い趣味や仕事や考え方を持っている人もいるはずだし、私には想像もつかないような大変な生活を送っている人もいるはずだった。でも顔を眺めているだけではそんなことは何もわからない。私が見ているのは幕の降りた舞台みたいなものだった。その幕の向こう側にいるはずの個性豊かな登場人物たちや、そこで繰り広げられている

はずの予期せぬ展開に彩られたドラマのことを考えて、私は苛さいまれた。私は一人ぼっちで、どんなものであれ物語などというものから見放されていた。その頃はどんな小説を読んでいても他人事に思えたし、自分の書いているものも子どもの頃に好きだった作家たちの猿真似じゃないかという気がした。私は自分の貧しい世界の中で疲れ切っていた。

こんなこと三雲くんに言うのは本当に嫌なんだけど、私は街を歩いていると誰かに抱かれないってよく思うの。今でも。清潔そうで優しい人を見かけるたび、あの人と一つになつて、あの人が生きてきた人生についての長い話を耳を傾けながら眠りに落ちたいって。週末になれば三雲くんとセックスができるのに、平日になって一人になると、まるでスウィッチが切り替わったみたいにそう思ってしまうの。そして私は心の底ではそれが間違ったことだとさえ思っていないの。他の人に抱かれるなんて三雲くんをすごく傷つけることだし、何よりも自分自身が傷つくかもしれないっていうのはわかってる。実際にはいろんな意味で危険すぎるから、やろうとしたことはないし、やるつもりもない。だけど同時にそれは私にとってどうしようもなく必要なことだとも感じていて、必要なことをやろうとするこ

との何がいけないのか、私はきつと本当にはわかっていないの。

たぶんこういうのが私の『寂しい部分』なんだと思う。でも今みたいなことを三雲くんはどうやって分かち合えばいいのか、私にはわからなかった。だって、そんなもの分かち合った瞬間に恋人としての関係が終わってしまうじゃない。だから私は自分の寂しさは自分で処理して、どうしても蓄積してしまうものについては小説として形を変えて吐き出せばいいと思っていたの」

『処理』っていうのは、マスターベーションのこと？」と三雲くんは訊く。

「それもある」とあなたは答える。

「平日、毎日しているの？」

「毎日じゃないけど、ほとんど毎日かな」

「一日に一回？」

「三回くらいすることもある」

そうかあ、と三雲くんは深く息をつきながら言って眼鏡を外し、目頭をこする。そしてテーブルに肘をついて両手で頬を覆い、目を伏せたまま言う。

「最初の質問だけど、僕は戸成さんが街を歩いているときの気持ちをわかっていなかったと思う。誰かが街でそんなことを考えているなんて、他人の駆け込み乗車に傷ついている人がいるなんて、考えたこともなかった。ましてや自分の恋人がなんて。その寂しさを和らげるために、僕はもつと何かをしてあげられたのかな。何か、僕じゃ足りないものがあつたのかな」

「私は——」とあなたは三雲くんの優しい言葉の残響にしがみつくように反射的に言う。そして今はまだおとなしくしているが、いつ逃げ出そうとしてじたばたと足掻き始めるかわからないその残響の尻尾をぎゅっと掴んだまま、自分の言いかけたことについてしばらく考える。それから口を開く。

「私は、もしかしたら三雲くんに私の書いたものを喜んでもらいたかったのかもしれない。今までこんなふうに考えたことはなかったけど、私は自分自身のためだけにじゃなくて、三雲くんのためにも小説を書いていたんだと思う。普通の話し合いじゃ伝えることのできないものを伝えたくて。でも三雲くんはそれが嫌だったんだよね。私が二人の関係に小説を持ち込むことが」

「素直な感想として、戸成さんの小説を読んでも喜べなかったんだ」と三雲くんは眼鏡をかけ直しながら言う。「僕だって喜べたらどんなにいいだろうと思うんだけど。たぶんそれは僕が読者である以前に君の恋人だったからだと思う。作品としての出来よりもそこに書かれている内容そのものにハラハラしてしまって、フラットな目で読むことができないんだ」

それは先ほどの三雲くんの言葉の意味がようやくあなたの頭に浸透したためかもしれない。あるいは文章を書くという日常的な作業を通じて、あなたが言葉以前の何かが自分の身体の中に滑り込んでくる感触に対して敏感になっていたためかもしれない。とにかくそのとき、三雲くんの話が終わるか終わらないかのうちに、あなたはまだはつきりとは言葉にな

らない、しかし非常に重要な何かに気づく。そして思わず、あッ、と声を上げてしまう。あなたは天井や壁から跳ね返ってくる自分の声に驚いて口に手を当てる。顔が赤くなるのを感じる。

「どうしたの？」と三雲くんは不審そうに言う。

「三雲くん、ちよっと……出かけたい」

「今から？」

「茉莉のところまで車でどれくらいかな」

「六鹿さんに会いに行くの？ 何のために？ それにもう寝てるよ、きつと」

あなたは左腕のカシオの腕時計を確認する。それは〇時五分を示している。あなたの誕生日はすでに終わり、三十歳としての正式な一日目が始まっている。

「うまく説明できないんだけど、大事なことの」

「とりあえず電話してみたら？」

「あの子、携帯持っていないから」

「そうだったね」と言いながら三雲くんは頭の上で手を組んで椅子にもたれ、少し首を傾げる。その格好はうんざりしているようにも、申し訳なさそうにも見える。「あのさ、やっぱり僕はもう戸成さんとお付き合いていくことはできないよ。戸成さんが六鹿さんに何を話しても、僕の気持ちは変わらないから」

「わかってる」とあなたは答える。「三雲くんの気持ちを茉莉に話したりはしないよ。これはたぶん、別の話なの」

「明日じゃダメなの？」

「明日になったら、私はきつと道がわからなくなってしまいうから」

「わからなくなるって、君の家のすぐ近くなんでしょ？」

「お願い」

エレベーターから降りると、冷たく張り詰めた地下駐車場の空気があなたの鼻腔を通り抜けて耳を痺れさせる。三雲くんが何度か咳をする。あなたのショートブーツはコンクリートで囲まれた空間に硬い音を響かせている。あなたは白いクルーネックのカシミアセーターにキャメルのコートを着て、ダークネイビーのコーデュロイのスカートの下にニットタイツを履いている。髪はぎりぎり肩にかからない程度の扱いやすい長さになり揃えている。ハロゲンランプの下で濡れたように輝いているその漆黒の車体を見て、あなたは一瞬ぎくりとする。あなたには三雲くんの車が初めからすべてを知っていて、今夜あなたがこうしてやって来るのをずっと待っていたように思える。

三雲くんがドアハンドルに触れるのと同時にロックが外れる。あなたは迷った末に結局持つていくことにしたバッグをお腹の前に抱きかかえながら車に乗り込む。エンジンが軽快すぎる音を立ててスタートする。角度の急なスロープを抜け、地上に出る。

明日は月曜日だというのに、大通りでは今も少なくない数の車が天界からやってきたプ

ロメテウスのようにせつせとその灯火を運んでいる。人々が移動する理由が尽きることはない。あなたも今度こそはどこかへ向かっているはずだったが、それがどこなのかわからない。六鹿茉莉のところに行かなくてはならないことはわかっていた。あなたは彼女に対してひどい仕打ちをしてしまって、そのことを謝らなくてはならなかったからだ。

だが今のあなたには六鹿茉莉のイメージがまるで水の中で見るといっていい。あの子はいったい何を考えてこれまで私と一緒にいたのだろうか？ あの子は本当のところ何者なのだろう？ あなたをこれほど急いで六鹿茉莉のもとへ駆けつけさせようとしている一番の理由は、おそらくそんな不安だった。

信号で車が停まり、三雲くんが小さな音でラジオをつけると、車内のあちこちに搭載された小型スピーカーからステイヴ・リーマン・オクテットの音楽が流れ出す。たぶん『トラヴェイル・トランスフォーメーション・アンド・フロウ』からの曲だ、とあなたは思う。迷宮を通り抜けるための暗号のような、迷宮そのもののような音楽。

あなたたちは一昨年の夏に東京の郊外で開催されたある音楽フェスティバルで知り合った。二人とも運営のボランティアとして参加していて、音楽そのものにもそれなりに関心はあったが、唯我的になりがちな仕事を離れ、共同作業を通じて息抜きをしたいという気持ちのほうが強かった。同年代の異性と知り合いたいという気持ちも少しはあったかもしれない。他のメンバーの多くが大学生か中年男性だったこともあり、あなたたちは事前の説明会からどちらからともなく言葉を交わすようになった。フェスティバルの最終日、三雲くんは「今度食事でも行きませんか」とあなたを誘った。

テーブルを挟んで話をするうち、普段はお互いにまったく接点のない生活を送っている二人に――あなたは小説を書きながら翻訳や音楽評やその他の雑文で生計を立てていて、三雲くんは外資系の証券会社で働いていた――人と打ち解けることが苦手で、対人関係よりは個人としての仕事に自己のアイデンティティを求めてきたという点で通じ合うものがあることがわかってきた。どちらも早くから自分のやりたいことがはっきりしていて、大学ではいつも閉館間際まで図書館にこもり、将来のための準備に余念がなかった。そのせいか友達はあまりできなかったが、アルバイト先で知り合った年上の仲間たちとは馬が合い、今でも交流を保っていた。仕事が落ち着いてきた現在では以前よりも社交に対して抵抗がなくなり、新しく人と知り合うことに対する飢餓感のようなものさえ生まれてきた。あなたはその当時エヴァ・キャシディやメロディー・ガルドーなどの歌ものの音楽をよく聴いていて、三雲くんはトロントに留学していたときにカナダ人の同級生に連れて行ってもらったいくつかのイベントで生で体験する音楽の素晴らしさを知った。あなたは三雲くんのことを穏やかでロマンティックな男性だと考え、三雲くんはあなたのことを知性と情熱が同居した女性だと考えた。あなたたちはすぐに惹かれ合うようになった。

三雲くんと付き合い始めてから数カ月が経過し、以前から取り組んでいた仕事のうち、著名なアメリカの詩人が書いた庭園に関する随想録の翻訳と、ある独立行政法人の会報のための匿名での書評に一段落がついたとき、あなたは満を持して新しい小説に取り掛かった。

それは——今日に至るまで意識こそしなかったが——いつしかあなたたち二人のための小説になっていた。

おそらくそれがあなたの辿り着いた信仰だったのだ。恋人に対して抱いている思いを言葉でそのまま表現することなどできない。そのような声は入り組んだダンジョンの壁にいつも簡単に阻まれてしまうし（つまりあなたがなぜ突然そのようなことを言い出したのか相手には理解できないし）、たとえ相手に届いたとしても、そこに至るまでに経た無数の反射のために本来の意味と響きはおおかた失われてしまっている。かといって言葉で伝えることをやめてしまったら、二人は価値観の違いがもたらす誤解や不信に捕らわれ、自分自身の気持ちさえ見失ってしまう。その難しさをあなたはさんざん経験してきた。でも言葉にならないものを言葉によって伝える物語の形式を借りれば、ダンジョンはスキップすることができはずだ。子どもの頃に解いたひっかけクイズみたいに、二人は複雑な迷路を外側の余白から回り込み、最短距離で出会うことができるはずだ。あなたは心のどこかでそう信じていたのだ。

でも実際にはそんなことは起こらなかった。四苦八苦の末に書き上げたその『こんなところであたし一人』という題の連作短編集に対する読者や批評家からの反響はこれまでに大きく大きかった。ある批評家は奇しくも「壁」という言葉を用いながら、「自然主義小説や童話、神話などのジャンルの垣根を越えることがとりもなおさず自他の壁の悦ばしくも不吉な崩壊を意味する奇妙な手触りのメタフィクション」と評し、インターネット上には毀誉褒貶入り混じった多くのコメントが書き込まれた（褒めているのは主にその物語的牽引力の高さについてであり、貶しているのは主にその露悪性についてだった）。しかし彼自身言ったように、三雲くんは読者である以前に恋人であり、彼が求めていたのは回りくどい物語などではなく、もつとずつと直接的なものだった。二人のための小説だったはずのものを、三雲くんは二人についての小説だと考えた。

あなたの祈りは届かなかった。むしろそれはあなたたちの関係を壊す方向に作用した。三雲くんがあなたの知らぬ間に抱え込んでいた不安は裏打ちされ、彼の寂しさは決定的に深まった。そのことをあなたは今夜三雲くんに指摘される前からなんとなく気づいていたのかもしれない——最終稿を読んでもらったときの彼の反応は予想よりもずっと控えめなものだったから。あなたはひどく落胆したが、当時はなぜ自分がそこまで落ち込まなくてはならないのかわからなかった。別にどこにもだめ出しをされたわけではないし、普通に褒めてくれたではないか？ それでも無力感はつきまとった。あなたはそこから目を背けるようにしてテニススクールに通い始め、六鹿茉莉と出会った。

信号が青に変わり、三雲くんがアクセルを踏み込む。アルトサックスとドラムが恐ろしい速さで精緻な音の網を紡ぎ出していく中、ヴィブラフォン奏者はゆったりと規則正しく音板を叩き続けている。その音色はまるで来世からやって来るみたいに聞こえる。

私は傷ついている、とあなたは思う。木から落ちて硬い地面にぶつかった林檍のように、深く裂けて。でも私はこれまで林檍のことなんて考えもしなかった。あのアイザック・ニュ

トンのように、私は林檎が落ちることそのものの意味に魅了されていて、落ちてもう二度と木の上に戻ることはない個々の林檎の立場など一顧だにしなかった。それはあまりに現世的なことだから。そんな私に自分は傷ついているのだと主張する権利はないだろう。傷つく権利すらない。

あなたは一つ長い吐息をついて目を閉じ、ヘッドレストに頭をつけて自分の中の空虚に支配権を譲る。身体中から血の気が引き、力が抜けていって、あなたは死にかける。ここでは死にかけることが許されている。自分の足で歩く必要もないし、自分のために料理を作る必要もない。そんな無理をしなくても、三雲くんの車が爆発的な力で夜を分け、あなたをどこかに運んでくれる。

どこでも好きなところに連れていって、とあなたは心の中で車に語りかける。私はあなたが行くところに行く。

2・製造された愛

それは角砂糖を連想させる白くこぢんまりとした三階建てのマンションで、六鹿茉莉は最上階の一室に住んでいる。そのベランダの窓からは明かりが漏れていた。部屋を訪ねるのは初めてだったが、ここはテニスクールからの帰り道だったので、あなたは以前別れ際に聞いて六鹿茉莉の部屋の位置を知っていた。

「ちよっと時間がかかるかもしれないから、おうちに戻ってもらっても大丈夫だけど」とあなたは三雲くんに言う。ひよっとしたらこれが最後の別れになってしまうのかもしれないと思いつながら。

「ここで待っているよ」と三雲くんは言う。

「ごめんね、明日仕事なのに」

三雲くんは西洋人のように小さく肩をすくめてみせる。それは二人がいつも冗談としてやっていた仕草だった。

あなたはバッグを残して車から降り、コートの襟を立てて建物の内側を貫く階段に入る。深夜になると自動的に消灯するようになっているのか、階段は洞窟のように暗い。外からのかすかな光を頼りに三階まで上がると、あなたは目を凝らして表札を確認し、鈴のマークのついた小さなドアベルを押す。覗き穴から外を確認する様子があり——きつと何も見えな

いだろう——ドアが小さく開く。

「ニコちゃん」とあなたの顔より少し低い位置で六鹿茉莉は笑みを浮かべて言う。「びっくりした」

「こんな時間にごめんね。寝るところだった？」

「ううん、一度寝ようとしたんだけどなんだか目が冴えちゃって。ね、寒いから入って」

六鹿茉莉は一度ドアを閉めてチェーンを外し、あなたを部屋に通す。

部屋は広めの1Kだった。出窓になった突き当たりには薄いグレーのカバーがかかったシングルベッド、向かって左には同系色のカーテンを背にして二人掛けのソファがあり、その反対側にローテーブルを挟んで横長の本棚がある。テーブルには読みかけの本が伏せて置かれていた。

「夜だからカフェイン抜きがいいよね」と言いつてパイル地の暖かそうな部屋着を着た六鹿茉莉は右奥のキッチンに入っていく。ごそごそと戸棚を探る音がして、「ルイボスティーか、甜茶か、黒豆茶」と言う声が聞こえてくる。

あなたは甜茶をもらうことにしてコートを脱ぎ、ソファに座る。出窓に目覚まし時計が、本棚の上に小さなサボテンがあるくらいで、物の少ない部屋だった。テレビもコンピュターもオーディオもなく、本も思ったほど多くない。これが自分の部屋だったらさぞかし寂しくて仕方がないだろうな、とあなたは思う。でも大半の時間を自宅で過ごしている私とは違って、茉莉には図書館というもう一つの巨大な部屋がある。たぶん本もそこで借りているのだろう。テーブルの上の『夜中に犬に起こった奇妙な事件』の裏表紙には、六鹿茉莉の勤め

る図書館のバーコードが貼られていた。

キッチンから出てきた六鹿茉莉は本を脇に避けてテーブルに鍋つかみを敷き、その上に湯気を立てている瑤瑤の薬缶を乗せる。ブラジャーを着けていない豊かな胸が服の下で揺れている。化粧を落とした顔は普段よりもむしろ美しく見えるくらいだ。

それから彼女は色違いのマグカップを二つと、大皿に乗ったサンドウィッチを持ってきてあなたの隣に座る。

「サンドウィッチ？」とあなたは驚いて言う。

「あれ、お腹減ってなかった？」

「……減ってるかも」

「お茶はセルフサービスで注いでね」

「ありがとう」

あなたは六鹿茉莉の部屋の話聞きながら（家賃が安いのとベランダが広いのが気に入っていて先月契約を更新したばかりだが、窓が大きいぶん今の時期は少し寒いのが難点だ）煮出した甜茶を飲み、ハムとチーズとレタスのサンドウィッチを食べる。サンドウィッチはぼそぼそしていて味もあまり無かったが、あなたはそれを頬張りながらなぜか突然泣き出してしまいそうな気分になり、ちゃんと全部食べ切らなくては、と思う。

二人ともサンドウィッチを食べ終えて六鹿茉莉が二杯目の甜茶を注いでいるとき、あなたは彼女に尋ねる。「ねえ、私がどうして来たのか訊かないの？」

「何か理由があるの？」

「あるから来たんじゃない」

「そうなんだ。ただ会いたくなっただけかなと思ってた」

あなたは六鹿茉莉の顔をまじまじと見る。こんなに変わった子だっただろうか。しかし具体的にどう変わっているのかと言われると、うまく説明できないような気もした。あなたは確かに彼女に会いたくなってここに来たとも言えた。

「茉莉、私ね、謝りたいことがあるの」

「謝りたいこと？」

「何か……今日の私、変じゃなかった？」

「三人でご飯していたとき？」

「うん。何ていうか、ちよつとしやべりすぎてるみたいな」

「そんなこと思わなかったよ。ニコちゃんが彼氏を紹介してくれて嬉しいなあと思ってた。彼氏、格好良かったね」

あなたは今夜の食事のことを思い出す。六鹿茉莉とも三雲くんとも別個に行ったことのある、ここからほど近い小さなカフェレストラン。初めのうち彼らの表情は少し硬かったが、あなたが橋渡し役としてユーモアを交えながら丹念に情報を共有していくと、二人も徐々にリラックスしていき、やがてほとんど気を遣う必要がないほどの空気が出来上がった。

た。二人のほうからあなたが新たな話題を引き出されることもあり、それがまた別の話題へと滑らかに接続していった。会話は十分に高度を上げて巡航速度に達し、言葉は陽光のように尽きることなく互いの身体に降り注いだ。

六鹿茉莉は酒が飲めなかったし、三雲くんは車を運転しなくてはならなかったのも、毎晩ビールかワインを飲んでいるあなたも今夜は炭酸水で済ませていた。だが時が経つにつれ、あなたは酔いのようなものを感じ始めた。薄暗く暖かい店内ではテーブルごとに置かれた小さなキャンドルがグラスについた細かな水滴の輪郭を照らし出し、談笑の心地よい騒めきがあちこちで潮のようにうねりを伴って満ち干し、ハードウッドの床に置かれた古めかしいスピーカーからは久しぶりに聴くジョニ・ミツチェルの『ブルー』が流れていた。六鹿茉莉はピンク色のリボンがついた誕生日プレゼントをくれた。包みを開けると、それは美しい装幀の施されたD・H・ロレンスの詩集だった。

あなたは今朝起きたときからずっと微弱な緊張を感じていて、店に向かう頃までにそれは三雲くんと初めてデートしたとき以来感じたことのなかったような張り詰めたものに成長していた。あなたはほとんど今夜の食事を中止にしようかと思ったほどだった。もともと極度のあがり症で、そのために会社員時代の社内のしんとした雰囲気にもどうしても馴染めなかったのだが、独立してから数年が経過した今、あなたは親密な場所で親密な人々の力を借りて自らを解き放つことができた。一度たがが外れてしまうと、溢れ出した自我はあなたの臆病さを――それから理性の一部を――問答無用に押し流した。あなたは思ったことを思ったように話し、思った通りの効果を上げることができた。話をしながらあなたは自分が復讐を果たしているような爽快感を感じたが、それが何に対しての復讐なのかはわからなかった。

「六鹿さんのこと、彼女はいつも話しているんですよ」と食事の後半に差し掛かった頃、三雲くんはトマトクリームパスタの手長海老を剥きながら言った。「それこそベッドの中でも」「ちよつと、やめてよ」とあなたは言った。「でも真面目な話、私は性的なことを除いたら女の子のほうが好きなかもしれない。最近よくそう思うの。自分は精神的にはレズビアンなんじゃないかって」

「いやいや、性的に好きじゃないならレズビアンじゃないでしょ。あれはセクシュアリティのことだよ」と三雲くんはすぐに返した。

「あ、そうか」

「なんか二人ってお笑いのコンビみたい」と六鹿茉莉があなたの隣で言った。

「……六鹿さんはいま好きな人はいないんですか？」

あなたは三雲くんのその大胆すぎる質問にぎょつとして彼のことを咎めようと思ったが、言葉を発することはできず、代わりに飲み物を一口飲んだ。あなたと六鹿茉莉は二人でいるときに恋愛についての話をしたことが一度もなかった。その話題はいつもなぜかその場にふさわしくないもののように思えた。三雲くんの存在を知らせたのも今晚の食事の話を待ち掛けたときが初めてだった。

「今はちよっとお休み中です。前に付き合っていた人はいたんですけど」

「長く付き合っていたの？」とあなたは六鹿茉莉のその回答に肩の荷が下りたように感じて訊いた。

「うーんと、二年くらいかな」

「もったいないなあ。もてそうなのに」と三雲くんは言った（ベッドのこともそうだが、三雲くんは普段こんなことを——ましてやこれからできれば付き合いたいと思っている相手に——言うような人ではない。いま考えると彼も混乱し、舞い上がっていたのだと思う）。「別にいいじゃない。茉莉は私のものなんだからね」とあなたはステレオタイプな声優風の声音で言って六鹿茉莉に抱きついた。「誰にも渡さないんだから」

「私が謝りたいのはね」とあなたは中身のなくなったマグカップを両手で抱えて言う。「私が茉莉を物みたいに扱ってしまっていたんじゃないかっていうことなの。そうやって茉莉のことを都合よく利用してしまっていたんじゃないかって」

「利用するって、何のために？」

「自分のために。自分が、三雲くんとの関係を続けるために。あのね、今日の私は少し混乱してしまっていたと思うの。三雲くんと茉莉のあいだで、どういう話し方をすればいいのかわからなくなってしまうていた。三雲くんととの関係を重視するなら私は茉莉を本当の茉莉とは違うものに——何かのキャラクターみたいなものに——作り変えてしまう。茉莉との関係を重視するなら私と三雲くんは茉莉を楽しませるためのお笑いコンビになってしまう。たぶん私はそんな二つのモードのあいだをゆらゆらと揺れ動いていた。でも結局私は三雲くんのことを取ったんだと思う。一度お笑いコンビになることを受け入れてしまったら、もう二度と恋人に戻れなくなってしまうような気がして。ほら、茉莉はいつも私のことを褒めてくれるじゃない？『すごいね』って。それだってひよっとしたら私が無理矢理言わせてしまっていたんじゃないかって思うの。私のことを崇拜するように、知らず知らずのうちに圧力をかけて」

「でも私はニコちゃんのこと本当にすごいと思ってるんだよ」と六鹿茉莉は言う。「初めて名前を聞いたときはびっくりしたし。新しい小説もすごく感動したし。そんな人と友達みたいになってるなんて今でも不思議で。それだけで十分嬉しいのに、彼氏より優先してもらおうなんて思うわけがないよ。それに私のことを作り変えるって言ったって、嫌な感じに変えられちゃうのは困るだろうけど、ニコちゃんはそんなことはしないでしょ？」

「違うの、茉莉。私がしていたのはもっとひどいことなの。私、あなたと一緒にいるとよく尊敬の念に打たれたのね。茉莉は自分という存在を他人のために使うことができる人なんだって。でも同時に罪悪感も感じていた。私は自分のことを自分だけのために目一杯使うことをもう長いこと習慣にしまっていたから。あなたと知り合うまで、ずっとそうすることがこの世に生を享けたことに対する真摯な態度なんだと思っていた。全力を尽くしてやるべき仕事にあたるのが。私の小説がある程度評価してもらえたのはそういう態度のおかげなのかもしれないけど、それによって私は何を手にしてきたんだろうと考えると怖く

なる。自分自分、いつも自分じゃないかって。

私はあなたと違って、上手に人を愛することができない。三雲くんのこともちやんと愛せなかったし、自分自身のことも愛せなかった。あなたと出会うまで、私は自分に愛が欠けていることをあらゆる手段を使ってごまかし続けてきた。外を走ったり、お酒を飲んだり、いつまでも寝ていたり、旅行したりすることもそうだったし、洋服にお金をかけたり、髪型を変えたり、セックスしたり、恋人と別れたりすることなんかもみんなごまかしの手段だった——たぶん、小説を書くことでさえも。でも私はいつも満ち足りなかった。二十代の終わりが近づくにつれて、逆にどんどん不幸になっているような気がしていた。そんな人間に長い期間にわたって恋人のことを引き留められるわけがないことにも気づいていた。

でもあるとき、あなたのことを話せば三雲くんの一つになれることがわかったの。私たち、特に外で飲んでいるときなんかには会話がうまく続かなくなってしまうことがあったんだけど、あなたの話をしているときにはそんなことは決して起こらなかった。沈黙に対する不安なんかどこかに消え失せて、いつまでだって話し続けることができた。あなたについての話がいつの間にかこの世界についての話だとか、そこでどう生きていくかについての話にどんどん派生していったりして。

三雲くんからも茉莉がどうしているか訊かれることが増えたから、私はあなたのことをもつともつと知りたいと思った。どんなことが好きで、どんなことが嫌いなのかとか。どんなところで生まれて、どんなふうに育ってきたのかとか。そういうこと、私よく訊いていたでしょう？ でも私はあなたの本当にプライベートな部分に触れることは注意深く避けていた。特に恋愛のことは。それはきっと、もしあなたに昔の恋人の話を詳しく聞かされたり、ましてや今現在好きな人や付き合っている人がいたりしたら、私の中で何かが終わってしまうと思うからなんだと思う。そしたら私は三雲くんにあなたの話ができなくなつて、私たちの関係はまたぎくしゃくしたものになってしまうだろうって」

六鹿茉莉はソファの上で両足を抱え、膝の上に顎を乗せてあなたの話に耳を傾けている。柔らかな黒髪が月明りに照らされたさざ波のようにたわんで頬にかかる。なんて可愛い子なんだろう、とあなたは改めて思う。

「今日帰った後に三雲くんといろんな話をしたんだけどね、どうして自分がそんなふうと考えていたのか、やつとわかったの。あなたは私だったの。あなたは私の愛だった。だからあなたには別の恋人がいてはならなかった。自分の愛が自分の外側にあるなんて変な話だけど、あなたを通すことで私は初めて自分の心の一番ソフトな部分に接続して、これまでなることのできなかった人間になることができたの。愛のある人間に。」

よく若い女の子なんかでテレビや雑誌に出ている同性の子に対して『可愛い』って言う人がいるじゃない？ そういう可愛い子の画像を携帯電話の待ち受け画面に使ったりして、でも特に自分がその子みたいになろうとしているわけではない、みたいな。私はこれまでそういう子たちの気持ちたちが全然わからなかったんだけど、きっと耐性がなかったぶん、余計にあなたにはまっぴらだったのね。あなたと初めて会った頃、私は何かの中毒患者みたいにこ

れまでの生活が急に色褪せて見えて、昼も夜もなくあなたのことを考えていた。こういう人が生きているんだから、世の中もまだまだ捨てたもんじゃないなとか思いながら。

でも私の不幸はそれだけでは飽き足りなかった。乾いてひび割れた地面がいくらでも水を吸い込むみたいに、私はあなたを骨までしゃぶりつくそうとした。自分には手の届かなかった夢を娘を使って叶えようとする母親みたいに、私はあなたを使って三雲くんのための愛を造り出した。ついに私は自分の幸福のために自分と同じ生身の人間を利用するようになってしまった。

だから今の今まで、私は一人の人間としてのあなたの気持ちなんて微塵も考えたことはなかったの。あなたのことを痛みなど感じるはずのない愛の化身みたいなものだと思い込んでいた。私はそのことを謝りたいの。いま思い出してみても、私は茉莉に対して何度も無礼な話し方をしてしまっていたと思うから。服装や運動神経のことを笑いぐさにしたり、あなたの見た目の美しさについていつまでもしつこく話したり。

そのことによりやく気づいた今でも、私は本質的には変わっていないのかもしれない。私はあなたが本当はどんな人なのかまだわかっていないと思うし、その空白のようなものを埋めようとして、今後はもう絶対に自分の馬鹿みたいな妄想をあなたに押しつけないと言いつつ切れないような気がするから。自分で自分のことが信用できないっていうか」

あなたが話を終わると、六鹿茉莉は一人でうんうんと頷き、それからあなたに微笑みかけてこう言う。

「ニコちゃん、話してくれてありがとう。大変な時間を過ごしていたんだね。でもそんなに自分のことを責めなくても大丈夫だよ。私はニコちゃんがひどいことをしたなんて思っていないから。ニコちゃんが彼氏と仲良くなるためのお役に立てたのなら、私はすごく嬉しいよ」

六鹿茉莉のその言葉を聞いたとき、あなたの中におもちゃの太陽のような、光り輝く小さなかたまりが生まれる。何だろう、とあなたが思う間もなく、そのかたまりは急速に膨張して逆にあなたを外側から包み込み、あなたは自分が猛烈に腹を立てていることを知る。それが六鹿茉莉の返事があなたの話の内容をあらかた無視しているように感じられたためなのか、彼女の最後の一言が図らずも持つてしまった鋭い棘のためなのか、何か他の理由のためなのかはわからなかったが、込み上げてくる怒りの激しさはあなたにとってあまりにも予想外のものだったので、あなたはそれを抑え込むことに失敗してしまう。

「それだけなの？」

「え？」

「それだけしか言ってくれないの？」

「それだけって？」

あなたは深くため息をつき、それから強い口調でこう言う。

「あのさ、どうしてあなたはそんなふうにいつもいい子なの？ どうしてそうやっていつも他人に合わせてご機嫌取りみたいなことをするの？ 嫌なことをされたら怒りなよ。他

人に欠点があったら直すように言いなよ。そうすることが優しさになることだってあるんだよ。あなたのそういう態度が一緒にいる人間を悪者にしてしまうこともあるということにわからないの？ 何も知らないみたいなの顔をして、本当は私があなたのことをどんなふうに見ていたか、ずっと気づいていたんでしょ？ なのにどうして何も言わないの？」

目を見開いてあなたの顔を凝視したまま凍りつく六鹿茉莉の様子に、あなたは、しまった、と思うが、とつさに次の言葉が出て来ず、視線を外してしまう。その不作為の隙間を埋めるように後悔がなだれ込んでくる。私はなんてことを言ってしまったんだろう。加害者である自分に、どうして重ねて茉莉を虐げるような真似ができたのだろう。

それからあなたは自分が心の奥底で六鹿茉莉に対して抱いているのが深い軽蔑心であることに気づいて愕然とする。私は茉莉のことをいつも下に見ていたんだ。だから私は茉莉を利用することをためらわなかったんだ。いま腹が立ったのも、茉莉が私の期待した通りの返事をしなかったからなんだ。これからはもっと——私が腹を割って話したのと同じくらい——自分のプライベートな部分を開示してほしいという私の暗黙の要求を茉莉が言外に拒んだからなんだ。

二人とも黙り込んだまま、極度に緊張した時間が過ぎていく。過ぎていくというより、ほとんど止まってしまったみたいだ。あなたは時間というものをこれほど鈍重に感じるのは初めてだった。天井の照明から降り注ぐ光線の一本一本が目に見えるようだった。光線は蛍光灯から放射状に広がっていき、この気まずい状況に対してだんまりを決め込んでいる壁や家具を詰る^{なじ}ようにその表面にぶつかる。壁や家具のほうはと言えば、「自分たちは主体性を持たない単なる幾何学的構造物にすぎないのだから、どんな責任も発生しないはずだ」と主張するように光線を跳ね返す。跳ね返されたすべての光線はまるで初めからそう運命づけられていたかのように二つの点に集束し、あなたの両目の網膜を突き刺す。

六鹿茉莉の生活の場であるこの部屋をそんな訳のわからない空間に変えてしまったことを申し訳なく思い、あなたはこの状況を脱したいと思う。しかしあなたは自分の身体を——目線さえ——動かすことができない。

私は三雲くんを失い、今こうして茉莉を失おうとしている。私はこれからどうやって生きていったらいいのだろう。

その小さな永遠の中であなたはそう思い、ああ、この期に及んでまだ自分のことを考えるのか、と呆れる。すべては自ら引き起こしたことではないか。しかし誕生日の夜に立て続けにやってきた二つの関係の崩壊は衝撃的すぎて、あなたは安全な場所へ逃れようとする思考を止めることができない。

あなたは他の友人たちのことを思い出す。数は少ないが学生時代の友達はあるし、職場で親しくなり、楽しい時間を共にした人たちもいる。しかし考えてみればこのところはSNS上で近況を確認しているくらいで、もうしばらく誰とも会っていなかった。特に三雲くんと付き合い始めてからは行き来が途絶えてしまっている。連絡を取ろうと思えば取ることは

できるだろうが、彼女たちも今ではあなたの知らない男性と家庭を持ち、そうでなければあなたの知らない仕事に忙殺され、そうでなければあなたの知らない趣味に打ち込んでいる。少なくともそれが——「私たちにはすでに送るべき生活がある」というメッセージが——彼女たちの発信する情報からあなたが受けた印象だった。そんなところに恋人と親友（のつもりでいた相手）を同時に失った傷心の人間が闖入していったらどうしようと言うのか？

逆に何の情報も発信していない友人に連絡するのは気が引けた。あなた自身もそんな人間の一人だったが、昨日までの自分が久しぶりに連絡してきた友人にどこまで親身に応対できたかは怪しいところだった。表面上は慇懃に振る舞ったかもしれないが、「これ以上は入ってきてほしくない」という一線をどこかで引いてしまうような気がした。そしてそれは今のあなたが人から一番されたくないことだった。

それでもどこかにまだ見ぬ友達がいるのだろうか、とあなたは思う。三十を過ぎてても、深いところまで心の通い合う友人は作れるもののだろうか。でももし私に興味を持ってくれる人が現れたとしても、その人に自分のことをちゃんとわかってもらうには、私は一人きりの時間を長く過ごしすぎてしまったような気がする。迷路を複雑にしすぎてしまったような気がする。

あなたは自宅に防壁のように高く積まれた本の山を思い出し、自分がまるで絶滅危機言語の最後の話者みたいに残りの人類とのコミュニケーション可能性を完全に失ってしまったように感じる。新たな言語を習得するだけの気力ももう残っていない。小説？ あれは違う。あれは自分自身のためのちよつと早めの墓参りみたいなものだ。気力さえあれば、私はそこに何かを供えられるかもしれない。でもそうでなければ私はただ墓石の厳然たる存在感に打ちのめされるだけだ。

六鹿茉莉のほうから何かを言ってくれることを期待してみてもみるが、彼女が何も言わないことをあなたは知っている。自分のことであれ他人のことであれ、六鹿茉莉はネガティブな事柄には決して触れようとはしないのだ。悪いのは自分だとは知りつつも、あなたはそのことをすぐくずると思う。しかしこれまでもそうだったように、そのようなずるさを感じれば感じるほど、あなたはどうしようもなく彼女に惹かれてしまう。そこにはあなたがもう思い出せないほど昔に自分に禁じてしまったが、決して忘れてはならなかったはずの大切なものがあるような気がするからだ。何か子どものように真率なものが。

でもいい加減私は大人になり、そこから身を引き剥がさなくてはならない、とあなたは思う。コットンにナイロンを織り込むように、いくらかのフェイクを受け入れながら強度と速乾性のある生活を送っていかなくてはならない。罪の告白をしたかと思えば怒ったり後悔したり絶望したり、このままでは頭がおかしくなってしまう。

「ごめん今日は帰るね」とようやく——実際には五分か十分くらいしか経っていなかったのかもしれないが——時の呪縛から解き放たれたあなたは口ごもるように言ってコートを抱え、ソファから立ち上がって足早に玄関に向かう。靴を履いていると、外の厳しい冷気の気配が感じられる。

あなたが玄関の鍵を外そうとしたとき、「ニコちゃん、待つて」という声が後ろから聞こえる。

3. まるつきり別の話

あなたは振り返る。玄関とリビングのあいだに掛けられた白いストリングカーテンの向こうで六鹿茉莉はうつむいていて、その表情は髪に隠れている。

「ニコちゃんが私のことを作り変えてしまうのは当然のことなんだよ」と六鹿茉莉はやつと聞こえるくらいの小さな声で言う。「だって、本当の私なんてどこにもいないんだから。それは仕方のないことなんだよ」

「茉莉はみんなから愛されているでしょう」とあなたは先ほどの失態を取り返すように丁寧に話す。「それはみんなが茉莉の人柄を愛しているからだよ。それは他の人にはない、茉莉だけのものだと思うよ。前に図書館に行ったときだって——」

「ニコちゃん、今も私のこと作ってるよ」

あなたの話を途中で断ち切って入ってきた六鹿茉莉のその声にあなたは底知れぬ暗さのようなものを感じて、言葉が続かなくなる。

「みんなは別に私のことを愛しているわけじゃないと思う。たぶん、私の中に立ち入りたいたけなんじゃないかな」

「立ち入りたい？」

「持ち主のいなくなった空き家に入るみたいに。外は寒かったり怖かったりするから、そこから避難して、何もかも忘れたいんだと思う」

あなたの頭の中に一軒の空き家が思い浮かぶ。ロールプレイングゲームのように屋根の省略された、斜め上から見下ろされた小さな平屋。かつての家主の趣味嗜好を推し量るための家具や小物は何もなく、ただがらんとした空間だけがそこにある。玄関の鍵はもうずっと前に来た最初の誰かによって壊されていて、扉の前では影のように見分けのつかない人々がぞろぞろと行列を連れ、互いに口を利くこともなく行儀よく自分の順番を待っている。空き家の中でほんの束の間の温かみを感じるために。彼ら自身の家がどうなったのか、それは誰も知らない。区別はつかないが、行列の中には灰色の顔をしたあなたもいるはずだ。

あなたは背後のドアをちらりと見て、誰かが——例えば私のことを待ちかねた三雲くんが——突然ノックをしたら、私の心臓は止まってしまいかもしれないと思う。

「私、小学生の頃からいじめみたいなのに遭っていて」と六鹿茉莉は言う。「女の子同士なのにスカートをめくられたりとか、トイレを覗かれたりとか、教室移動のときに私の机を使った誰かにリコーダーのケースを切られていたりとか。中学に上がるとみんな大人びてくるから最初は普通に仲良くしてくれるんだけど、長い時間一緒にいるとだんだん私をからかうみたいな調子になってきて、携帯電話を取られて勝手に見られたり、服を無理矢理脱がされたりしてたの」

身体が冷えてきたが、あなたはもうしばらくここにいたほうがいいだろうと判断して抱えていたコートを音を立てないように羽織る。

「そういうことするのって子どもだけじゃないんだよね。ニコちゃんは私が司書さんに可

愛がられてるって思っていたんでしょ？　でもあの人は上の人と外の人に対して愛想がいいだけ。私、就職した初日から本の並べ方がどうかで裏に連れていかれてものすごい剣幕で怒られたんだよ。それからも事あるごとに理不尽に叱られたり無視されたりしてる。職場の別の女の人も味方につけるみたいなことをして。テニスを始めたのはそういうことにうんざりしていたからんだけど、あそこの人たちにもミスをするたびにくすくす笑われてるんだよ。何人かで示し合わせるようにして、私にわかるようにすごく嫌な顔で笑うの。あの人たちはニコちゃんのことを怖がっているから、ニコちゃんは気づいていないかもしれないけど」

「私のことを怖がってる？」

「そうだよ。あの人たちはニコちゃんを怒らせるようなことは絶対にしないようにしてる。ニコちゃんが持っている生命力みたいなものに太刀打ちできないっていうことが最初からわかってるから」

生命力、とあなたは**つぶや**く。それはあなたが自分について考えるときに出てくるいくつかの言葉とは正反対の性質のものだった。

「ニコちゃんは何かを言ったりやったりするときの確信って言うのかな。一つ一つの行動にちゃんと体重が乗っている感じが怖いんだと思う。たぶん裏では悪口を言っているんだろうけど。私、そういうのすぐにわかるの。誰が何を怖がっているかとか、何を求めているかとか」

あなたは六鹿茉莉がこのような話し方をするのを見るのは初めてだった。やっぱりこの子は全部わかっていたんだ、とあなたは思う。それもおそらくは私が思っていた以上に。

「でもね」と六鹿茉莉は少し顔を上げて続ける。「私にそういうことをしてくる人たちは誰も——同級生だった女の子たちも、司書さんも、テニススクールの人たちも——自分がひどいことをしているっていう意識は全然ないんだと思う。みんな私と一、番、気、持、ち、の、い、い、時、間、の、過、ご、し、方、を、し、て、い、る、だ、け、で。だから、『どうしてそんなひどいことをするんですか』って訊いても、あの人たちは何のことを言われているのか理解できないだろうと思う。しらばっくれてるとかじゃなくて、本気で」

「そうかもしれないね」と自分のことを顧みてあなたは言う。

「私さえ反応しなければ、あの人たちの行為はこの世に何の痕跡も残さずに、風みたいに空の中へ消えてしまう。だから何が起こっても、これはあの人たちの問題なんだって考えるようにしてた。家庭とか学校とか職場とか、そういういろんな場所で生じるストレスみたいなものにあの人たちは対処できなかったり、対処できるということを知らなかったり、そもそも自分にストレスがかかっていることに気づかなかったりして、そういう歪みみたいなものが私を通して出てきてしまっているんだって。そう思ってしまうべきだいたいのことは耐えられた。でもニコちゃんの言う通り——」

そこまで言ったところで六鹿茉莉は言葉を詰まらせ、何かと闘うように呼吸を止める。あ

あなたは六鹿茉莉が次に何を言うのかを知っていて、自分の言ってしまったことを和らげるような言葉をかけたくなる。でももう手遅れだった。今さら撤回するには、あなたは自分の発言に確信を持ちすぎていた。

六鹿茉莉は子犬が鳴くような音を立てて咳払いをしてから、再び口を開く。

「ニコちゃんの言う通り、私も悪いんだと思う。もしかしたらそうなのかもしれないと思ってはいたけど、やっぱり私のせいで周りにいる人たちが悪者になってしまっている部分はあると思う」

「私は茉莉が悪いって言いたかったわけじゃないの」とあなたは言う。「たとえ茉莉が人のどろどろした部分を引き出してしまっているのだとしても、だからと言って茉莉が悪いということにはならないでしょう。その二つは絶対に区別しなくちゃいけないことだよ。悪いのは、自分から出てくるものの意味を考えないまま、それを現実其他人の中に持ち込んでしまう人たちなんだよ」——私みたいに、とあなたは最後に思ったが、自己憐憫めいて聞こえそうだったので言わないことにした。

「でもニコちゃんが私の中に持ち込んだのは愛でしょう？」と六鹿茉莉はあなたの心の声を察したように言う。「だから私はニコちゃんと一緒にいるのが好きなんだよ。ニコちゃんと一緒にいると、自分が見どころのある、特別な人間に変身できるような気がするから」

「それが茉莉に対する愛だったらよかったんだけどね。私が考えていたのは三雲くんと私自身のことで、茉莉のことじゃなかった。ひどい話だけど、極端に言って私は誰でも良かったんだと思う。自分の役に立てば、あなたじゃなくても」

「愛に行き先なんてあるのかな？」と六鹿茉莉は自問するように言う。「人が誰かを本当に愛しているんだとしたら、それはこの世にいる人たち全員のことを愛せるっていうことだし、もし一部の決まった人たちのことしか愛せない人がいるとしたら、その人は本当は誰も愛していないんじゃないかな。愛つてもともと『誰でも良い』ものなんじゃないかな」

あなたにはよくわからない。もし六鹿茉莉の考え方が妥当なのだとしても、あなたが当てはまるのは後者の人物であるような気がした。街ですれ違う男性たちとセックスしたいと思ってしまう性依存症一歩手前の女に、本当の愛なんてあるわけがない。

「茉莉は前の彼氏とどうして別れちゃったの？」とあなたはふと思いついて尋ねる。「二年間だっけ、付き合っていたんでしょう」

「ニコちゃん」

「何？」

六鹿茉莉のほうを見ると、彼女は正面を向いてなぜか少し笑っているように見える。あなたが玄関に来てから、六鹿茉莉はまだあなたのほうを一度も見えていない。おそらくこの豪雨のように白く垂れているストリングカーテンのせいで、明るい部屋の中にいる茉莉からはこちらの姿がよく見えないのだろうとあなたは思う。

「ごめん、ニコちゃん。私、嘘ついた」

「嘘？」

「私、本当は男の人とちゃんと付き合ったことがないの。でも今日のあの場所でそんなこと言ったら変な空気になっちゃうかと思って、嘘ついちゃった」

「付き合ったことがないって」とあなたは驚いて言う。「これまで、一度も？」

「いや、付き合ったことはあるんだけど……そう、いう、関係にならなかったっていうか」

「どうして？」

「うーん……なんでだろう」

「男性が好きじゃないっていうことではないの？」

「女の人のほうが好きかっていうこと？ ううん、そうではないと思う」

そこで会話はふつりと途切れる。あなたは話の続きをしたいのだが、何から訊けばいいのかわからない。あなたがこれまで獲得してきた世界観、あなたの考えるこの世界の動き方では、六鹿茉莉のように魅力的な――過度に魅力的な、と言ってもいい――女性が二十四歳でまだ処女であるという事実の説明がつかない。互いに好意を持っている男女が付き合ったら、普通は性行為をするものではないだろうか？

いや、まったく説明がつかないわけではない。あなたの頭の片隅では一つの可能性が何かの機械の警告ランプのように赤く閃いている。しかしあなたはその可能性をあまり追求したいとは思っていない。それはあくまでもどこか別の場所で、本や映画やニュースの中で起こっていることであり、その事例に現実遭遇するとは思えないし、遭遇したくもないからだ。それに三か月前に『こんなところでただ一人』を刊行したばかりで、今のあなたはその種の可能性に過敏になっているのかもしれない。何の関係もないことまでそういう目で見ようとしてしまっているのかもしれない。

目の前の白い壁を眺めながらそんな出口のない考えに頭を巡らせていると、あなたはそろそろこの暗くて狭くて寒い空間から出たくなってくる。もう話の続きなんてどうでもいいような気もしてくる。早く帰って、熱いシャワーを浴びて、ぐっすりと眠りたい。今まで緊張していてわからなかったけど、トイレにだって行きたいような気がする。いい加減遅い時間になってしまったし、三雲くんのことと茉莉のことと今日はひとまず持ち越しということにすればいいじゃないか。

一方には六鹿茉莉のいるリビングがあり、もう片方にはマンションの廊下に通じるドアがある。一声かければ六鹿茉莉はあなたの好きなほうに行かせてくれるだろう。しかしその両方のパターンを頭の中でシミュレーションしてみても、あなたはどちらの選択肢もひどく間違っているように感じる。何に照らし合わせて間違っているのかはわからなかったが、まだ何かが終わっていないような感覚があった。一度描き始められた円が、まだきちんと閉じていないような。

「私ね」と六鹿茉莉は言う。「子どもの頃にたぶん電車の中で痴漢に遭ったんだ」

「たぶんって？」

「そのことをずっと忘れていたの。大学に入った頃、アルバイト先の本屋さんで初めての彼氏ができたんだけど、何度目かのデートの終わりに『これからうちに来ない』って誘われて。

私は彼のが好きだったから、『うん、いいよ』って答えた。でも私、電車の中で二人で並んで立っているうちに我慢できないくらい気持ち悪くなってきちゃって、途中の駅で降りて吐いてしまったの。

彼は背中をさすってくれたり、水を買ってきてくれたり、震えてベンチにうずくまっていた私を一生懸命介抱してくれた。それから『今日はどうしようか』って訊いてくれたから、私は自分の家に——その頃はまだ実家に住んでいたんだけど——帰ることにした。

次の朝起きてみると、私は外に出られなくなっていた。授業があるから大学に行かなくちゃって思うんだけど、どうしても玄関のドアが開けられなくて。次の日も、その次の日も同じだった。ご飯も食べられなくて、食べてもみんな吐いてしまった。それで私は大学を休学して、アルバイトも辞めて、母親に連れられて病院に通うことになった。

何カ月か薬を飲んだけどあまり効果がなくて、拒食症もひどかったから、お医者さんが別の施設のカウンセラーさんを紹介してくれた。そのカウンセラーさんのところで話しているうちに、ふいに昔の記憶が甦ってきたの。通学中の満員電車の記憶が、映画みたいに鮮明な映像で。私は十歳くらいで、小学校の制服を着てカバンを提げている。私の後ろには大人の男性がぴったりと密着している。私はその人の動物みたいな甘酸っぱい体臭さえ思い出した。それと似たものを彼と電車に乗っていたときに嗅いだこともわかった。それで気持ち悪くなっちゃったんだって。

その記憶を思い出した瞬間はパニックになってしまったんだけど、それから私の症状はみるみる軽くなった。体重も増えてきて、家の周りを一人で散歩できるようになった。休学して一年後にはほとんど全快したような気がしたから、ある日、大学に行ってみることにした。

でも明るい気分が続いたのは最寄り駅に入る階段の前までだった。そこで地下鉄の金属的な走行音だとか布張りの座席のこもったような匂いを思い出して、足がすくんでしまったの。気持ちが落ち着くまでと思っで一時間くらいその場に立っていたんだけど、だめだった。電車に乗ったらまたすべてが振り出しに戻ってしまいそうでした。

それで大学のそばで一人暮らしを始めることにした。それ以来、私は一度も電車に乗っていない。図書館に就職が決まったときにも時期を合わせてここに引っ越したし、どうしても遠くに移動しなければならぬときにはバスやタクシーを使ってる。お金もかかるし、行ける場所も限られてしまうから不便なんだけど、しょうがないよね」

あなたは心臓の鼓動が異常に高まるのを感じながら、「彼氏とはどうなったの」とできるだけ落ち着いた声で尋ねる。

「彼はずっと自分のせいで私が外に出られなくなってしまうんじゃないかって気にしてた。家に誘うのが早すぎたんじゃないかって。そんなわけないんだけど、彼も私が初めての恋人だったみたいだし、わからないことだらけだったんだと思う。私自身もその頃は何が原因なのかはつきりしなかったから、彼にそう思わせずに済むような話し方をするのができなかった。直接会えるような状態でもなかったし、そのうちに連絡は途絶えてしまったの。

でも復学してしばらく経った頃に彼から電話があった。私が本屋さんで仲良くしていた女の子からそのことを聞いたんだって彼は言った。気持ちが変わっていないから、良かったらまた会ってほしいって。

私は彼と会って、一年のあいだに起こったことを話した。小学生の頃の出来事も含め、全部。彼はびっくりしていたけど、自分が悪かったわけじゃないということがわかってほっとしてもいたみたいだった。私の話が終わると、『大変なこともあるだろうけど、二人で頑張っていこうよ』って彼は言ってくれた。私も同じ気持ちだったから、彼とまたやり直してみることにした。でも私は相変わらず性的な関係が持てなくて。電車を使わずにお互いの部屋に行ってみたりしたんだけど、行為を始めようとするをやっぱ途中で気分が悪くなってしまっただけだった。

そんなとき、私は彼の部屋の本棚に性的虐待についての本があるのに目を留めた。そのときは勉強してくれているのかなと思っただけで何も言わなかった。でもそれから彼の部屋を訪ねるたびに本の数は増えていった。最初は新書だけだったんだけど、そこに分厚い専門書や洋書も加わるようになって。それについて訊くと、彼は『すぐくためになるよ』と言って——私はそのときの彼の顔が今でも忘れられないんだけど——にやりと笑った。そして『この本を読んでみたら』とか、『こういう治療法もあるみたいだよ』とか、彼は私に勧めてきた。私は引越して以来カウンセリングを受けていなかったから。でも私は自分の内面のことなんてもうしばらくは考えたくないかったの。ようやく人並みの生活に戻ることができて、遅れを取ったぶん勉強しなくちゃと思っていたところだったから。私は彼の提案を聞くともなく聞いていた。

そしたらあるとき彼が、私の記憶は『虚偽記憶』なんじゃないかって言って。彼が読んだ本によれば、人ってカウンセリングの仕方によっては本当に起こったわけではない出来事を思い出してしまうこともあるんだって、特に性的虐待についての記憶を。それで一時期アメリカでは犯人の嫌疑をかけられた人たちがセラピストを相手取ってたくさん訴訟を起こしたんだって。

『そんなはずないじゃない、こんなにはつきりと思いつけるのに』って私は言った。

『でも自分のことを外から見てる映像だったんだよね？ それに昔の記憶がぼんやりしているとも言っていたから』と彼は言った。

確かに私の思い出した映像はものすごくリアルだったけど、匂い以外に身体感覚みたいなものもないし、どこか客観的っていうか、他人事のような感じもした。私の子ども時代の記憶が以前から曖昧なのもその通りだった。

『虚偽記憶ってインセストに関するものが多いみたいだから六鹿さんの場合に当てはまるのかどうかわからないけど、一度病院で訊いてみたらいいんじゃないかな』って彼は言った。『どうして私のことを疑うの』と私は言った。『私がそういう被害を受けたことをそんなに認めたくないの』

『そうじゃないよ。もし記憶が本当なんだとしても、僕はやっぱりもう一度病院に行っただけでいいよ。』

しいと思う。僕には自分の目の前で恋人が苦しそうにしているのを見ながら放っておくことなんてできないんだよ』

『苦しくなんかない。私はもう今は特に支障なく生活できているんだよ』

『セックスもできないの？ あ、ね、今の生活に支障がないって感じるのも病気のせいだと思うんだ。狭窄って言って、意識が狭められてしまうこともあるみたいだから』

『私は病気なの？』と私は叫ぶように言った。

『PTSDが病気ならね』と彼は冷たい声で言った。『でも僕は病気っていう言葉で六鹿さんに対して何かの烙印を押そうとしているわけじゃないんだよ。僕が言いたいのは、今の状況は少しも君のせいではないし、適切な処置を取りさえすれば必ず良くなるんだっていうこと。カウンセリングを受けることが六鹿さんにとって怖いことであるのもわかっているつもりだけど、早いうちにちゃんとしたケアを受けておかないと、人生の貴重な時間を棒に振ってしまうんじゃないかと思うから』

『私のことが嫌なら別れればいいじゃない』と私は言った。

『嫌なんじゃない、真逆だよ。この話をするかどうかはずっと迷っていたんだけど、真剣に六鹿さんのことを考えて、やっぱり言わなくちゃって思ったんだ。僕も最後まで責任を持つて支えるから』

でも私は彼と別れることにしたの。何日か考えてみて、健康でいてほしいと願ってくれる気持ちにはありがたかったけれど、彼の言葉からは何か大切なものが抜けているような気がしてならなかったから」

「悲しい話だね」とあなたは言う。

「いま考えると、私は彼が私のことよりも医学っていう客観的な尺度を優先したことが許せなかったんだと思う。私たちの関係にはとりあえず私と彼しかいなくて、たとえ私がどんなに病的に歪んでいたとしても、たとえ私の記憶が偽物だったとしても、それを認めるところからスタートするしかないのに、彼は何よりもまず私たちの外側にある世界を信頼していた。そうして彼は目の前にいる私とは別に、私の『本来あるべき姿』みたいなものがあるはずだと考えた。でも私は自分がそういう記憶を持っていることを苦しいとか悲しいとか思っているわけじゃなかったの。それはただそこにあって、分かちがたく私の一部になっているものだった。過去としてではなく、現在として。だからそれを病気として、治すべきものとして否定されるのは私自身を否定されるのと同じことだったし、私はこの街のどこかにはそんな自分のことをまるごと肯定してくれる人だっているはずだと信じていたの。気づくのがちよつと遅かっただけで、茉莉はもともと電車が苦手な人で、もともと性的なことがあまり好きじゃない人なんだって。それは私の持つて生まれた個性、みたいなものなんだって。だって痴漢に遭ったせいで電車にも乗れないし性的な関係も持てないなんて、そのまゝなますぎるでしょう。なんだか出来の悪い小説みたいじゃない？」

「そうだね」

「最近ね、彼が言ったみたいに、私は人生を無駄に過ごしてきてしまったのかもしれない

と思うこともあるんだ。本当の私は子どもの頃に自分の中のどこか深いところに消え失せてしまつて、それ以来、私はロボットみたいに人工的に作られた間に合わせの存在になつてしまつたんじゃないかつて。そう考えるとすごく怖くなる。ニコちゃんに昔の個人的な話をあまりしなかったのは、ここにいる私が本当の私なんだつて認めてほしかったからなんだと思う。そんなふうに自分のことを隠しながら会っているような人間が嫌われてしまうのはしょうがないとも思うんだけど」

「どう言つたらいいのかわからないけど」とあなたは言う。「私が茉莉に対して複雑な気持ちを抱いているのは事実で、今日みたいにそれが爆発してしまう日もあるけど、私はあなたと一緒にいることでいろんなことを教わっているよ。あなたほど強く引きつけられる人には会つたことがないし、あなたほど人間らしい人に会つたこともない。それはたぶん、あなたが一つの真実のようなものを生きているからなんだと思う。たとえそれが嘘を孕むことによつて成立しているものであつても」

「ありがとう……あのね、私が『モンテ・クリスト伯』で卒論を書いた話はしたよね？」

「うん、聞いたよ」

「あの小説の一番いい場面はね、もう物語も佳境に入つて、パリに乗り込んできたモンテ・クリスト伯がいよいよ本格的に過去の恨みを晴らすぞつていうときに、昔の恋人だったメルセデスと対面するところなの。恨んでいたはずの恋人と久しぶりに話をするこゝで、モンテ・クリスト伯が時間をかけて準備してきた復讐の計画があつという間に破綻して、それまでずっとあの長い小説の推進力になつていた前提みたいなものが一気に覆されてしまうところ。物語が暴発して、作品の構造そのものを壊してしまつていうか。そこからあの小説はまるで生まれ変わったみたいに別の話になつていく。復讐譚から、愛の物語に。私にはそれがものすごく過激なことに見えるんだ」

そんな前衛的な話だつたつけ、とあなたは思う。あなたが『モンテ・クリスト伯』を読んだのは中学生の頃で、ほとんど乱暴なまでに面白い小説だと思つた記憶はあるが、死体のふりをして袋の中に入った主人公が海上の牢獄から海へ投げ落とされ、そこから岸まで泳いで見事に脱獄を果たす印象的なシーン以外、内容はほとんど忘れてしまつている。

「そういうのってさ、現実にも起こると思う？」と六鹿茉莉は訊く。

「一つの話が途中で終わつて、まるつきり別の話が始まること？」

「うん」

あなたには何も答えられない。あなたは十四年間投獄されていたこともなければ、二十四年ぶりに復讐の相手と再会したこともない。あなたはその質問に答えられるほど長くも激しくも生きてはいない。

茉莉、とあなたは打ちひしがれた気持ちで思う。茉莉、茉莉。私にはわからない。私はこれからもあなたのそばにすることができるだろうか？ もしそれができるなら、私も胸を張つて自分には愛があると言えるのかもしれない。でも愛などというものを持つには私はあまりにも非力で、ものを知らなさすぎるのではないだろうか？

その落とし穴のように行き場のない玄関で、あなたはただ佇んで、六鹿茉莉の「悲しい話」が自分の体内で竜巻のように荒れ狂い、その内壁を傷つけ、穴を穿とうとしているのを感じる。だがあなたはそれを吐き出してしまふことなく、自分の中に保ち続けなくてはならない。いつか六鹿茉莉の言葉があなたの言葉と見分けがつかないほどに混じり合い、あなたの話として出てくるまでは。

でも私はそのときまで茉莉のことを投げ出さずにいられるだろうか？

あなたはストリングカーテンに手を差し入れてそれを開き、小さく咳払いをする。リビングの六鹿茉莉がこちらを見してくれるように。これは反則だろうか？ 今の自分の顔が茉莉に何かを伝えてくれるかもしれないと期待するのは。私はあくまで涼しい顔をしているべきなのだろうか？

六鹿茉莉はあなたに気づく。

「あ、もう帰る？」と彼女は何事もなかったかのように言う。

4. 墓参り

あなたは洗面所を借りてから六鹿茉莉の部屋を出る。錯綜する思念の糸が心の裏側でいくつもの解けない結び目を作ろうとしているのを感じながら、暗い階段を下りていく。

マンションを出ると、冷たい風があなたの火照った頭を効率よく冷却する。自己と外界が平衡状態を達成するその一瞬の恍惚の中で、あなたの帰りを待っている三雲くんの車はあなたの目にまるで太古の遺物のように映る。風に吹きさらされて潤んだ視界をクリアにするため、あなたは二、三度まばたきをしてからもう一度その車を見る。だが車はすでに役目を終え、過去になっていく。あなたにとっての存在価値は限りなくゼロに近づいている。

あなたは慌てたように小走りになって車の中に三雲くんの姿を求める。そこにまだ生命の兆しが残っていることを確かめるために。

三雲くんは眼鏡を外し、シートを倒して眠っている。暗闇に白く浮かび上がるその表情のない顔を見て、あなたはいつか雑誌で見たウラジミル・レーニンの写真のことを思い出す。最先端の防腐技術によって在りし日の容貌を保ったまま、モスクワの霊廟で一般に公開されているレーニン。建物の内外に配備された兵士たちに囲まれて、旅行者の畏怖とも好奇ともつかない眼差しの下で、もはやソ連とも呼ばれていない国の中で、かつての指導者はただ死んでいる。

いったいなぜあなたは三雲くんを見てレーニンのことなどを思い出したのか？ それはあなたの恋がすでに終わってしまったことを意味しているのかもしれない。だとしたら悲しいことだ。付き合っていたときにもあなたたちのあいだに終局の感覚は何度も訪れていたはずだ。途切れた会話として、噛み合わない感情として、遅く起きた日曜日の倦怠として。だがあの頃には死の気配を呑み込み、消化してしまおうとする意志があった。生きて動いている自分たちの身体を通して、死を別のものに変えてしまおうとする意志が。ところが三雲くんが関係を諦め、あなたにそのような努力をする理由がなくなってしまうと、恋はあつてなく終わってしまう。そういうことなのかもしれない。なかった。

あるいは三雲くんは今も変わらずあなたにとってのスーパーヒーローなのかもしれない。ただそこにいるだけで、気軽に触れてはいけないような特別な輝きを放っている存在。自分のうらぶれた思考をまとめてギブアップし、すべてを委ねたくなる頼りがいのある男性。今のところは眠っている。でもふたたび動き出せば、彼はあなたのことを根本から変えられるほどの力を持っている。高いギアであつという間に論理の壁を突破し、あなたの死角から強烈な代替案を突きつけてくる三雲くん。愛情と憎しみが無いまぜになった複雑な感情の対象。

自分が目になっているものの解釈をめぐるそんなどっちつかずの状態に耐えられなくなり、あなたはサイドウィンドウを小さく二度叩く。

三雲くんはすぐに目を覚まし、ダッシュボードに置かれた眼鏡を掛け、身体を伸ばして助

手席のドアを開けてくれる。彼がロックをかけずに眠っていたことに小さな驚きを覚えながら、あなたは車の中に滑り込む。

「どうだった」と三雲くんは少ししわがれた声で尋ねる。

「うん、とりあえずここに来ることができてよかったと思う」

「どんな話をしたの？」

あなたは何をどう話せばいいのか考える。あなたは自分の中に小さな空洞がぼっかりと口を開けているのを感じる。おそらくそれはあなたが六鹿茉莉の胸の中にあると考えていたのと同じ性質のものだ。外界の異物をそのままに収めることのできるスペース。だがそれが秘密や嘘と強い相関を持ったものであることをあなたは今では知っている。

「茉莉はね」とあなたは口を開く。「自分の悲しい状況に対して悲しみを感じられないことを特に悲しく思っていない。でも私にはそれがすごく悲しいことに思えるの」

「悲しい状況って？」

「それを三雲くんに言うことはできない。言っても三雲くんにはわからないと思う」

そう言いながらあなたは苛立ちのようなものがふつふつと湧いてくるのを感じる。これは生命の兆しだろうか。この苛立ちをきっかけにして、私たちはまた何かを始められるだろうか。

「言えないことなら別にいいんだけど」と三雲くんは言う。

「遅くなってごめんね」とあなたは言う。時計を見ると、それはまもなく二時を示そうとしている。「ずっと寝てたの？」

「戸成さんの話について考えてたらいつの間にか寝てた。よくわからないところがあったんだけどさ、『昔、週末に部屋で一人になったときに向き合うものが怖かった』って言ってたじゃない？ それで街に出るしかなかったって。それって、具体的に何が怖かったのかな」

あなたは当時のことを思い出す。いま住んでいるところよりもさらに狭い部屋。通勤のために駅の近くに借りたそのペランダのない古くて大きな集合住宅は二車線道路の交差点に接していて、一階はスーパーマーケットになっていた。

「街が部屋の中に入って来るのが怖かったの。浸透圧の違いみたいなので街が部屋の中にしみ込んできて、家にいても外にいるのと変わらない状態になってしまうことが。街が完全に浸透してしまったら、私生活は消滅して、私は自分が誰だかわからなくなってしまう。だから自分から街に出るしかなかった。死ぬのが怖くてたまらない人が自傷行為をするみたい」

「難しいな」

「『ビフォア・サンライズ』って観たことある？」

「男女が街を徘徊しながらしゃべりまくるやつ？」

「そう」

「DVDで観たよ」

あなたは三雲くんがその映画を昔の恋人と一緒に観たのかもしれないと思う。学生時

代、三雲くんは美大生の綺麗な女の子と付き合っていて、会話の流れからあなたはその子の映像作品を二人で一緒に携帯電話の画面で観たことがあった。本人が出演しているその短編映画は一見普通の大学生活を描いたものだったが、彼女の台詞はすべてテレビやインターネットから拾ってきたと思われる男性たちの声に入れ替えられていて、それが奇妙な違和感を生み出す作りになっていた。あなたはその作品に底意地の悪さのようなものを感じて少しも面白いとは思えなかった。後で一人になったときにその子の書いたブログを読んてみたりもしたが、スラッシュや等号などの算術記号が頻出するその文章の意味をあなたはほとんど理解することができなかった。疎外された身体？ 鏡像段階的自己？ 三雲くんはこういうことに興味を抱くような人じゃない、とあなたは思った。でもこういうことに興味を抱く女の人のことは好きになるんだ。そしてあなたは突然不安な思いに駆られた――ひょっとして彼にとつて私と彼女は同じカテゴリーの女性に見えているのだろうか？

「面白かった？」とあなたは訊く。

「うん。あんまり観たことがないタイプの映画っていうか」

「私もあの映画が好きじゃないっていう人にこれまで一度も会ったことがない。批評的にもほとんど古典みたいなことになっていると思う。でも私はあの映画が耐えられないの。なんでこんなに耐えられないんだろうと思つて三回も観てしまったくらい」

「耐えられるような気がするけど」と三雲くんは笑つて言う。

「でも毎回げっそりと疲れてしまった。あの映画に出てくる二人は街がまるで自分たちの気の利いたおしゃべりのための背景にすぎないかのように振る舞うでしょう。彼らは周囲に広がるウィーンの美しい街並みになんて目もくれない。たまに目に入ったとしても、それはたちまち彼らの立て板に水を流すような哲学的省察の種になって、景色それ自体としての存在感を失つてしまう。それは現実をありのままに見ていないことだと思ふの。街つて彼らのようなスノップでロマンティックな視点をすんなり受け入れてくれるほど生易しいものじゃないと思う」

「でもあれは旅先の、一夜限りの、恋に落ちた若者たちの話でしょう」と三雲くんは検索窓に順番に言葉を打ち込むように言う。「普段の生活とは違うんじゃない？」

「そうだね。だから私は日常を離れるために旅に出てそこでお手軽に恋愛を楽しむことのできる人たちの余裕が気に入らなかっただけなのかもしれない。そういう多くの人にとつてのファンタジーをリアルなパッケージに包んで提示することがどれだけ暴力的な行為になり得るかに気づかない製作者側の無神経さや批評家たちの鈍感さに腹を立てていただけないかもしれない――もちろん、あの映画が作られたときと今とでは時代が違うわけだけだ。あの映画を観ると、あなたたちには見ることでできないものがこの世の中には山ほどあるんだよつて思つてしまう。彼らほど饒舌じゃないし、高尚じゃないし、地味で所帯じみているかもしれないけど、でも同じくらい生きる資格を持った物事が。彼らは言葉を使つて街を自分たちの好きなように染めることができる。でも私は彼らのような人間たちによつて染められた街の中でなんとか自分を保つために言葉を使うしかなかった。私が当時感じて

いたのはそういうことだったの」

「そんなふうに考えたことはなかったなあ」

「それは三雲くんがどちらかと言えば彼らに近い、特権的な立場にいる人だからだと思う」
三雲くんはステアリングホイールの真ん中あたりを見つめたまましばらく黙り込むが、やがてぼつりと言う。「ひょっとして、戸成さんが僕のところと一緒に住むことができるればよかったのかな？」

あなたはさっと顔を上げ、三雲くんのことを見る。それはもう遅すぎる言葉だ。それくらいあなたにもわかつている。だがたとえ遅すぎたとしても、口にされた言葉には口にされた言葉だけが持つ力がある。

「でもね」と三雲くんは続ける。「戸成さんが僕と一緒に暮らしたいと思っているようにとはとても見えなかったんだよ。どちらかと言えば適度な距離を置いてもらいたがっているみたいに見えた。人って、誰でもベースキャンプみたいなものを持っているんだと思うんだけど。それをどこに置くかによって、その人のその時々の方々の性格の基本的な方向性がある程度決まってくるような場所。戸成さんの生活には一人の時間もあれば僕との時間もあつただろうけど、ベースキャンプはあくまで一人で過ごすことのできる自宅に置きたがっているように見えた。僕は戸成さんの部屋にもほとんど行ったことがなかったしね。それが戸成さんの選択だと思っていたんだ。小説を書くために、一人で生きることの特化した人間になることが」

「一人で生きることの特化した人間って」とあなたは呆れて言う。「まるでサイボーグみたいじゃない。私が三雲くんを部屋に呼ばなかったのは単にあの部屋が狭すぎるからだよ」

「本当にそうかな？ 本当にそれだけ？」

「他に何かあるっていうの？」

「戸成さんはあまり人からプライベートな部分に立ち入れたくないんじゃないかな？ たとえ相手が恋人であつても」

立ち入れたくない、とあなたは思う。またこの言葉だ。茉莉が使った言葉。人が別の誰かの内側に立ち入ること。

そうなのだろうか。私も茉莉と同じように、本当は人から自分の中に立ち入れたくないと思っているのだろうか。仮にそうだとすると、人から立ち入れたくないと思ってしまうのは良くないことなのだろうか。良くないのだろう、もしその相手が恋人だったら。

「私が自分のプライベートな部分に立ち入れたくないんだとしたら、それはどうしてだと三雲くんは思うの？」とあなたは訊く。

「わからないけど。でもそこに何か自分でも見たくないものがあるっていうことなんじゃないかな？ 自分でも見たくないものを、踏み込んできた他人に先に見つけられたら困るっていうか。こんなことはあまり言いたくないけど、戸成さんがこれまで付き合ってきた人たちが同棲しようとしなかったのも、そのことがどこかで関係しているんじゃないかな。君の新しい小説を読んでいて、そういうことも感じたんだけど」

「どうということ？」

「あの小説に出てくる主人公たちはみんな傷ついていて、みんな誰かのことを求めているよね？　しかもとても強く。でも彼らはその求めている相手と直接つながろうとはせずに、別の何かで補おうとする。たぶんそれは、求めている相手のことを考えるのがとてもつらいからなんだと思う。相手がすでに目の前からいなくなってしまうていて、もうどうにもならないと心のどこかで諦めているから。それで彼らはそういう強い思いを全部引き出しの裏みたいなところに押し込んで、自分でもその思いがどこに行つたのかわからなくなってしまう。どこに行つたのかわからなくなってしまうことを望んでいる。僕はそれが読んでいても寂しかったんだ」

「言っていることはわかるけど、それが小説の全部ではないでしょう？　それはどちらかと言えば設定っていうか、問題提起みたいな部分で。私は小説の最後にある種の和解のようなものを用意したと思うんだけど」

「和解？　そんな場面あったっけ？」

「あったよ」

「どこの部分？」

あなたはため息をついてうなだれる。あの小説はやはり完全な失敗だったのだ、とあなたは再認識する。「どうして男の人って大事なことをすぐに忘れちゃうの？　そんなに私のことに興味がなかったの？」

「ごめん。でも本当にどこのことを言っているのかわからないんだ。教えてくれる？」

「もういいよ」とあなたは言う。「きつと三雲くんにそれがわからないっていうこと自体が私たちの関係の限界を示しているんだと思う。別に三雲くんのせいだって言いたいわけじゃないくて、私の問題点しか見えないくらい私が三雲くんのことを不安にさせてしまつたということでしょう」

「家に帰ったら少し読み返してみるよ」と三雲くんは言う。

カーテンの隙間から漏れていた六鹿茉莉の部屋の明かりが消える。彼女にとっての長い夜はあなたのより一足先に終わったのだ。

「じゃあ私行くね」とあなたは言う。「茉莉なら図書館に行けばいつでも会えるから、行ってみるといいよ」

「家まで送っていくよ」と三雲くんは言う。「こんな時間だし」

「大丈夫、すぐ近くだから」

六鹿茉莉の部屋で感じていた眠気はすっかり消えている。身体は疲れているが神経は高ぶっていて、このまま帰ってもすぐに眠れそうになかった。小説の脱稿後に奮発して買ったジョンストンズのタータンストールをバッグから出して首に巻きながら、途中で緑の匂いでも嗅いでいこうとあなたは思う。

公園までの道のりは暗く、^{ひとけ}人氣がない。だがこの時間になると怪しそうな人間すら歩いていないので、危険な感じはまったくしない。「ひったくりに注意」という看板が出ているが、こんな人家に囲まれたところにそんな人間が本当にいるのだろうかと思いたくなるほどだ。あなたはこれまで犯罪の被害を受けたことがほとんどない。思い出せるのは自転車を盗まれたことくらいだ。もちろん痴漢に遭ったこともない。小学生のときには変質者に気をつけるように親や教師から言われていたが実際にいくわしたことはなかったし、中学と高校では長い畦道を自転車です通学していて、出てくるものと言えば回転する車輪にぶつかっては死んでいく大量のイナゴくらいのものであった。上京してから日常的に電車を使うようになったが、幸運なことに身体を触られたりしたことはなかった。単に容姿が魅力的ではないということなのかもしれないが、取り立ててあなた以上に魅力的だとは思えないあなたの友人は何度も痴漢に遭っていて、ひどいときには服に精液をかけられていた。使っている路線も時間帯も同じだった。どうしてこういうことが起こるのだろうか？とあなたは首を傾げた。

あなたが書いた連作短編集『こんなところでただ一人』に登場する主人公の一人、菅山ミリもやはり痴漢に遭う。都心の高校に進学したばかりの四月のある朝、ミリが通学のために満員電車に乗っていると、背広を着た小柄な男が背後から彼女の尻に手を伸ばしてくる。大人の男性といえはまだ父親と親戚と教師くらいしか知らない彼女は、信頼すべき存在から自分が純粋な性的対象として見られていることに驚愕し、凍りつく。彼女が何の反応もしないことを確認すると、男の手はミリがクラスメイトたちの様子を見ながらまだ本当にやってみたいほどには丈を詰めていない制服のスカートの中に入り込んでくる。ミリはトランス状態に入っているかのように浅く不規則な男の呼吸を聞き、その動物のように甘酸っぱい体臭を嗅ぐ。男の視野が極端に狭まり、この任務を完遂することに人生のすべてを懸けていることを彼女は理解する。どこかに存在しているはずの家族や仕事のことは男の頭から完全に消えている。

やがて男はミリの下着の中に手を差し入れる。ミリの胸の奥から硬いものがせり上がってきて喉を詰まらせる。ミリは救いを求めるように首だけをそっと動かし、彼女の脇で同じように扉の前に立っている髪を短く刈り上げた体格の良い若いサラリーマンを見上げる。すでに事態に勘づいているのか、少し怪訝そうな顔をして彼も彼女のことを見ている。この人なら大丈夫だ、とミリは思う。この人なら大抵の男の人をやっつけられるはずだ。彼女は訴えかけるようにサラリーマンの目を見つめ、彼が早く行動を起こしてくれることを願う。そこで彼はなぜか下を見る。つられてミリも下を見る。そこでは若い男の勃起した性器が露出している。その獣じみた大きさにミリはショックを受ける。彼女は男性のペニスはいかに自分の親指くらいのものだろうか？と想像していたのだ。もう一度彼の顔を見上げると、その表情は完全に消えていて、「おかしい動きはしないほうがいい」と牽制するように小さく首を振りながら彼女の胸に手を伸ばしてくる。グルなんだ、とミリは薄明りが灯ったように朧げになった意識の中で思う。

小柄な男の指はミリの性器を探り、強引に膣に入り込む。彼女は声を上げてしまわないように、その結果これ以上彼らの怒りを——怒りなのだろう、きつと——刺激してしまわないように、両手を口の前で堅く組む。母親が手洗いしてくれたばかりのカーディガンの袖口から太陽の匂いがある。処女膜が裂け、ミリの股のあいだを一筋の血が伝っていく。足がぐくぐくと震え、目の前が真つ暗になり、彼女は自分の目が開いているのか閉じているのかわからない。電車はスピードに乗って走り、まだ次の駅に着きそうな気配はない。男はその芋虫のように太く短い指を何度も出し入れする。指が動いたたびにミリの中身は壊れ、切り刻まれ、溶け出していく。

ミリは自分の身体を脱出する。銀色に光り輝く球体がミリの後頭部の髪の毛の隙間からにじみ出るように現れ、彼女の目の端にわずかに見えていた反対側の網棚に向かって乗客たちの頭の上を餅のように伸びていく。網棚の上でゲル状に広がったそれはやがて人間の形を取っていく。今のミリよりも胸が大きく、骨盤も張った、全体に丸みを帯びた裸の女性の形を。大人のミリはそこにチェシヤ猫のようにしなを作って横たわり、ごった返す朝の通勤電車で場違いに祈るような格好をしている自分のことを優雅に見下ろす。大丈夫、あそこにあるのはただの抜け殻だ。本当の私はここにいる。大切なものはすべて持って出てきた。馬鹿な男たちだ。あそこにまだ関わるほどの価値のある何かが残っていると思ひ込んでいるのだから。

次の瞬間、ミリはプラットフォームの外れにある小さな古ぼけたトイレに駆け込んでいる自分を発見する。血に染まった白い靴下を急いで脱ぎ、薄汚れた手洗い場でハンカチを濡らして足の内側を拭う。誰も来ないでください誰も来ないでくださいと彼女は頭の中で唱える。下着はしょうがない見える部分だけ早く。だが靴下を洗い終えたところで彼女はスカートに白濁した液体がべっとり付着していることに気づく。洗うためにはそれを脱がなくてはならない。脱いだら汚れた下着が見えてしまう。彼女はふらふらと個室に入り、蓋の閉じた便器に座り、両手で顔を覆って声を出さずに泣く。体内から誰かに殴られているように彼女の身体が激しく波打つ。

あなたはこんな話など少しも書きたくはなかった。書いていて自分で吐き気がした。しかし久しぶりに小説に取り掛かってある短編作品を書いていたとき、もう十年も前に聞いて以来忘れていたはずの友人の痴漢の話がふと頭に浮かび、あなたの脳裏にぴたりと貼りついてしまった。何日経つてもそれは消えないどころか、むしろ次第に熱を帯びていくようだった。それは書かれなくてはならないことだった。

そのときにあなたが書いていた短編——『こんなところでした一人』の最初の短編——はこういう話だ。

平年より寒い日が続いたある年の十二月、十歳の男の子マヒロの母親が子宮頸がんの治療のために入院することになる。以前から何度か短期入院することはあったが、今回は差し当たって期間が決まっていけないという。本人は気丈に振る舞っているが、その様子からマヒロは母親がまもなく死んでしまうのかもしれないと思っている。だが彼はそのことをどの

ように考えたらいいかわからない。

二年ほど前に父方の曾祖父が亡くなったとき、両親は夕食中に葬式のことについて話していた。

『カソウ』って何?』とマヒロはそのとき父親の口から出た言葉について尋ねた。

「亡くなった人を火で焼くことだよ」と父親は答えた。

そう聞いたマヒロの頭に浮かんだのは、十字架にかけられて足元から火であぶられ、肉がどろどろに溶け、内臓と眼球がこぼれ落ち、骨をあらわにしていくなかに曾祖父の姿だった。抜けするような青空を背景に、曾祖父はマヒロに生命の崩壊の全過程を見せつける。

生まれて初めての激しい恐怖に襲われ、お葬式には行きたくない、とマヒロは思った。でもこれはみんな普通にやっていることなんだ。ぼくだけが行きたくないなんて言っちゃだめなんだ。

その日からマヒロは夜中に突然飛び起きて、家じゅうを駆け回りながら泣き叫ぶようになった。葬式の前日、彼は母親が父親に「この子にはまだお葬式は早いんじゃないかしら」と言うのを聞き、当日はいつも通り学校に行くことになったことを知った。助かった、と自分の夜泣きを知らないマヒロは思った。ぼくの思いがお母さんに通じたんだ。

母親の病院に初めて行った日の夜、マヒロは居間でいつものようにビールを飲みながらテレビを見ている父親におやすみを言い、布団に入って天井からぶら下がった蛍光灯のオレンジ色の豆電球を見つめる。人間の生と死の不可解な成り立ちが名状しがたいかたまりとなって彼の上にのしかかる。彼は成績のいい子どもだったが、そのかたまりに「不安」や「悲しみ」というラベルを貼ることで苦しい事態から少しでも距離を取ろうと努力できるほどにはまだ十分に成長していない。

やっぱりお母さんは死んでしまうのだろうか、とマヒロは思う。そしたらお母さんもお父さんたちによって「カソウ」されてしまうのだろうか。ぼくはお母さんから生まれて、この世界にいる。そのお母さんがいなくなってしまうというのはどういうことなんだろう。この世界への入り口が消えてしまうというのは。

彼は宇宙のことを考える。真つ暗な空間の中で一人きりの自分。星はたくさん出ている。でも歩いて行くにはどれも遠そうだ。

そのとき、「昔々、あるところにおじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました」という昔話の冒頭がマヒロの頭の中で訳もなく再生する。二度、三度と繰り返していると、それが魔法の言葉のように心を落ち着かせる。おじいさんとおばあさん。山へ柴刈りに。川へ洗濯に。

マヒロはクレパスで描いたみたいに興行きのない緑の川辺を思い浮かべる。野良着にほっかむりをしてタライで服を洗っているおばあさん。それから……あれ、そういえば「柴」って何だろう、と彼は思う。「おじいさんは山へ柴刈りに」。おばあさんが洗濯しなくちゃならないのはわかる。だってそれは生活していくために必要なことだから。しかもおばあさんはその途中で桃まで見つける。そのおかげで冒険は始まるのだ。でもおじいさんは山で何を

しているんだろう。おじいさんはいったい何のためにこの話に出てくるんだろう。ぼくはどうして今まで疑問に思わなかったんだろう。

魔法の言葉は力を失って、マヒロはふたたび宇宙で一人きりになる。早く国際宇宙ステーションが完成すればな、とマヒロは思う。国際宇宙ステーションが完成して、そこに行くことができたなら。そして、そこに住んでいる人たちはぼくのことを受け入れてくれるだろうか。

母親の入院が決まる少し前のある日曜日、マヒロは夕食を終え、少し眠ってから両親と一緒に車で近くの山へ行った。その夜、数十年に一度と言われる大規模な流星群が日本の上空に飛来することになっていたのだ。山林を切り開いて作られたその自然公園で、マヒロは母親と同じ寝袋に入って斜面に寝そべった。やがて夜空のあちこちにひゅんひゅんと光の筋が現れ始めると、周りに集まったたくさんの人々から大きな歓声が上がった。

いつの間にか眠りこんでしまったマヒロがふたたび目を覚ましたときにも、まだ宇宙の塵は地球の大気と出会っては燃え続けていた。うつらうつらしながらそれを眺めていると、流星とも普通の星とも違う、奇妙にゆっくりとしたスピードで動いている光の点がマヒロの目に入った。しばらくのあいだ注意して空を見てみると、他にも同じような点がいくつかあることがわかった。隣で寝ていた母親を起こし、あれは何なのかと尋ねると、人工衛星だと母親は言った。

マヒロはやって来てはすぐに消えてしまう流星群よりも、上空を散歩するようにのんびりと移動している人工衛星のほうがずっと面白いと思った。そんなものが毎晩自分の頭の上を移動しているなんて、全然知らなかった。駐車場に戻る途中、取材に来ていたテレビ局のインタビューを受けたマヒロは人工衛星を見つけて感動したことについて熱心に語ったが、それが朝のニュースで放送されることはなかった。

その日の昼休み、彼は学校の図書室で宇宙開発に関する本を読んだ。そこには現在建設中の国際宇宙ステーションのことについても書かれていた。「国際宇宙ステーションは、人間が長期滞在することのできる初めての人工天体です」とその本には書かれていた。「その費用は莫大なので、日本を含む十五の国々が協力して開発・建設し、維持していく予定です」やがてマヒロは眠りに落ち、国際宇宙ステーションの夢を見る。広い病院の中を歩き回ってくたびれていたのに頭ばかり働かせていたせいかな、マヒロには自分が眠りに落ちた瞬間がわかる。いま自分が見ているものが夢であることもわかる。

マヒロの夢の中で、完成した国際宇宙ステーションは一つの惑星になっている。マヒロがその星の門番（ツノのついた兜と肩当てを着けて毛皮のパンツを穿き、大きな槍を持っている）に「居場所がないので仲間に入れてくれませんか」とお願いすると、門番は「坊や、ここは来たいという願いと熱意を持っている人なら誰でも来ることのできる星なんだよ。いま住んでいる人たちももともとはみんなそうなんだよ」と言い、どこまでも続いている長い石壁についた門扉の一つを開けてくれる。

マヒロは街を歩き回る。目に映るものすべてが夢のように光り輝いている。それはそうだ

よね、とマヒロは思う。これは夢なんだから。広々とした道とそこを行き交うさまざまな肌の色をした人々。世界各国の国旗を掲げた船が入って来る港。飛行船とアドバルーン。猫たちと鳥たち。屋台で物を売る男女たち。物乞い。物乞いに話しかける、風船を持った小さな女の子。みんな幸福そうだ。みんなお互いに以前は不幸な生活を送っていたことを知っているからかもしれない。

それからマヒロは街外れの湖のほとりに設営されたテントでサーカスの公演を見て、ピエロや軽業師や動物たちによるきらびやかなショーに魅了される。終演後もマヒロがその場に残っていると、やがてデニムのオーバーオールに革のブーツを履いた彼と同年くらいの少女がバックステージから出てくる。後ろで結んだ栗色の髪を揺らしながらてきぱきと客席のごみを回収していく少女に、マヒロは一目で恋をする。言葉が通じるかどうかかわからないので、彼は座席に腰掛けたまま彼女のことをぼうつと見つめている。すると少女のほうから彼に話しかけてくる。「一緒に遊ぼうよ」と。マヒロのことをまっすぐに見つめる少女の瞳も髪と同じ栗色をしている。なぜ子どもなのにサーカスにいるのかとマヒロが尋ねると、団長の娘だからと少女は答える。名前を訊くと、ナツメだと彼女は言う。二人は近くの谷川に行き、鱒釣りをする。マヒロはそこで目を覚ます。

楽しい夢だった、と彼は思う。また同じ夢が見られたらいいな。

翌日もマヒロは学校に行き、病院の母親と面会し、同じ星の夢を見る。門番と言葉を交わし、石壁を抜け、ナツメと会い、二人で小さな舟に乗って湖を一周する。門番と団長の娘はすでに彼のことを憶えている。

マヒロは自分が望みさえすれば、いつ眠りに入るかも、どんな夢を見るかも、完全にコントロールできるようになっていることに気づく。というかこれまではまだ子どもだったから気づいていなかっただけで、夢や眠りとはそういうものなのだ、と彼は考える。人はみんな自分で眠りに入る瞬間を決められるものだし、見る夢も選べるものなのだ。でも今のところ彼が見たい夢は一つだけだ。だから彼は毎日規則正しく布団に入り、オレンジ色の豆電球を見つめ、惑星としての国際宇宙ステーションの夢を見続ける。

次第にマヒロの生活から現実が後退していく。母親が痩せ細り、弱っていくにつれて、夢のほうが現実味を帯びてくる。今では彼はその星の学校にさえ通っている。ナツメとも親友のようになっている。もちろんマヒロはそれが夢であることを忘れてはいないが、夢と現実のあいだに本質的な違いなどないような気がしてくる。夢の中でこれだけ一貫した具体的な生活を送ることができるのだとしたら、それはもう現実と言っていいいんじゃないだろうか？

入院から約三か月後の春先、母親は死んでしまう。夜にもう一つの生活を営んでいるおかげか、マヒロはほとんどショックを受けずに済む。涙も出てこない。

その夜もやはり彼は同じ夢を見る。ところが門番は彼のことを通してくれない。

「事情が変わったんだ」と門番は言う。「この扉はもう使えなくなった。悪いけど、今晚にはセメントで塗り込めさせてもらうよ」

「どうして？」とマヒロは訊く。

「それが君にとっていいことだからだよ。君はもうこの星に来ないほうがいい。君は君自身の星で生きる道を探したほうがいい。初めはつらいかもしれないけれど、長い目で見ればきっとそのほうが君のためになる。そういう裁定が下ったんだ」

「嘘だ」とマヒロは言う。「本当は自分たちだけが幸せになりたいからそんなこと言ってるんだ」

「君ももうじき大人になる」と門番は言う。「大人になったら、別の星で暮らしながらこの星にも住み続けることはできないんだ。それはとても危険なことだからね。君にとっても、私たちにとっても。それとも君には自分の星を捨てる覚悟があるかい？」

マヒロは考える。地球にはもう母親はいない。好きな女の子も特にいない。友達だってこっちのほうが多いくらいだ。でも何かが彼を引き留める。おじいさんは山へ柴刈りに、と彼は思う。マヒロは今では柴がたぎぎの材料であることを知っている。あの後、辞書で調べたのだ。おじいさんは火を熾^{おこ}すために柴刈りに行く。誰かを「カソウ」するためにではなく、生活のために。温かい食事を与え、桃太郎を立派な少年に育て上げるために。

門番は続ける。「どちらにしても君はこの星にいたら不幸になってしまうかもしれないよ。残念なことだけど、君が周りとは違うことに他の人たちがだんだん気づき始めて、君のことを除け者にするかもしれない。そしたら君は逆にそういう人たちのことを不幸にしようとしてしまうかもしれない。それを許すことはできないんだ」

その言葉にマヒロはかっとなって「そんなの嘘だ」と叫び、門番の制止を振り切って門扉を破り、街に入る。追っ手が来ないことを確認しながら、彼はまっすぐに湖のほうへ駆けていく。

彼が着いたときにはちょうどサーカスの公演が終わったところだ。ナツメはいつものように彼のところに来て、「今日は何して遊ぼう？」と彼に尋ねる。

「今日はただ話をしていたいな」とマヒロは言う。「もしかしたらぼくはもうここには来られないかもしれないんだ。君と会えるのも今日が最後かもしれない」

マヒロはナツメに自分の気持ちを伝える。この街が彼にとってどれだけ大切な場所だったか。少女が彼にとってどれだけ特別な存在だったか。一緒にやっていたいろんな遊びを決して忘れないこと。いつか少女が彼のことを嫌いになってしまっても、自分は変わらず好きでいつづけること。

マヒロが話を終わると、ナツメは「いいものを見せてあげる」と言って彼をバックステージに連れていく。「バックステージに入るのは初めてだ」と彼が言ってナツメのほうを振り返ると、彼女はいつの間にか小さなポニーに姿を変えている。マヒロはそのポニーのことを知っている。背中にビーグル犬を乗せてステージ上をくるくると回る芸をするポニーだ。「団長の娘じゃなかったの？」とマヒロが訊くと、ポニーになったナツメは「まあ養子みたいなものね」と言い、かがんでマヒロに自分の背中に乗るように促す。

マヒロはナツメに乗って天井から下がったいくつものカラフルな垂れ幕のあいだをくぐり抜けていく。団長たちが食事をしながら大きな声で今日の公演の出来について語り合っている黄色い部屋があり、たくさん電球がついた鏡の前でピエロが化粧を落としている青い部屋があり、猛獣たちが頑丈な檻の中で眠っている緑色の部屋がある。小道具が雑然と置かれた暗い通路の奥の赤い垂れ幕を抜けると、そこではマヒロの母親が椅子に座って彼のことを待っている。まだ病気になる前の、強くて血色のいい、怒ると怖い母親だ。

「お母さん」と彼は言っただけでナツメから飛び降り、母親の膝元に駆け寄る。「どうしていなくなっちゃったの。ずっと探していたんだよ」

目を覚ますと、マヒロは自分が見ていた夢を思い出せなくなっている。過去三か月ぶんの夢が丸ごと彼の記憶から消えている。しかしそれは多くの人に起こることだ。マヒロも特に不思議には思わない。

その日を境にマヒロはふたたび一っだけの学校生活を送るようになり、一握りの友人たちと遊ぶようになり、クラスの女子たちに好きな順番をつけるようになる。たまに脈絡のない夢を見はしても、もうあの国際宇宙ステーションの夢を見ることはない。自分がいつ眠りに就いたのかもわからなくなっている。眠りは眠りとしての他者性を回復し、夢は夢としての自律性を回復し、子どもの頃にしか起こらない特別な時間は終わりを告げる。

マヒロは父親に連れられて母親の葬式に行く。棺に釘が打ち込まれる段になっても、やはり悲しみの気持ちは湧いてこない。彼の感情はあの長い夢とともにどこかに冷凍保存されている。それを見つけ出すには長い時間が必要になるだろう。それを解凍するにはたくさん

の柴が必要になるだろう。

火葬場に十字架などないということを知ったとき、そんなことは最初から知ってたよ、とマヒロは思う。そして流星群を見に行った日の帰り道のことを思い出す。

夜明け前、父親が運転する車が山を下りて国道に出たとき、母親は「マヒロ、今年のクリスマスは何をお願いするの？」と後部座席の隣で尋ねた。

彼は何も考えていなかった。何も思いつかなかった。

「あのね」と母親は少し緊張した声で続けた。「もう知ってるかもしれないけど、サンタさんはね、お父さんとお母さんなんだよ」

彼は胸がかすかに疼くのを感しながら、「知ってるよ」と言った。

「知ってたの？」と母親は驚いたように言った。

「だって二年生のとき、クリスマス朝起きたらいつも点いてるはずの豆電球が消えていたから」と彼は早く母親の驚きを宥めたくて確信を込めた声で言った。

「そんなことでわかったの？」

「そうだよ」と彼は苛立って言った。

自分がサンタクロースの正体を本当に知っていたのかどうかはもうわからなくなってしまう、とマヒロは母親の骨を拾いながら思う。なんとなく気づいていたような気もするし、全然知らなかったような気もする。でもどっちみちお父さんとお母さんはサンタクロース

なんかじゃないと思う。だってもし本当にサンタクロスだったら、ぼくの思いが通じるはずだから。病室でクリスマスパーティーをしたとき、お父さんとお母さんは天体望遠鏡をくれたけど、ぼくはそんなものは少しも欲しくはなかった。人工衛星は好きだけど、ぼくはそれを遠くから観察したかったわけじゃない。そんなことしたって虚しくなるだけだ。

なのになんか——とマヒロは母親の遺骨の中に一つだけ異様に白い骨片があるのに目を留めながら思い出す——プレゼントを受け取ったとき、嬉しそうなふりをして「ありがとう」と言ってしまった。あのときの気持ちはこの先ずっと忘れないような気がする。なんだか悪いことをしてしまったような、少し大人になったような気持ち。

葬式の夜、マヒロは初めて夢精を経験する。

この短編を書いているときにどうして友人の痴漢の話を書いたのか、あなたは自分でも不思議だった。共通点と言えば精液が出てくるくらいだが、話を思い出したときにはまだ夢精のくだりまでは書いていなかった。マヒロの話の初稿を書き終えた日、あなたはウェブ・ブラウザーを開き、電車での痴漢について調べてみた。

多くの事柄についてそうであるように、インターネットは剥き出しの暴力を無数の水源から誘引し、無限に貯蔵するダムとしての機能を遺憾なく発揮していた。だが今回の場合、集められた暴力の濃度はあなたの予想を遥かに超えたものだった。あなたは痴漢に対して人生に疲れた中年男性が若い女性のお尻をごまかすようにしてそっと触る程度の「可愛いもの」だという印象を持っていた自分を恥じた。私の友達はまだ幸運なほうだったんだ、とあなたは思った。それとも彼女は本当に言えないことには触れなかっただけなのだろうか？

話を書くためにリサーチが必要なのは明らかだった。あなたはショッピングサイトで「痴漢」と入力してみたが、出てきたのは卑猥な表紙のついた成人向け漫画ばかりだった。入力ワードを「性犯罪」に変えると、いくらか使えるような本が出てきた。あなたはそこから何冊かを注文した。

翌日、あなたは図書館に向き、レファレンスサービスを頼みたいのだが、とカウンターにいた若い女性に伝えた（それが六鹿茉莉だったことが知り合った後で明らかになる）。奥のオフィスに入っていた女性が連れてきた司書に、あなたは性的虐待について扱った古今東西の専門書を集めてほしいとリクエストした。一週間後、司書は十数冊の本をカウンターに持ってきてくれた。インターネットで注文していた本も届いた。

初めは小説の整合性に問題さえ生じなければと思い、かいつまんで読むつもりだったが、レイプやインセストやセクシュアル・ハラスメントの実態やその社会的・心理的な背景、当事者たちによる一次情報が克明に記録されたそれらの本を、あなたは文字通り寝食を忘れて熟読することになった。それらは一言でいえば人間という多面的で多層的な生物についての実例に基づいた詳細な報告書だった。そこには犯罪に堕ちていく人間の自己正当化にまみれた唾棄すべき物語があり、死の淵から人生を懸けて這い上がるとうとする人間の美し

いと言うほか到底言葉の見つからない物語があった。被害者を支援する小さな団体の長年にわたる努力があり、加害者を守り被害者を排除しようとする倒錯した社会の構造があった。それはまるで眼球を覆っていた半透明の膜が取り払われ、新たな光の下で世界を見つめ直したように新鮮な体験だった。

その体験を基に、あなたは先に示したような菅山ミリの話を書き始めた。

電車での事件から十年後、二十五歳になったミリは奥多摩に本拠を構えるある仏教系の新興宗教団体の門を叩く。神田で不動産業を営む父方の伯母からその施設を紹介されたのだった。

いつものようにミリたちの家にやってきた伯母は、帰り際、ミリの両親の目を盗むようにしてその宗教団体の素晴らしさについて語った後、「別に入信しなくても週末だけ説法を聞いたり修行を体験したりはできるから、試しに行ってみなさい」とミリに持ち掛け、地図の

描かれた小さなパンフレットを手渡した。伯母に何事によらず熱狂的フアンティカルなところがあること

は知っていたが、それはあくまで個人的な性格の問題だと思っていたので、ミリは伯母が宗教の話始めたときにひどく驚き、返事を濁した。

昔から家族や親戚のあいだではミリと伯母は馬が合うということになっていた。長女のミリと子どものいない伯母には、どこか通じ合うものがあると。伯母もそのように考えているのか、家に来るたびにミリの前で人生訓や処世術のようなものをひとくさり論じて帰っていた。

だがミリの見方は少し違っていた。確かに子どもの頃には母親と違って外でばりばり働いている伯母が格好良く見えて慕ってはいたが、ミリには伯母の主張がだんだん近視眼的に感じられるようになった。伯母は単に私のことをコントロールしたいだけなのではないかとさえ思うようになった。それは成長するにつれてミリに伯母の持ち出す論理の穴を見つけられるだけの目が育ってきたからなのかもしれないし、時とともに伯母の思想が徐々に極端さの度を増していったからなのかもしれない（だとしたらそこには宗教への傾倒が関わっていたのかもしれない）。あるいはミリが高校に入った途端に不登校になり、ふたたび通学するようになってからは自転車で片道二時間以上かけて登下校し、卒業後は大学進学を希望する両親を押し切って就職したにもかかわらず何度も仕事を辞めてしまうという一連の出来事を経て、ミリに対する伯母の老婆心が異常に昂進してしまったからなのかもしれない。

でも提案を受け入れずにいたらどんな面倒なことが起こるかわからない、とミリは思った。伯母がミリに対して面倒なことを起こしたことがあったわけではなかったが、ミリに与ったとえ遠回しにでも伯母に反抗するのは恐ろしいことだった。それに私自身もカルマだとか輪廻だとかの仏教思想に興味がないわけでもないし、とミリは合理化した。とにかく一度は行つたのだという事実を作っておけばいい。

寺を中心に据えた広大な敷地を持つその施設で、ミリは一人の男性と出会う。森野という

名前のその男性はミリと同年で、普段はレコード会社で広報の仕事をしている。髪は短く、無精のためなのか好きで伸ばしているのかわからないくらい長い薄い髭を生やし、身体つきはどちらかと言えばがっしりしているのだが病弱な印象を与えるほどに色が白い。十名ほどの他の参加者たちとともに敷地内の畑で農作業をしていたとき、森野はミリに話しかける。初めて来たのか、ここの印象はどうか、学生なのか、自分は高校生の頃からここに来ているが、同じ年の人と会ったのは初めてだ。

ミリは森野の話の内容よりもその話し方に注意を向ける。四角い水路の底を薄く流れていく水のように抑揚のない、おかしなしゃべり方だった。地方の出身なのだろうかと思って尋ねてみると、生まれてからずっと八王子市に住んでいるということだった。表情は常に苦笑いしているみたいに見えるのだが、それは照れくささをごまかすような笑いでも都合の悪いことを隠すような笑いでもない。たぶん何かに深く絶望しているために――それこそもう何度も生まれ変わってしまったって現世に飽き飽きしているために――感情がその穏やかな諦念の一点に固定されてしまったような感じ。でもこの人は安全だと確信を持って言えそうな感じ。ミリは彼のことを「宇宙人みたいだ」と思う。

ここまで書き進めたとき、あなたは森野がマヒロの成長した姿なのかもしれないと思った。そして自分がこれから発表することになる作品はおそらく三篇からなる小さな連作短編集になるだろうと考えた。最後の短編、それはミリに痴漢をした小柄な男（かもしれない人物）の話になるだろう。

思ったよりも普通のところだった、とその日ミリは家に帰ってから思う。みんなちゃんと話の通じる人たちだったし、強引に勧誘されるようなこともなかったし。何ていうか、これまで会社で出会った人たちよりもずっと普通の人たちだった。伯母さんが興奮して話をするのも少しわかるような気がする。ああいう初対面の人たちと年齢や性別を超えて駆け引きのない率直な会話ができる場所は、たぶん他にあまりないだろうから。

ミリはひと月後にもう一度その場所を訪れる。そこで森野はミリを誘う。「今度食事でも行きませんか」と。

食事の席でミリは施設の印象が想像と違っていたことについて話し、森野は日本での宗教に対する偏見と風当たりの強さについて話し、ミリはそのありそうな原因として家族や世間に対する日本人の根源的な信仰心について話し、森野は家族や世間が宗教団体と同程度かそれ以上に危険な場所になっている可能性について話し、ミリは伯母の前でどうしても自分の意見が言えないことについて話し、森野は母親が子どもの頃に死んでしまったことについて話す。ミリは家族の話題を出してしまったことを詫び、母親を亡くしたことが施設に通っていることと関係があるのかどうか尋ねる。

「実はあの寺は母の実家の菩提寺なんです」と森野は言う。「菩提寺と言っても、母の祖父の代からですが。母は結婚して家を出たわけだけど、亡くなる少し前からいろいろあって、あそこの墓に葬られることになったんです」

「森野さん自身はあそこの教義を信じているんですか」とミリは訊く。

「教義を信じているか……あんまり考えたことがなかったかもしれない。正直に言つて内容もよく知らないし。ただあの場所に通う必要性は感じているということだと思います。これは僕の考えにすぎないけど、母親がいる家庭の子どもつて、今いるこの世界じゃない場所を安全に空想することができるとです。母親の姿を見ることで、自分がこの世界に来る前にいたかもしれない場所のことだったり、自分がいなかったかもしれないこの世界のことだったり、パラレルワールドみたいなものだったり、そういう仮定みたいなものについて考えることができる。母親が自分の生死を司っている存在だからです。自分の生と死のあいだにある扉みたいなのに。でも母親を亡くすと、扉は消えて、僕らはこの世界に固定されてしまう。標本の蝶みたいなのに、箱の中で起こることがすべてになってしまう。みんなは空の上とか心の中とかに母親がいつもあなただけのことを見守っているんだよつて言ってくれるけど、逆に言えばそういう目に見えない場所が母親によつて占領されて、本当は自分の夢や理想や希望なんかについて想像力を羽ばたかせなくちゃいけないときに、母親のことばかり頭に浮かんでしまうようになる。だから僕はあの寺に通うことで、母親が確かにそこに眠っていることを確認して、目に見えない世界を少しずつ自分の手に取り戻そうとしているんだと思うんです」

「今の自分のことを差し置いて、過去のどうしようもないことばかり考えてしまうっていうのはわかるような気がします」とミリは言う。

「想像上の自分について考えられなくなるっていうのは、簡単に言えば、本当の自分がいなくなってしまうっていうことです。僕らは本来、この世界にいる自分とここではない世界にいるたくさんの方たちの集合体として存在していると思うんです。集合体の自分のうちのどれでもあると、同時にどれでもないものとしてぼんやりと霧みたいに分散しているのが本当の自分」

そう言つて森野はテーブルの上に両手を出し、綿菓子くらいの大きさの球体を示してみせる。

「でももし僕らがこの世界だけに固定されて」と言つて彼は左手の親指と人差し指で球体の中心をつまむ——ミリは森野の手の動かし方がとても美しいと思う——「いろんな自分のうちの一つに確定して、残りの自分たちが消えてしまうと、僕らは本当の自分ではいられなくなってしまう。例えば僕は今こうして菅山さんのことを見ていて、菅山さんは僕のことを見ていて、僕から見たら菅山さんはそこにいる菅山さんではないし、菅山さんから見たら僕はここにいて僕ではない。でもそれが必ずしも本当の僕ではないし、菅山さんではないことはわかっているわけですね。僕らにはお互いに見えないものが山ほどあつて、自身にさえ見えていないものがある。その全部の合計がふわつと本当の僕らを作っている。それを了解した上で接しているわけです。でも空の上とか心の中とかにいる母親というのはこちらの都合なんて全然考えてくれない。彼女はX線のように僕の全部を見透かしてしまうし、僕はその視線を決して逃れることができない。そうすると自分がまるで彼女に動かされているロボットにすぎないような気持ちになつてくるんです」

店を出ると、ミリは少し迷ってから、事情があつて電車に乗れないので駅からタクシーで帰る、と伝える。森野は一瞬の沈黙の後で「わかりました」と言い、その後も歩きながら何かを考えているようだったが、しばらくして「サーカスの動物たちはなぜ曲芸をすることができるか知ってますか」と訊く。

ミリは首を振る。

「最近ふと興味を持つて調べてみたんです」と森野は言う。「象が後ろ脚だけで立てたり、熊が自転車に乗れたり、ライオンが火のついた輪をくぐり抜けられるのはなぜなんだろうって。それはね、動物たちが幼い頃から命令に従うまで繰り返し痛めつけられるからなんです。先のとがった金属棒で刺されたり、鞭打たれたり、電流を流されたり、食事をもらえなかったり。そのうちに彼らの心は砕けてしまう。それで言われたことを何でもすぐにやるようになるんです」

ミリは頷く。

「曲芸に感動してしまう僕はそう聞いても動物たちが『華やかな表舞台』と『過酷な舞台裏』のあいだを行き来しているように考えてしまいがちだけど、動物たちにしてみればすべてが地獄です。何一つとしていいことはない。彼らは舞台の表と裏を区別してなんかいないし、そのあいだにどんな関係があるのかもまったく理解できないわけですから。でも僕は違う。僕らにはその両方に目を配り、そのあいだの関係を理解する能力がある。人間に自分よりも弱い立場にいる者たちを守る責任が発生するのは、そのためだと思うんです」

駅のタクシー乗り場に着くと、ミリは思い切つて、今日はどうして私のことを誘つてくれたのか、と森野に尋ねる。森野はいつもの苦笑いに少しだけ普通の笑いを混ぜてこう答える。施設で初めて見たときから、菅山さんは目を離したらすぐにどこかへ消えてしまいそうな感じがした。一度タイミングを逃したら、もう二度と会うことができなくなってしまうような。それでももう少し話をしてみたいと思った。実を言うと、今日も自分がお手洗いに行っているあいだに菅山さんがテーブルからいなくなってしまうのではないかと思つてハラハラしていた。

タクシーのひんやりとした窓ガラスに頭をつけて車のかすかな振動を感じながら、私はまたあの施設に行くだろう、とミリは思う。みんな優しくて温かいし、それに——森野さんが私のことを好きなのかどうか知りたいから。ミリは森野の話を慈しむように反芻し、彼に對して異国で同じ言語を話す人と出会ったときのような懐かしさを感じる。

森野さんの話を聞いて、私の仕事が続かない理由が少しわかったような気がする。私には夢も理想も希望もないんだ。それでどんな仕事でも構わないと思つて始めると、どんな仕事も嫌になるんだ。でも森野さんは自分のことについてちゃんと考えようとしていて、話し方は暗いけど私がこれまでに出会った誰よりも明るく前向きに生きている。私は他の世界にいる自分たちのことをちゃんと考えてみようとしたことがあつただろうか。やりがいのある仕事を持っている私。誰かと恋に落ちたことのある私。疲れたときに「死にたい死にたい」と呟かずに済む私。あのことがなかった私。でもそのために私が参るべき墓はいったいどこ

にあるのだろう。

胸が針で刺されたように痛み、ミリは視線を転じて車窓の景色を眺める。過ぎ去っていくネオンサインの滲んだ光が春先の溪流のようにミリの目から流れ込み、淀んだ頭の中身を更新していく。ミリはバッグから携帯電話を取り出し、慣れた手つきでパスコードを打ち込んでロックを解除し、猫の画像や動画を集めたSNSのページを開く。

私は猫が好きだ。ふとした瞬間に——食事中に、夜寝る前に、トイレの中で——私はほとんど無意識のうちにこのページを開いてしまう。それは親の反対のせいで本物の猫を飼うことができない状況に対する代償行為のようなものなのかもしれない。いつか一人暮らしをしたら、小さな庭のついた平屋で猫を多頭飼いしてみたい。そこに近所の野良猫たちも集まってきて、私は彼らに餌付けしてやる。栄養を充分に摂った猫たちはあつという間に繁殖していく。そのようにして私は世にも近所迷惑な猫おばさんになるのだ。

ミリは自分がいつの間にか希望について、他の世界の自分について考えていることに気づいて少し微笑むが、それが今の自分と同じ箱の中で、はりつけ磔にされた別の蝶にすぎないことをまだ知らない。タクシーは街を外れ、暗い道の中に消えていく。彼女の微笑みだけが路上に残り、やがて消える。

5. 小さな仕掛け

あなたは公園に到着する。照明の少ない暗い林はどこか不気味で、どこか静謐だ。あなたは自転車止めの柵のあいだを通り抜け、土の地面に足を踏み入れる。先ほどまでの風は止んでいて、今はそれほど寒くない。

あのとき私が借りた本のリストは私の識別情報と一緒に図書館のデータベースに残っているはずだ、とあなたは思う。図書館は業務の効率化のためにレファレンスサービスの記録を取っているだろうから。茉莉は私と知り合い、私の小説を読んだ後、そのリストを検索してみたのだろうか？　そしてそこに載っている本を読んだのだろうか？

茉莉の痴漢の話は嘘だ。なぜなら私は茉莉が電車に乗るところを見たことがあるからだ。仕事の打ち合わせの帰りだったか映画を見に行った帰りだったかは忘れたが、去年の秋のある夕方、最寄り駅で上り電車を降りたとき、私は同じ電車の一両先に茉莉が乗り込むところを見たのだ。その次に会ったとき、私は「このまえ駅で見かけたよ」と茉莉に言い、茉莉は「あ、それ実家に帰ったときだ」と答えさえたのだ。

いったい茉莉の頭の中はどうなっているのか？　茉莉の話は私の書いた小説と似すぎていた。電車内での痴漢、本当の自分がいなくなること、ロボットになること。私の借りた資料と重なる部分が多すぎた。トラウマと拒食症、健忘症と虚偽記憶の想起。そしておそらく茉莉は自分が嘘をついていることに気がついていない。でなければ私の前で——小説の作者であり、資料の読者であり、彼女が電車に乗れることを知っている私の前で——あんな嘘がつけるはずがない。

しかしどこまでが嘘なのか？　小説や資料の内容と一致する部分があるからと言って、それが必ずしも嘘になるわけではない。たまたま同じような経験をしただけなのかもしれない。それに茉莉の恋人とのやりとりなどは嘘で片づけるにはあまりに具体的だった。出まかせと言うにはあまりに歴としたリアリティーがあった。茉莉は実際にセックスを前にして嘔吐し、一人で外出することができなくなり、休学して病院に通うことになり、過去の事件を思い出し、治療をめぐって恋人と口論になったのかもしれない。ただ電車での痴漢の部分だけが別の何かと入れ替わっているということなのかもしれない。だが一度ショックとともに思い出した事件が、そう簡単に別の事件によって取って代わられてしまうものだろうか？

それとも茉莉の話は——こちらのほうが事態はより深刻そうだが——徹頭徹尾フィクションなのだろうか。単に茉莉はセックスに対して自分が吐いたと思い込んでしまうほど強い嫌悪感を抱いていて、病院に行ったと思いついてしまうほど深い心の傷を抱えているということなのだろうか。あの恋人も、資料を読み漁った茉莉の中に生まれたもう一つの人格のようなものなのだろうか。初めは私の小説を読んで興味をかきたてられる程度だったが、図書館から借りてきた専門書を読んで自分が何らかの精神的な危機に陥っていることをはつきりと察知し、医師の診察を受けるように急ぎ立て始めたもう一人の自分。不穏に騒ぎ出

した記憶に電車での痴漢などというありもしない出来事で蓋をし、危機の真の原因と直面することを避けている自分のやり方を「虚偽」ではないかと責め立てるもう一人の自分。そう考えると、数年前の会話の細部があれほど鮮明であることの説明もつくような気はするが。

そのどちらなのか、どちらでもないのか、私にはわからない。茉莉に訊いたってたぶんわからないだろう。いずれにしても、茉莉が痴漢ではないにしてもそれに類する体験をしている可能性は高いのかもしれない。過去に、たぶん小学生の頃に、茉莉の身に何かが起こった。スカートをめくられたりトイレを覗かれたりという以上のことが。その体験から受けたダメージを私にできるだけ正確に伝えるため、茉莉は大なり小なり嘘をつかなくてはならなかった。それは茉莉が私に——自分自身にさえも——直接語ることができないほど強烈な、あるいは隠微な何かだからだ。嘘と本当の境界線を探すよりも、そういう全体的なものとして考えたほうがいいのかもわからない。

あなたは一人で苦笑する。だとしたらそれは私が小説を書くときにやっていることと同じじゃないか。日常の言葉遣いでは捉えることのできない強烈な物事や隠微な物事を、嘘を駆使して掴み取ること。どれが私の実体験でどれが虚構なのか後で訊かれれば答えられないこともないが、書いているときにはすべてが現実だ。たとえ虚構であっても、それは別の世界に住む別の私たちについての実話であり、私は彼女たちのことを想像し、語ることによって、初めて本当の自分に近づくことができるからだ。

でも言うまでもなく、それを小説でやるのと現実生活でやるのでは全然意味合いが違う。茉莉がやっていることはどちらかと言えば——茉莉の希望に沿って「病氣」という言い方を避けるなら——狂気に近いものだ。

改めて考えてみると、茉莉の周りには悪い人間が多すぎるような気がする。司書は本当に「理不尽に」、「ものすごい剣幕で」怒ったのだろうか。茉莉の元恋人は（実在するとして）本当に「にやりと」笑い、テニススクールの主婦たちは本当に「すごく嫌な顔で」笑ったのだろうか。正当な指導を、屈託のない笑顔を、茉莉は被害妄想的に歪めてしまっているだけなのではないか。茉莉は自分のことを語るために私の小説の一部を借用しておきながら、同時にそれを「痴漢に遭ったせいで電車にも乗れないし性的な関係も持てない」という「そのまんますぎる」ことが起こる「出来の悪い小説」だと考えてもいた。確信を持った態度を取る私に対して「裏で悪口を言っている」のは、本当は茉莉なのではないだろうか。他人が何を怖がっているのかを求めているかなんて、そんなに簡単にわかるはずがないではないか。

六鹿茉莉のもとから全力で逃げ出したい気持ちがああなたの胸の奥で生まれたての幼虫のように身をくねらせる。私には茉莉の抱えているものを支えきれないかもしれない。茉莉の混乱が私にまで乗り移って、私たちは共倒れになってしまうかもしれない。第一、茉莉は私がそばにいることなんて、本当は少しも求めていないのかもしれない。

林を抜けると視野が開ける。そこでは花をつけるにはまだ間があるミモザやフジやツルバラや、枯れた芝生の隙間で地面にへばりつくようにまばらに生えた雑草が、月の明かりを

受けて上空の星たちとの対応関係を示すように滑らかに輝いている。あなたは右に折れ、野原を縁取る緩やかな坂道を登り、背後の木々が差し伸べる葉叢はむらの陰に半ば埋もれて設置されたベンチの一つに腰掛ける。上映途中の名画座に立ち寄るように、濃い闇の中に身を沈め、筋書きのわからない光の世界を覗き見る。

三雲くんが茉莉に気持ちを伝えたとして、果たしてあの二人はうまくいくだろうか。茉莉がどんな反応をするのか、今となってはまったく予測がつかない。茉莉は心の底では私のことを憎んでいて、三雲くんが私を振って自分のところに來た事実にはくそ笑み、すぐに付き合い始めるかもしれない。

あるいは茉莉は——やはりこちらのほうが順当に思えるのだが——私と付き合っていた人と恋人になるなんて、考えることすら嫌がるかもしれない。そして三雲くんと二人きりで会うことを頑として拒絶するかもしれない。茉莉は三雲くんの一連の行動を人倫もとに悖るものと考え、私の内心を想像して自分のことのように傷つくかもしれない。

しかしこれはすでに私も了解していることなのだと三雲くんが伝えたらどうか。三雲くんと私のあいだでちゃんとした話し合いが持たれて、彼が茉莉のことを好きになってしまったことを私が一応納得した上で別れたのだと知ったら。おそらく茉莉は私に尋ねるだろう。どうしてそんな一方的な言い分を受け入れたのか、彼はどういうつもりなのかと。私は言うだろう。私たちが別れた経緯について正確に説明するのは難しいが、それが今の三雲くんの気持ちだから、茉莉には一度彼のことを真剣に考えてもらいたいと。私のことを気にする必要は全然ないからと。

茉莉は私がそう言うのには裏があるのではないかと勘繰るかもしれない。これまで男性と深い関係を持つことができずにいた茉莉に普通の恋愛を経験してもらいたいという余計な気遣いから、私が自分の本当の気持ちを押し殺してそんなことを言っているのではないかと。そんな同情みたいなことだったらやめてほしい、と茉莉は言うかもしれない。そういうことじゃない、と私は言うだろう。三雲くんはもう私と付き合うつもりはないし、私もそんな人にわざわざ付き合ってもらおうとは思わない。それだけのことなのだと。

もう彼に未練はないのか、と茉莉は続けて訊くかもしれない。未練の有無というのはとても微妙な問題だ、と私は答えるだろう。ひょっとしたら未練はあるのかもしれない。でもたとえそうだとしても私はその未練をまったく考慮に入れない。自分にどんな感情の余韻があるうとも、関係はすでに終わっているし、感情はいずれは事実に従うものだ。淡泊なようだが人生というのはそういうものなのだ。私は強がっているわけじゃない。私は嘘をついたりはしない。特にあなたの前では。

茉莉は私のこの説明に納得するだろうか？　するかもしれないし、しないかもしれない。いずれにせよ私の未練と茉莉が三雲くんのことを好きになるかどうかというのは別の話だ。茉莉には消えない抵抗感があって、自分が三雲くんのことをどう思っているかについて考

えてみる余裕はないかもしれない。

二か月が経過し、三か月が経過する。三雲くんは茉莉に嫌われてしまわない程度にやんわりと間歇的にアプローチを続ける。一年が経ち、二年が経つ。その頃には私にも新しい恋人ができているかもしれない。私はその新しい恋人をさっさと茉莉に紹介してしまう。それで少しでも茉莉に気を奪われるような男だったら別れてしまえばいい。もしかしたら私は茉莉の存在を彼には一切知らせないかもしれない。それはどちらでもいいが、とにかく私は茉莉のほうには新しい恋人ができたことを告げる。そうすれば茉莉は三雲くんのことを——三雲くんの性格と茉莉の魅力を考えれば、彼がその時もまだ茉莉のことを思い続けている可能性は低くないはずだ——もっと中立的に考えられるようになるだろう。三雲くんが基本的にはまっすぐで真摯な愛情を持った人であることにも気づき始めるだろうし、自分が三雲くんの過去に囚われて現在の彼に向き合おうとしていないことが、茉莉自身、昔の恋人（彼がいるのが茉莉の頭の中であれ外であれ）からされて嫌だったことと同じであることにも思い至るだろう。

さて、仮に二人が付き合うことになったとして、彼らは性的な関係を持つことができるだろうか？ 話を聞く限りでは、茉莉の性に対する忌避感¹は極度に強いように思える。三雲くんもやがてその事実に行き当たるだろう。だがそれについて本で調べたりはしないだろうし、たとえ調べたとしてもそこで得た知識を本人の前で口にしたりはしないだろう。彼はそういうタイプではない。おそらくその事実をただ静かに受け入れて、茉莉が自ら進んでチャレンジしてみようと考えるまでは何も言わずに自分の性欲を棚上げしておくことだろう。実際に付き合った人間に言わせれば、彼はそれくらい強い人だ。他人の弱さを克服させようとするよりは庇おうとする、深い愛情というよりは大きな愛情を持った人。

三雲くんの性欲。彼も健康な若い男性だから、周期的に性欲のはけ口を見つけて射精することになる。だがコントロールはかなり利くほうだと思う。私が乗り気でないときには彼は絶対に自分の目的を強引に成し遂げようとはしなかった。私の額にキスしたり肩や背中を優しく触ったりして私の気分が本当に変わらないものなのかどうか確かめてみて（変わることもあった）、それでもどうにもならないとわかると、三雲くんはコミュニケーションの手段を会話に切り替え、私たちはどちらかが眠ってしまうまで思いつくまに言葉を交わした（茉莉と出会ってからはこのようなときに彼女の話題が役に立った）。これは私の推測にすぎないが、どうしても頭を切り替えられないとき、彼はトイレに行ってマスターベーションをしていた。

こうした三雲くんのやり方に私は初め驚いたものだ。私はそれまで男性というものは恋人が多少嫌がったとしてもそれを誘惑の一形態のようなものとして受け取り、胸や性器に触れて最終的に彼女をいかせさせればすべては丸く収まるのだと考えているものだと思っていた。いや、むしろ自分がそう思っていたことを私は三雲くんと付き合ってから初めて知ったのだった。他の男性たちと一緒にいた頃、私の一部は彼らの考え方と同化してしまっていた。私自身、自分はそういうものだと思っていたのだ。私は男性から襲われることにも

快楽を感じる人間なのだと。

今になって振り返ると、彼らのそうした行為はどう考えても恋人間レイプとしか言えないものだった。確かに私は自分でマスターベーションをするときに男性から襲われるシチュエーションを想像したりすることはある。でもそれとこれとは全然別のことだ。うまく説明できないが、正反対のことだと言ってもいい。

以前のことを思い出すと、私は自分の未熟さに情けなくなる。それと同時に、男性という存在を一般化して考えてしまうことの危うさを認識する。男性にだっていろんな人がいる。性欲そのものは似たりよったりかもしれないが、性欲との向き合い方は本当に人それぞれに違っている。

三雲くとセックスをするようになってしばらく経った頃、私の自宅のコンピュータが壊れ、修理が終わるまで仕事ができなくなってしまったことがあった。私は三雲くに頼み、彼の部屋のデスクトップを使わせてもらうことになった。初めは昼間だけのつもりだったが、朝早く出勤して夜遅くまで帰ってこない彼のために食事を用意しているうちに、私は平日も彼の家に寝泊まりするようになった。どちらかがそうすることを提案したわけではなく、自然にそうなったのだと思うが、私が帰りたくなかったのは確かだ。

そんなある日の昼過ぎ、インターネットで調べものをしていたときに私は使っていたウインドウを誤って閉じてしまった。改めてウインドウを開き、検索履歴から消してしまったページを回復させようとしていると、画面の下の方に並んで表示されているいくつかのページタイトルが目に入った。それらは明らかに成人向けウェブサイトのものだった。

少し躊躇しながらも私はその中の一つをクリックしてみた。すると自宅らしき部屋にいる下着姿の若い女の子の映像が流れ始めた。女の子はソファに座ってカメラに正対し、片手で胸をまさぐりながらもう一方の手で太ももを撫でさすっていた。下着を脱ぎ、足を広げると、性器にはモザイクがかかっていなかった。女の子はクリトリスの周りをゆっくりと触り続けてオーガズムに至り、膣にディルドを挿入してもう一度オーガズムを迎えると映像は終わった。

続けて私はそれらしきタイトルのついた数週間ぶんの履歴を見てみた。被写体がカメラの存在に気づいているものと気づいていないものの別はあったが、そのすべてがマスターベーションをしている女性の動画だった。「三雲くん」と私は一人でディスプレイに向かって言って笑った。「三雲くん」。三雲くんはきっと根っこからそういう人なんだ。彼は男性主導の一般的な――男性が女性の顔や胸に精液をかけることで己の縄張りを主張するような――アダルトビデオよりも、女性が主体的に自分の性欲を解消している映像のほうが興奮するんだ。もちろんそういう映像にも男性が関わっているものは少なくないのだろう。カメラの後ろとまでは言わずとも、その種の映像を配信するビジネスを営み、彼女たちに金を払っている男性たちは存在するのだろう。たとえ彼女たちの一部が単独で自発的にカメラの前で裸を晒しているのだとしても、そうすることへのインセンティヴを彼女たちがこの男性中心の社会で育つ中で得てきた可能性は否定できないだろう。三雲くんだってそれくら

いのことはわかっているだろう。それでも彼は表面^{い、い、い}上だけでも、女性が自らの性欲を認めることを必要としているのだ。私は仕事を中断し、日が差してぽかぽかと温かくなった三雲くんのベッドに潜り込んで自分の身体を触り始めた。

私はまだ三雲くんのことが好きだ、とあなたは硬いベンチの上で身体を丸めながら思う。さつきは「三雲くんにはわからない」とか「特権的な立場にいる」とか、ちよつと言い過ぎてしまったかもしれない。もしそうだとしても、それは彼のせいではないではないか。三雲くんは私の小説の内容を忘れていたけど、私だって三雲くんが大切にしている車の名前を全然思い出せない。あんなに長い『モンテ・クリスト伯』だって、たった一つの場面しか憶えていない。人のことは言えない。

あなたは視野の隅に小さな違和感を覚える。そちらに目を向けると、野原の反対側の小道に面した東屋に人影のようなものが見える。近くの水銀灯が濃い闇を作っているその屋根の下で、一人の男性が四角い腰掛け台の一隅に腰掛けてこちらをじつと見つめているような。

あなたはその黒い塊が動くかどうかしばらく見守る。変化はない。目の錯覚だろうか。確かにあれが人間なのだとしたら、この寒さの中で薄着すぎるような気もする。だがそのシルエットの細さが不吉な予感を煽りもする。

どちらにしてもそろそろ帰ろう。そう思つてあなたは立ち上がる。東屋から目を離さないようにして歩きながらその人型が動かないことを確認し、公園を出る。

夜は一番深い時刻を迎えている。街の浸透圧が最も低くなり、私生活のほうが逆に街の中に染み出していくことさえできる時刻。街そのものがあなたの部屋になり、夜の世界の王様になったような気分で住宅街を闊歩することのできる時刻。

しかしたとえ街の中に染み出していったところで、あなたの私生活はあなたの私生活だ。現在のところ、そこには愉快なことなど何一つない。住人たちの寝静まった家々の暗い窓を見つめっていると、あなたは人類がまだ滅亡しておらず、太陽がまだ消滅していないのか、本当に確実だとは言いいられないような気分になってくる。

こんなに暗くて寂しい街にふたたび朝が訪れ、ふたたび人々が地を満たすなんていうことがあり得るのだろうか、とあなたは思う。そうしたことを現実に起こすには、どこかでまだ目を覚ましているはずのわずかばかりの有志たちから、少しずつ祈りのようなものを集める必要があるような気がする。もし他に誰も祈ってくれる人がいないなら、私一人のかなり強めの祈りが。

なのにどうして恋人と付き合っているときには誰かと一緒にいることがあんなにも当たり前のことに思えてしまうのだろう。どうして相手を大切に扱うことが——相手がこう扱ってほしいと思っている通りに扱うことが——できなくなってしまうのだろう。私たちが放り込まれているこの無限の暗闇のことを考えれば、そんなことはとても簡単はずだし、何よりもまず初めにやらなくてはならないことではないか。

自宅につながる、車一台がやっと通れるほどの広さの道に入ると、やがて背後からアスフ

アルト上の砂粒を踏みしめる靴音が規則的に聞こえてくる。心臓がどきんと一度大きく鼓動して、あなたは歩みを止める。あれはやっぱり人だったんだ、とあなたは思うが、恐ろしくて振り返ることができない。

コート襟をぎゅつと掴んで速い歩調で歩き出す。するとその足音も速くなる。元のスピードに戻してみる。すると足音も遅くなる。だが距離は確実に縮まってきている。間違いない、その男はあなたの後を尾けている。呼吸が浅くなり、恐怖が高まっていき、あなたは内臓の正常な働きを妨げる毒素のようなものが鳩尾の^{みぞおち}辺りからじわじわと広がっていくのを感じる。

その恐怖がある目盛りに達したとき、あなたは自分の頭の中のどこか暗い場所で古い振り子時計の長針がかちりと動く音を聞く。長針は真上を指していた短針と重なり、金属製のハンマーがあなたの頭蓋骨を共鳴させながら乾いた鐘の音をぼんぼんと鳴らし始める。

一つ、二つ、三つ。

ちよつと待って、とあなたは思う。何、これ？

四つ、五つ、六つ。

今は十二時じゃない。この時計はずれている。

七つ、八つ、九つ。

時計はあなたの意向を無視して新たな一日の始まりを告げ続ける。鐘が鳴るたびにあなたの恐怖は霧が晴れるように消えていき、代わりに別のものが現れてくる。これまでずっとぼやけていたものが、くつきりとした像を結び始める。

それは怒りだった。

十二の鐘が鳴り終わると、あなたの怒りがその全貌を現す。それは無人の海岸で砂丘のような小山を作っている。高さは二十メートルから三十メートルといったところだろうか、ただでなく両手も使って攀じ登らなければならないような急峻な山だ。その頂上には天を衝くような一本の巨木が凜として屹立している。木は枝葉を欠いていてまるで丸太のようだが、どこにも切り取られた跡はなく、先端は緩やかな丸みを帯びていて、その向こうでは夏の午後の太陽が燦々と照り輝いている。つるりとした樹皮はバオバブのように見えなくもないし、その赤茶けた色味はセコイアのように見えなくもない。あなたは砂山の麓にいて、白いリネンのワンピースを着て白いキャンバス地のスニーカーを履いている。熱くなった足先に木の影の先端が触れている。

今夜の私は腹を立ててばかりだった、とあなたは思う。自分に腹を立て、茉莉に腹を立て、三雲くんにも腹を立てた。でももしかしたら私は思い出せないくらい昔からずっと怒っていたのかもしれない。怒ることが当たり前すぎて、その異常さに気がつくことができなくなっていたのかもしれない。恋人から半ば強引に性器を挿入されることの意味にずっと気がつかなかったように。

砂の中から伸びた、葉や花をつけることのない木をもう一度見上げると、あなたの興奮は

さらに高まる。心なしか木はより太く、より長くなったような気がする。限界まで堆積した砂がさらさらとこぼれ落ちてくる。

あなたは現実世界における——夏の午後ではなく冬の深夜における——自分の靴音に注意を向ける。スウェードのショートブーツはこつこつというクリーンな音を立てている。この道にはもともと砂なんて落ちていないはずだ、とあなたは思う。でも現に男はざりざりと嫌な音を立てて私の後を尾けてくる。ひよつとして、砂を撒いているのは私なのだろうか。からからに乾いた身体はどこから溢れ出した砂が、スカートの裾のあたりから地面にこぼれ落ちているのだろうか。

しかしあなたにそれを確認する余裕はない。あなたは虚空に剥き出しになった木をどこかに入れなくてはと思う。ぴつたりとサイズの合う、温かく濡れた柔らかな穴の中に。でもそんなに大きな穴はどこにも見当たらない。誰もあなたのためにそんな穴を用意してくれてはいない。それはこの世界においては想定されていないものだからだ。

飢餓と渴望があなたを襲う。入りたい、入りたい、とあなたは思う。もしこれをどこにも入れられなかったら、私は気が触れてしまうかもしれない。

あなたは後ろから見えないように気をつけながら、バッグから手探りでアウトドア用のマルチツールを取り出す。普段ワインを飲まない三雲くんはコルク抜きを持っていないので、誕生日会のためにあなたが家から持参したものだ。手のひらにしつくりと収まる、ほどよい重みを持ったその小さな仕掛けから、あなたは指先で大きいほうのブレードを引っ張り出す。

街灯の下でざらりと光るその刃に、あなたの顔が一瞬映り込む。その顔は怪物のように醜く歪んでいて、とてもあなた自身のようには見えない。それがまたあなたを自暴自棄にになってしまうほどに怒らせる。

自宅の前に辿り着き、あなたは立ち止まる。途端に怒りが頭の中から消え去り、手足の隅々にまで行きわたる。手足は頭に向けて一つのメッセージを返してくる。「脳からの指令にいつでも精確に応じる準備ができている」と。あなたはすでに穴を穿つ位置を決めている。鎖骨が出会うところ、のどぼとけのすぐ下の柔らかくなっているところ。もしそこが露出していなければ手首を返して顎の下のリンパ節のあたりに押し込む。逃げ出しても追いかけて何度も何度も出し入れする。繰り返してやって来るはずの大きな波がすべての砂を攫^{さら}っていつてしまうまで。その慰めようのない木が海の中に転げ落ち、引き潮に捕らえられて海流の果てへ流されていつてしまうまで。

公正、正当、適正——あらゆる正しさがあなたの一身に集中し、あなたは正義の女神になる。左手の天秤はその平衡を回復するために右手の剣が振り下ろされることを望んでいる。ほとんど哲学的なくらい清澄な気分だ。足音はもうすぐそばまで迫っている。

来いよ、とあなたは思う。私がお前を空き家に変えてやる。

あなたは素早く背後を振り返る。しかしそこには誰もいない。わたしはすでに浮揚し、あなたを頭上から俯瞰している。

6. 新しい溺れ場所

シャワーを浴びて温まったはずなのに、まだ身体の震えは収まらない。あなたは冷蔵庫を開け、赤ワインのボトルを取り出す。寝る直前に酒を飲むと悪夢を見る癖があったが、背に腹は代えられなかった。グラスに注いで一息に飲む。

明かりを消すと部屋は真っ暗になる。夜明けはまだ先だ。あなたは冷たいベッドに潜り込み、ぶるぶると大きく身体を震わせる。そうしていると自分のことが哀れに思えてくる。いや、もっと正確に言うなら、あなたは自分を哀れに思っているわけではない。あなたはわたしがあなたのそんな姿を哀れに思うだろうという期待をかけているだけだ。それはある種の甘えのようなものだ。もちろんわたしはあなたのことを哀れに思っている。

そのおかげか、だんだんと寒気は収まってくる。ワインのおかげで血流も活発になる。手足が徐々に温かくなり、花が開くように身体の中心の筋肉のこわばりが解けていく。甘美な

眠りの予兆に包まれながら、あなたは自分で自分に眠る前のお話を読み聞かせるように、

『こんなところでただ一人』の最後の短編のことを思い出す。いや、もっと正確に言うなら――まあいい。とにかくそれはこんな話だ。

その六十代の男は自分が誰かに尾けられているという考えが頭から離れない。想像もつかないような理由で、想像もつかないような位置から、誰かが自分のことを観察している。いつかその人間に背後から刺されるかもしれない。飲み物に毒を入れられるかもしれない。男は初め警察に行き、それから探偵事務所に行ってその人間を捜し出すように依頼するが、一笑に付されて相手にされない。男はその誰かの姿を見たことすらないのだ。

それがいつ始まったのか、男には思い出せない。初めて気づいたのは二カ月前、別れた妻が死んだ頃だ。でも一度意識してみると、観察はもつとずっと以前から続いていたような気がする。

長男は元妻の葬式があったことを手紙で知らせてくれたが（臍臓がんだった、葬式は故人の希望で「身内だけで」執り行った）、家庭では暴君のように振る舞っていた父親のところに二人の息子たちは寄り付かない。結婚後すぐに購入したその一人で住むには広すぎる一軒家で、男は日が落ちてでも電気も点けず、カーテンの隙間から外の様子を窺い、懐中電灯を持ってクローゼットの中を順番に確認していく。外出するときにはパトカーの赤色灯のように頭をくると回転させながら歩く。生け垣の隙間から誰かがこちらを覗いていないか。遠くのマンションのベランダで誰かがこちらに双眼鏡を向けていないか。だがそれらしき人間は見当たらない。

そんな生活をしばらく続けた後で、男は今のようなやり方を続けていても犯人は捕まえられるまいだろうという結論に行き着く。ここには何かからくりがあるはずだ。遠い昔、学生の時分によく読んでいた推理小説に出てくるような巧妙なからくりが。そこで男の頭に一つのひらめきが訪れる。そうだ、きっとそいつは俺を殺す隙を狙って観察しているわけじゃ

ない。観察そのものが目的なんだ。観察することによって俺の行動に影響を与え、自ら手を下すことなく一人の人間の人生を台無しにしようとしているんだ。汚い手口だ。であるなら一番の対抗手段は以前の生活を意地でも続けてみせることだ。

こうして男は平静を取り戻す。電気を点け、近所を堂々と歩くようになる。いかにも普通に、晩酌しながらテレビを見て——ほとんどの場合、男はテレビに出ているお笑い芸人たちが何を言っているのかまったく理解できなかったのだが——笑い声をあげるようになる。

「ははは」と。その愉快な声が「そいつ」に届くように。しかしそんな不遜な行為が観察者を本格的に怒らせてしまうのではないかという不安も拭い切れない。不安は徐々に蓄積し、男は以前の精神状態に逆戻りしそうになる。女だ、と男は思う。女が必要だ。

男は精力増強剤を飲み、年金を握りしめて馴染みのソーブランドに行く。これだけはやめられない。風俗通いも四十年ともなれば一廉ひとかたじけなくなものだ。一人ひとり異なっている顔つきや身

体つきから、男は女たちを瞬時に定量化する。四十六点。二十三点。七十五点。だが男の計算機が八十点以上を示すことはなく、同じ女を二度買うこともない。どんな女もそこまでの評価には値しないからだ。俺はもともと女なんか好きじゃないんだ、と男は考えている。性的なことを除いたら、俺はむしろ男のほうが好きなくらいだ。

指名したアカルという名前の女が現れる。二十歳くらいだろうか。胸をちょうど覆い隠すほどの長さの豊かな黒髪。幼さを感じさせる丸顔とは対照的にすらりと伸びた身体。南国の果実のように熟れて下を向いた乳房。動物的な生々しさの漂う大きめの乳輪。だがその表情にはどこか人を寄せつけない、こびりついたような暗さがある。五十二点。

抱き寄せるとアカルには神経を麻痺させるような抹香に似た独特の体臭があり、男は早くも勃起する。アカルは男の足元にひざまずき、片方の耳に髪をかける。細かな産毛の生えた耳たぶに小さな赤い石のついたピアスが見える。男はアカルの口の中に射精する。二人は風呂に入り、それから性交を始める。

アカルが上になって腰を動かしていたとき、男にはゆらゆらと揺れる彼女の乳房が自分を見つめる二つの大きな目のように見える。男がアカルの顔を見ると、彼女は何かを保証するように小さく微笑む。見つけた、と男は思う。「お前だろう、この野郎」。男は性器を抜いて立ち上がり、あつけに取られているアカルにさんざん打撃を加える。アカルは部屋から逃げ出し、騒ぎを聞きつけた若いマネージャーがやってきて男を殴り倒す。男は通用口から叩き出され、階下の裏通りに服を投げ捨てられる。

時刻は昼の三時で、傾きかけた太陽が非常階段にくずおれている男の餓鬼のように腹の出たみずばらしい身体を呆けたように温める。のこのこと目の前に現れやがって、あのクソアマが。まさか犯人が女だとは思わなかった。

その日から男の不安は消える。誰かに観察されている感じは残ったが、アカルだと思えば腹は立ちこそすれ恐怖はない。

いつでも、どこにいても、男はアカルのことを考え続ける。謎みたいな顔をしたあの女。

どこかしら宿命的な匂いのするあの赤いピアス。あの自己充足感の漂うやたらと偉そうな胸。

もう一度あの女に会う必要がある、とひと月ほど経った頃に男は思う。もう一度会って、いったい俺に何の恨みがあるのか、どういふつもりで俺を観察しているのか、直接問い質してやる。

男は簡単な変装をしてソーブランドに向かうが、すでにアカルは店を辞めてしまっている。店の人間に訊いても彼女がどこに行ったのかはわからない。男はとぼとぼと家に帰り、いつもより静かに感じられる部屋で酒を飲む。テレビをつけ、笑ってみる。電気を消し、クローゼットを開けてみる。カーテンの隙間からそっと外を覗いてみる。誰もいない。誰もいないだけではない。誰ももう自分のことを観察していない。男は解放され、自由の身になっている。

そのとき男は自分が枯れてしまったことを知る。自分の性器が役目を終え、少なくとも現世においては排尿の用途以外にも二度とそれを使うことはないだろうということが直感的にわかる。男の計算機が〇点をはじき出す。

男はその場にへたり込む。暗い。何も見えない。俺の未来に待っているのはあとともう死くらいしかない。こんな状態では一日たりとも生きてはいけない。男は生まれて初めて自殺というものが具体的で有力な選択肢として目の前に突きつけられるのを感じ、たまらなくなつて部屋の闇に向かって訴えかける。「なぜなのでしょうか」と。

「なぜ私が手に入れたかと思っているものはいつも手に入らないのですか。私が人に暴力を振るうからですか。しかし私も父に暴力を振るわれたのです。当時母から聞いたところによれば、父は太平洋戦争でトラック島に赴き、復員してみるとまるで人が変わったようになつていたそうです。年端も行かない私を父は激しく責め苛みました。ほら見てください、私の眉間には今でもそのときの傷が残っています。左耳の聴力だってほとんどありません。嫌な現実を忘れるためだったのでしょうか、幼稚園児の私はすでに自慰行為を覚えていました。そして私が八つのとき、母は私の弟を産んだ直後に蒸発し、怒り狂った父は弟をどこかの施設へやつてしまいました。

やられた、と私は思いました。母さんと弟は父さんからうまいこと逃げおおせやがつた、と。そんなことが可能だなんて、それまでの私には思いも寄らなかったのです。一人取り残された私は、酒量が増えてますます気性の荒くなつていく父から殴られるたびに外へ逃げ出しました。履くものも履かずに玄関から駆け出していくとき、父はいつも私の背中に『どこかへ行けると思っているのか』と怒鳴りました。今でもその言葉の響きは聞こえない耳の中に封じ込まれるようにして残っています。『どこかへ行けると思っているのか』。もちろん子どもの私に行くところなんてありません。

父親と二人きりの部屋の片隅で震えながら、私は絶対に父親のような人間にはならないと何度も心に誓いましたが、気がつくと同じように妻や息子たちを激しく責め苛んでいました。私はどうしても許せなかったのです。出産してだらしなく体形の崩れていく妻を、

成長して生意気になっていく子どもたちを。私はそれを一つのプログラムのようなものとして考えました。ええ、私はコンピュータの集積回路を作る会社で働いていたのです。三十八年勤め上げたんですよ、立派なものだと思いますか？ 上司と言えば親も同様、部下と言えば子も同様。これが私のモットーでした。最近ではガバナンスだのコンプライアンスだの言いますがね、最後に残るのはやはり義理と人情、これに尽きますよ。大して出世はしませんでした（同僚たちを蹴落とすためにいろいろと根回しはしたんですがね）、会社にはその面で多大な貢献をしたと思っています。おかげで『困ったことがあったら佐野さんのところに行け』という評判が部下たちのあいだで広まってしまったくらいです。ははは、いやいや、あれには参ったな。でも妻や息子たちは私のそんな苦労などいざ知らず、私の家で私の金を使いながら、私に対して払ってしかるべき敬意をまるで払わずにのうのうと生きていってしまった。あの萎びた飯炊き女め。世間を知らない青二才どもめ。

ああ、すみません、プログラムのことでしたね。父は戦争でプログラムをもらってきて、それを幼い私にロードしたわけです。銃に弾丸を込めるように。そして親になった私はそいつを息子たちめがけてぶっ放してやった。妻は初めのうち泣きながら私のことを止めようとしていましたが、やがて自分でも子どもたちに手を上げるようになりました。あいつは私と結婚した当初（あいつは私に近寄ってきたたくさんの女たちの一人でした。私にはただ普通にしているだけで女たちの母性を呼び覚ますことのできる自然な能力が備わっていました）、可愛い子どもを産みさえすればすべては薔薇色になると思い込んでいたんです。まるで魔法の呪文を唱えるみたいに、人生のあらゆる問題が解決すると。でもそんなの子どもに対するエゴの押し売りじゃないですか。私はずっと『何を言っているんだ』って警告していたんです。『もつと現実を見なきゃだめだ』ってね。そして長男が生まれ、次男が生まれ、子どもたちが思うように言うことを聞かなくなると、あいつは上の息子の身体を一晚中つねったりするようになりました。明け方になって息子の身体が痣だらけになっているのを見て『どうしたの？』なんて驚いている妻に私は言ってやりました。『それ見たことか』ってね。あんな夢を見てるからしつぺ返しを食らうんですよ。

私自身も初めは小さな子どもを殴ってしまう自分に罪悪感もありましたがね、ちょっと待てよ、と思ったんです。確かに私のしていることには問題があるかもしれない。だとしてもね、それはこの日本という国家の歴史の問題ですよ。歴史は風化させてはいけません。歴史から学ばなければいけない。父親もよくそう言っていました（最後はアルコールにやられて死にましたが、私を殴るとき以外は基本的にとても優しい父親でした）。いわば私は子どもたちが日本人たる所以を忘れないように泣く泣く鉄槌を振るっていたわけです。犬畜生と同じ、言葉が通じない相手に教育を施すのに他に手段はありませんからね。そうやって子どもと真正面から向き合って共に泣き笑い、苦楽を分かち合う。結局のところ、私は最初から責任ある父親の役割を果たしていただけだったんです。

そうそう、手紙によれば、上の息子のところに今度子どもが生まれるそうです。ああ、もう生まれたのかな？ 『でもあなたに会わせるつもりはありません』なんて鬼の首を取ったように書いてありましたかね。私はね、とても楽しみにしているんです。いつか息子が自分の身体に埋まっている弾丸をぶっ放して新しい世代にプログラムを継承することだね。そのとき息子は私が常々言ってきた『清濁併せ呑む』という格言の意味を真に理解し、私たちは和解できるでしょう。親子の縁というのはそんなに浅いものじゃありませんからね。

ええ、ええ。そのやり方が悪かったというなら謝りますよ。この通りです。だからもう一度だけあの女に会わせてほしいんです。他には何もありません。あの女さえいれば私はいい人間になれると思います。心を入れ替えて、やっとこさ歴史の重責から解き放たれて、一人の女を幸せにできると思います。いなきやどうにもなりやしませんね。糞を撒き散らしながら生きていくだけです。あなた、一人の人間が鬼になるか天の使いになるかという瀬戸際にいるんですよ。まさか見捨てたりはしないでしょう？ 大丈夫、もう暴力は振るいやしません。ただ話を聞きたいだけです。どうして私を観察していたのか。どんな事情があって風俗嬢になったのか。私は昔からその手の話を聞くのが好きなんです。いろんな人の苦労話や不幸話、告白や暴露みたいなことをね。そういう話を聞いているとね、私は初めて胸いっぱいに空気が吸えるような気持ちになるんです。人間って可哀想だな、でも可愛いなって。美空ひばりが歌っていたみたいにね。墮落しているように見えるかもしれないがね、そういう話に心が揺さぶられる程度には私にも人間らしさというものが残ってるんです」

すると二階から物音が聞こえてくる。古いテレビの砂嵐のような、ざあざあという音だ。男は色めき立って雀躍りし、笑いを押し殺すように口に手をやって階段をそろそろと上がる。

音が聞こえてくる部屋のドアを開けると、闇の中で携帯電話のディスプレイだけが明るく輝いている。音もそこから出ているようだ。男が泥棒のようにすり足で部屋の中に入っていくと、裸の女がソファの上で携帯電話に向けて足を開いている。顔を見ると、それは六鹿茉莉だった。

「茉莉、まだ寝てなかったの？」とあなたは言う。「携帯、持ってたの？」

六鹿茉莉はあなたの質問に答えない。ローテーブルの上には二冊の本が重ねて置かれていて、彼女はそこに立てかけられた携帯電話を魅入られたように凝視しながら性器を弄んでいる。上に載っているのは『夜中に犬に起こった奇妙な事件』だったが、下の本の題は見えない。

あなたはその場に立ったまま六鹿茉莉の身体を眺める。しつとりと上気した肌理の細かい肌に陰毛の黒さが映えている、柔らかな曲線だけを使って作られた美しい身体。同じ女なのに思わず性的に煽られてしまいそうになる身体。でもどこかがおかしい。何かしら不自然な感じがする。あなたの目は六鹿茉莉の大きな胸に行き着く。仰向けになってソファにもたれかかっているのに、それは少し丸すぎるし、張りすぎているように見える。偽物だったん

だ、とあなたは思う。

クリトリスでオーガズムを迎えると、六鹿茉莉はソファの隙間から大きなデイルドを取り出し、ためらうことなく性器に入れる。「男の人とちゃんと付き合ったことがない」という彼女の言葉をあなたは思い出す。「付き合ったことはあるんだけど、そういう関係にならなかった」。それらの言葉は茉莉が処女であることを必ずしも意味しないだろうか？ 例えば茉莉がちゃんと付き合っていない人と「そういう関係」になったことがあると解釈する余地はあるだろうか？ あなたは六鹿茉莉が出してくれた色違いのマグカップのことを思い出す。

「茉莉」とあなたはもう一度呼びかけるが、六鹿茉莉が気づく気配はない。携帯電話からのノイズで声がかき消されてしまっているのかもしれない。

そういえば茉莉はさっきから何を見ているのだろうか。そう思っただけであなたがディスプレイを覗き込むと、そこには川のようなものが映っている。台風のとくように茶色く濁って激しく逆巻く大量の水の流れが、画面いっぱいに大寫しになっている。折れた枝や白いビニール袋のようなものが時折その中を流されていく。どこの国のどこの川なのかはわからない。録画されたもののなかりアルタイムのもののかもわからない。だがそれが人工的に作られた映像ではなく、どこかに確実に存在する（存在した）濁流なのだということはわかる。見続けていると目が回ってしまいそうな気がして、あなたはディスプレイから目を逸らす。すると六鹿茉莉はあなたのことを見ている。デイルドはすでに性器から抜かれている。

「さっき下で言っていたこと、本当？」と平板な口調で六鹿茉莉は訊く。同時に川の音が背景に退くように小さくなる。「他人の不幸話が好きだっていう話。ニコちゃん、私のことを不幸な人間だと思っていたの？ だから一緒にいたの？ 自分が気持ちよくなるために」

「違う違う」とあなたは両手を振って慌てて否定する。「あれはあなたのことを言ってたんじゃないよ。だいたい、私はあなたが不幸だなんて知らなかったし」

「じゃあ今は不幸だと思ってるんだね。今のままじゃいけないと思ってるんだね」

ああ、しまった、とあなたは思う。口が滑ってしまった。

六鹿茉莉はうつむき、視野の端にある何かを盗み見するような不思議な目つきをしよう。「私たち、友達をやめたほうがいいんじゃないかな。一緒にいても、お互いのためによくないと思う」

二人のあいだに沈黙が降りる。川だけがまだ低い持続音を立てて流れている。でもその音は小さくなったままだ。そこにはまだあなたの返答に対するかすかな期待のようなものが感じられる。

「茉莉、私ね、こんなふうに思うの」とあなたは切り出す。「たぶんね、二人の人間が一緒にいるっていうことは、二つの異なる世界が一緒にあるっていうことなんだと思う。同じ世界に住む二人の異なる人間が一緒にいるっていうことじゃなくて。そしてお互いの世界の成り立ちがあまりに違っていると——例えばチェスの選手とボクサーが試合をするみたいなことになる——相手が狂っているように見えたり、宗教がかって見えたりするんだと

思う。特に相手が論理や科学を拒んでいる場合には。でも私たちは心というものを持っていて、そのためにみんなどこかで論理や科学を拒んでいる。ある意味では誰もがそれぞれの仕方です狂っていて、宗教がかっている。だから、他人と真剣に向き合うっていうことは、人が得体の知れないものに対して抱く本能的な嫌悪感と向き合うことでもあると思うの。多くの人はそんなものに向き合いたくないから、嫌悪よりは孤独を選んで互いに背を向けてしまう。私たちが今そうなりかけているみたいに。どちらも選びたくなかったら、そもそも住んでいる世界の違いなんて存在しないんだっていう幻想を選ぶ。嫌悪と孤独と幻想のあいだで、私たちはこの街を彷徨い歩いている。そういうふうに思うの」

六鹿茉莉は黙って続きを待っている。

「そんなときに私にできるのは、自分に見えている世界を茉莉に丁寧に説明することと、茉莉の話を耳を傾けて、茉莉の世界を今あるように成り立たせている動機について——神様みたいなものについて——考えることくらいなんだと思う。茉莉の神様はどんな人なのか。彼あるいは彼女は茉莉の世界をどんなふうに創り上げたのか。そういうことを私は知りたいの。茉莉がそれを簡単に口にするのができないことはわかっている。それは私が想像しなくてはならないものなんだと思う。今はまだそれがうまくいっていないくて、私は自分の世界から望遠鏡を覗き込むようにして茉莉のことは見てしまっていて、茉莉のことを不幸だと思っているかもしれない。でもいつかあなたの世界に入っていくことができるんじゃないかと思っているの。嫌悪を呑み込んで、孤独に抗って、幻想を振り払い続けることさえできれば、私はいつかあなたの世界に入っていくって、そこでの茉莉の暮らしや、その風景の美しさや、その歴史の必然性みたいなものを内側から見ることができんじゃないかって」

「でも、何のために？」と六鹿茉莉は言い、皿のような目であなたのことを見つめる。「何のためにそんなに無理して私のことを知ろうとするの？ ニコちゃんにとってそこまでする意味がどこにあるの？」

「意味があるからじゃなくて、そうしなくてはならないからだよ。茉莉は言葉本来の意味で『愛すべき』人だから。あなたは誰かが絶対に愛を与えるべき人だから。それにたぶん」——そこまで言ったところでああなたは嗚咽が込み上げてきそうになるのを感じて一度口を閉ざし、気持ちを落ち着かせてから話を続ける。「たぶん、私たちは本当は誰もが愛すべき人なんだと思う。私があなたから教わっている一番大切なことはそういうことだよ。誰もが——私自身だって——人から愛される価値のある人間なんだっていうこと。なぜだかわからないけど、あなたにはそう信じさせる力があると思うの。あのね、私は偉そうなことを言っているかもしれないけど、ヒロイックになっているつもりはないし、なることもできないと思う。私にはそれだけの勇氣も能力もないから。正直に言って今は茉莉のことが全然理解できないし、私にできることなんて実際にはほとんど何もないのかもしれない。でも茉莉がこの世界から不当に扱われてきたっていうことだけはわかっている。『この世界』っていうのは誰か一人の世界じゃなくて、私の世界とあなたの世界が少しだけかもしれないけど重なっている、人間なら誰もが分かち合っている世界のこと、あなたはその共通の世界からひどい

仕打ちを受けてきた。でも誰もそんな目に遭わなくちゃならない理由なんてない。だから私がせめてその埋め合わせくらいはしたいと思っっているの。それはあなたの世界で起こったことであるのと同時に、私の世界で起こったことでもあるから。誰もこれまであなたにちゃんと謝る人がいなかったから、私が謝りたいと思っっているの」

六鹿茉莉の顔が紅潮していく。あなたは部屋の空気が急に濃くなり、その中にたくさんの透明な泡のようなものが生まれたように感じる。その泡の一つ一つに六鹿茉莉の忘れられた記憶や隠された記憶が保管されていて、あなたに触れられるのを今か今かと待っているような。涙が流れようとしている、とあなたは思う。

しかし六鹿茉莉は涙を流さない。彼女の世界にはあなたが普通のこととして想定しているような泣き方は存在しない。代わりにふたたび川の音が高まる。それは最初の状態よりもはるかに大きくなっていき、携帯電話のスピーカーはこんなに大きな音を出せたのだろうか。とあなたが訝る間もなく、マンションの屋上にUH・1ヘリコプターが不時着しようとしているかのような轟音となる。あなたは指で耳を塞ぐ。あなたの服が、部屋そのものが、びりびりと暴力的に振動する。

それから突然、まったくの無音状態がやってくる。

スピーカーが壊れたのだろうか、と思ってあなたが耳から手を離れたとき、携帯電話の画面がこちら側に裂けるように割れ、川が鉄砲水となって部屋の中に流れ込んでくる。あなたはそれが六鹿茉莉を捉える瞬間をスローモーションで目撃する。川の先端はまるで意志を持っていくかのようにまっすぐに六鹿茉莉の顔に向かい、その頬を激しく殴打する。プログラム、とあなたは思う。銃の弾丸のようにロードされたプログラム。

時の流れは元の速さに戻り、携帯電話は唸りを上げて川を吐き出しながら、鎖から解き放たれた猛犬のように部屋中を暴れ回る。あなたは気を失っている六鹿茉莉を急いでソファから抱き起して背負い、暗くなった部屋の中を玄関に向かう。ストリングカーテンをくぐり、鍵を回し、ドアを押し開ける。

だがドアは開かない。鍵がかかっていないことを確認して何度も押したり引いたりしてみるが、ドアはびくともしない。向こう側で何かがつかえているのだろうか？ あなたは覗き穴から廊下の様子を確認する。

そこには魚たちがいる。さまざまな形をした魚たちが、オパールグリーンから董色に至るスペクトラムのあらゆる色味を含む幻想的な水の中で、優雅に泳いでいる。今にも踊りだしそうな珊瑚や海藻やイソギンチャクのあいだで、動きの鈍い大きな魚と、群れになった小魚たちが、頭上から差し込む光の帯をきらきらと乱反射しながら共生している。それが本物の海なのか、水族館の水槽なのか、あなたには区別がつかない。魚たちにだって区別はないだろう。彼らにとってそれは区別をつけなくてはならないほど本質的な問題ではないからだ。

あなたは自分がその美しく自然な営みから完全に排除されていることを知る。あなたと彼らのあいだには重たい鉄の扉があり、あなたはそこに開けられた小さな穴からかうじ

て彼らの生活の一部を垣間見ることができるとはすぎない。彼らはあなたがそこにいて、彼らのことを羨望の眼差しで見ていることさえ知らない。私はもう二度と彼らの仲間に入ることはできないんだ、とあなたは思う。茉莉の悲しみに付き合っているうちに、扉は永久に閉ざされてしまったんだ。

失意のうちに覗き穴から目を離すと、いつの間にか川の水位はあなたの胸の辺りまで上がっている。それはディスプレイの中で見たときと同じようにミルクティーのように濁り、生命の気配はない。そしてあなたはもう一つの重要な事実に気づく。

茉莉がいない。

あなたが外の世界に一人で夢中になっているあいだに、六鹿茉莉の姿はあなたの背中から消えてしまっている。

「茉莉」とあなたは小さな子どもの姿を見失った母親のようにパニックになって叫び、水の抵抗に逆らいながらリビングに戻る。どうしようどうしよう、とあなたは思う。茉莉はどこかで溺れてしまっているんだ。袋から抜け出ることに失敗してしまったモンテ・クリスト伯みたいに。でもこの夜の闇の中で、この何が入っているとも知れない汚れた水の中で、視界などというものがあるはずがない。

あなたは水中の家具や本に足を取られながら、手をいっぱいに広げてリビングを探る。それからキッチンを探り、ドアの開いた浴室の中を探るが、六鹿茉莉らしき物体には行き当たらない。もう一度リビングに戻ったとき、あなたはベランダに三雲くんがいることに気づく。川のせいで頭しか見えていないが、三雲くんは外からスライドドアに体当たりしてガラスを破ろうとしている。しかしガラスには格子状になった強化用のワイヤーが入っていて、簡単には割れそうにない。

私はなんて馬鹿なんだろう。初めからあの扉を開ければよかったんだ。

すでに水位はあなたの身長を超えている。あなたは見えないベッドやローテーブルを頼りに、水中に沈み込んだり天井に頭をぶつけたりしながらベランダに向かう。六鹿茉莉が気に入りに、そのために寒さを我慢してまでこの部屋に住み続けているその広いベランダに。あなたはなぜ六鹿茉莉が部屋の快適さよりもベランダの広さを優先していたのか、ようやく理解する。それは部屋の一部でありながら外の世界の一部でもある貴重な空間だからだ。それは「悪い人間たち」が蔓延^{はびこ}る外界からの安全を確保しながら、しかも茉莉が茉莉自身の世

界で窒息することを防いでくれる、善き共通の世界だからだ。

あなたはソファの背に足をかけ、ガラス戸のわずかな隙間を通して外にいる三雲くんと視線を交わす。三雲くんは大声で何かを言っている。あなたは彼の唇の動きからそれを理解することができる。

「小説がどんなふうに終わるのか、やっと思いつてしまったよ。忘れてしまったごめん」

あなたは何度も首を振ってこう言う。「謝る必要なんてない。私はたぶん、三雲くんに求めてはいけないうまで求めてしまっていたんだと思う。三雲くんはそのことを知ってい

たのに、言わずにいてくれたんでしょ？」

こうしてあなたはたちはダンジョンの奥で巡り合う。互いの真意を理解し、互いの目的が一致する地点を見つける。あなたたちを隔てるのはもう透明な扉一枚だけだ。

あなたが水中の扉の鍵を外すために大きく息を吸ったとき、誰かがあなたの足首を掴む。茉莉、と思うか思わないかのうちに、あなたは川の中へ引きずり込まれる。ぐんぐんとスピードを上げながら、本来部屋の床があるはずの位置よりもはるかに深いところまで。あなたは残されていたわずかな光を失い、方向感覚を失い、どちらに水面があるのかさえわからなくなる。

泥の密度が一段と濃くなった川の底らしき場所に着いたとき、その誰かはあなたにこう言う。

あなたは彼があなたのことを助けに来たと思っているの？ 彼が恋しているのはあなたじゃなくて私なんだよ。あなたのことなんてもうどうでもいいんだよ。

でも早くドアを開けないとあなたも死んでしまうよ、とあなたは言う。

何を言っているの、とその声は言う。私はもうずっとこの場所で生きてきたんだよ。水がなくなったら死んでしまうじゃない。

あなたははっとして鼻から水を吸い込み、咳き込んで肺の中の空気を吐き出してしまう。途端に差し迫った生命の危機を感じ、あなたは自分の足首を掴む手を両手を使って懸命に引き剥がそうとする。その手にぬるぬるとした硬い鱗のようなものがついていることにはあなたは気づく。人間のものではない手が、人間のものではない力で、自分のことを引き留めている。信じがたいほどの絶望があなたを襲う。空気を吸おうとすると水が入ってくる。あなたはもう一度咳き込もうとするが、吐き出すものはもう何も残っていない。さらに深く水を吸い込む。

びくびくと痙攣しながら死の扉をくぐろうとする意識の中で、あなたの両手はその鱗のついた手を辿り、腕を辿る。その先には鱗のついた肩があり、鱗のついた顔がある。なんだ、とあなたは思う。まだちゃんと人間の形をしているじゃないか。あなたは最後の力を使ってその孤独な人魚を抱き寄せる。すると足首を掴む手は外れるが、人魚は激しくもがいてあなたの抱擁から逃れる。

ごめんね、茉莉、とあなたはまだ近くにいるはずの六鹿茉莉に言う。愛が不足しているのはあなただけじゃなくて、私もだった。そんな私にあなたを愛せるはずがなかったの。

あなたは涙を流す。身も世もなく、二人ぶんの涙を流す。涙はすぐに川の一部になり、区別がつかなくなる。でもどうして区別をつける必要があるだろう？ この川と涙のあいだに本質的な違いなんてあるだろうか？

死の扉の敷居の上で、あなたは自分の母親に会う。お母さん、と十歳の少女に戻ったあなたはひどく腹を立てて言う。どうしていなくなっちゃったの。ずっと探していたんだよ。

母親は微笑む。もう何も心配する必要はないと諭すように。

母親の腰にしがみつくと、あなたは幸福な気持ちになる。自分も世界もすべてがぼんやり

としたまま優しく抱かれていた赤ん坊の頃のような、とても懐かしい気持ちになる。どこかで大きな波が碎け、木が水を打って倒れる音がする。

あのね、とあなたは母親を見上げて言う。もう一人新しい子どもがいるんだけど、一緒に育ててくれる？

あなたの意識のヒューズが飛ぶ。

エピソード——わたしたち

ベッドの中であなたはそこまで思い出す。人間というのはよくできたもので、記憶の読み込みにはほとんど時間がかからない。せいぜい五分くらいのものだ。

あなたは枕元のデジタル時計のバックライトを点灯させ、時刻を確認する。そして「うーん」と唸りながらむくりと起き上がり、深く息を吐く。トイレに行つてからもう一度眠ろう、とあなたは思う。まだ二時間くらいしか寝ていないし、お酒を飲んだせいかお母さんの夢まで見てしまった。

わたしはあなたのことを気の毒に思う。今朝のあなたはもう一度眠ることはできないだろう。わたしはあなたのことを多かれ少なかれ驚かせ、目を覚まさせてしまふだろう。

あなたは裸足で冷たい床の上に立ち上がる。電灯の紐を引いて明かりをつけたとき、あなたはわたしのことを見て、その姿勢のままびたりと静止する。

「あなた誰？」とあなたは緊張した声で言う。

「あ、はじめまして。わたしは滝岡と言います」

「タピオカ？」

『『キ』です。タキ、オカ。滝岡託』とわたしはあなたを怯えさせないように、できるだけゆつくりとした穏やかな声で言う。「わたしは『別の世界に住む別のあなた』です、あなたの言葉で言えば」

あなたはわたしの言っていることをすぐさま理解する。しかしそんなことが現実にある得るのだろうか？ とあなたは思う。別の世界に住む自分たち同士が会おうなんていうことが。小説の中で森野に語らせた「別の世界の自分」は、あくまで想像上の自分のことだったのだが。

わたしは続ける。「ついでに言えば、わたしはあなたの住む世界を創り上げた神様であり、あなたを産んだあなたの死んだ母親の靈魂のようなものでもあります。初めは自分でもわかっていなかったのですが、あなたのことを想像するうちにだんだんそのことがはつきりしてきました。いわばわたしはその三つの異なる視点から生まれるダイナミズムを利用することで——あなたのことを自分の分身として、被造物として、娘として立体的に構想すること——あなたの世界に入ってきたわけです。キリスト教が三位一体の教理のもとに人々のあいだに広がっていったみたいに。わたしは長いこと一人きりで机の前に座って、あなたの物語を語ってきました。そうすることによって、量子力学的に不確定な自己を回復させるために——これはわたしの言葉ですが、あなたの言葉で言えば、『本当の自分になる』ということです。本来、そのためにわたしがこうしてあなたの前に現れる必要はないはずです。つまり、わざわざこんなまわりくどい二人称の語りを使わなくても、わたしはあなたが短編集で用いたような通常の三人称で語ることだってできたはずです。しかしどうもそれがわたしたちの物語が求めていることらしい。わたしたちが出会って、お互いに語り合うこ

とが」

「もつとわかりやすく説明して」とあなたは言う。この手の話し方をする人間は出版業界だけでたくさんだ、とあなたは思う。自分の使う言葉に対するアルコール耐性が低いタイプ。批評家に多いタイプ。「なんで宙に浮いているの？」

「だって、神や死者やもう一人の自分の視点というのはそういうものでしょう。あなたは執筆中に自分が宙に浮いて登場人物たちを俯瞰しているような感覚はなかったですか？ もちろんこれはアバターのようなもので、本体は別の世界でコンピューターの画面に向かっています。わざわざ新しいキャラクターを設定するのは面倒だったので、見た目はだいたい一緒ですが。それと、わたしは自分の言葉に酔っているわけじゃなくて、できるだけ正確に説明しようとしているだけです」

あなたはため息をついて髪をかき上げる。私はまだ夢でも見ているのだろうか、とあなたは考える。

「夢じゃないですよ」とわたしは言う。「あなたはちゃんと起きてます」

「わかってるよ。昨夜あたしのことを尾けてたのもあなただったの？」

「そうとも言えるし、違うとも言えます。あなたが公園で男の姿に気づいて、家の前まで尾けられていたとき——わたしがその場面を想像していたとき——わたしはその男が自分だとは思っていませんでした。どこかの変質者だろうと思っていた。だってもしそれが自分だつて気づいていたら、このわたしが深夜に女性を尾行するなんてそんなひどいことするわけがないじゃないですか。そうでしょう？」わたしは自分が悪意ある人間に見られていることにだんだん腹が立ってきてそう言った。

「いや知らないけど」

「でもあなたがナイフを取り出して振り返ったとき、わたしはその男が自分だったことを思い出したんです。ああ、そうだそうだ、わたしは公園の東屋からあなたの世界に入ってきて、それを内側から見る事ができるようになったんだって。思い出したっていうより、『発見した』と言ったほうがいいかもしれません」

「ナイフって？」

「あなたがバッグから出してたやつです。わたしを刺すために」

「そんな物騒なもの持ってないよ。誰かに尾けられているような気がしたから、ただ振り返っただけだよ」

「いやいや」とわたしは笑って言う。「別に隠さなくても大丈夫です」

「どうして？ あたしがナイフを持っているところを見たっていうこと？」

わたしは昨夜のことを——発見された昨夜の記憶を——思い出す。わたしは確かにあなたがバッグから旅行用のマルチツールを取り出し、大きいほうのブレードを引っ張り出すところを見た。でも考えてみるとそれはおかしい話だった。実際にはわたしはあなたを後ろから尾けていたのだし、あなたは「後ろから見えないように」それをバッグから出したはずだった。わたしにナイフが見えるはずがない。

「勘違いだったかもしれませんが」とわたしは言う。

「もう何なの、これ」と言ってあなたはがっくりと首を垂れる。「あなたが何者なのか、ちゃんと説明して」

「ちよつと長い話になるかもしれないんですけど」

「あたし仕事に行かなくちゃならないから、準備しながら聞くよ。でもできるだけ手短に」

「仕事って？」

「今日は早い。遠くのお得意さんのところだから」

「お得意さん？ 小説家じゃないんですか？」

「小説家？ そんなわけないでしょ。この部屋のどこに本があるの？」

部屋の中を見回してみると確かに本はどこにもなかった。ごみ箱のそばに青年向けの漫画雑誌が積まれているだけだった。

「じゃあ何をしているんですか？」とわたしは訊く。

「庭師」

「庭師？」

「そう。新聞の地方欄にも取り上げられたことがあるんだから。まだまだ女性が珍しい業界だからね」

そう言いながらあなたはわたしの横を通り過ぎ、手洗い付きのユニットバスに入っていく。混乱した頭のままたしがその後をふわふわとついていくと、目の前でぴしやりとドアを閉められる。わたしは驚いて地面に落ち、キッチンのキャビネットでたたか頭を打つ。

わたしが立ち上がった後頭部をさすっていると、やがてあなたはタオルで顔を拭きながら出てくる。髪を後ろで結んだあなたは思っていたよりも丸顔で、昨夜とは全然印象が違って見える。あなたは冷蔵庫からアジの開きを取り出し、ガスコンロのグリルに入れて火をつけながらこう思う。……あれ？ わからない。あなたはいま何を思っているのだろうか？

あなたは換気扇を回し、煮干しと昆布が入れてあったコップの水を鍋に空けて火にかけ、冷蔵庫から味噌と長葱と木綿豆腐を取り出す。魚の焼けるおいしそうな匂いがする。

「さあ、早く始めて」

わたしはベッドの前に置かれた小さな卓袱台の前に座り、あなたにこれまでの話を最初から——少し駆け足で——語り始める。

わたしが話を語り終えたときには彼女はすでに朝食を済ませ、洗い物をしている。

「今の話をあたしが起きてからベッドを出るまでの五分で考えたわけ？」と彼女は疑わしそうに訊く。

「いえ、さすがにそれは無理です」としゃべり疲れたわたしはぐったりとした声で言う。「こちらの世界では五分ということになっていますが、わたしの世界ではだいたい八カ月くらいかかってます。時間の流れ方は世界によっていろいろなので」

「ふーん。まあまあ面白いんじゃない。朝から聞くにはちよつと下ネタが多すぎるけど」

「間違ってますか？」

「間違ってるも何も、全部あなたの妄想でしょう？　本気であたしが戸成ニコさんみたいな人だと思っているの？」

「名前を訊いてもいいですか？」

「エコ。笑う子ども」と彼女は言う。「庭師向きでもあるでしょ？」

「エコ」とわたしは口にしてみる。

「それと歳はまだ二十八だよ。幸か不幸か母親は健在だし、胸だってあなたが思っているよりはあると思う」

「すみませんでした。もしかしたら『こういう人だったらいいな』と思ってしまった部分があったのかもしれませんが。別の世界に住む別の自分の在り方として」

「そんなの知らないよ。あと一応言っておくけど、彼氏がこっそり見ているアダルトビデオを発見して喜ぶ女の人はあんまりいないと思うよ。それがどんな内容のものであっても」

「そうなんですか？」

「嫉妬とかじゃなくて、男の人がそういうビデオを見て興奮するのって結局『この女は男を求めているんだな』って勘違いしてるからでしょう？　そういうのってたまにすっごい迷惑だから。まあ最近はその女の人で見る人も多いみたいけど」

「女性がマスターベーションをするのは男性を求めているからじゃないって言うことですか？」

「当たり前でしょ。本気で言ってるの？　性欲くらい自分のものにさせてよ」

そう言ってエコはふたたびユニットバスに入っていく。出てきたときには上下揃いの濃紺の作業服に着替えている。両襟に白抜きで造園会社の名前が書かれている。

「で、なんでなの？」とエコは歯を磨きながら言う。

「はい？」

「なんで別の世界からやってきた別のあたしが男なの？　しかも髭まで生えてる」

「ああ……それがよくわからないんです」

「わからないって何よ」

「いや、わたしもこの八か月間、『どうして別のわたしが女性なんだろう』とずっと考えていたんですが、よくわからなくて。もしかしたらそこにはあまり良くない理由も含まれているかもしれないです。でもたとえそうだとしても、わたしはその良くなきについて一度腰を据えて考えてみる必要があったというか」

「それで何かわかったことはあったの？」

「わかったような気にはなっていました。でも結局何もわかってなかったみたいです」

そのときアパートの外で車が止まり、エンジンを切る音が聞こえる。

「親方が来ちゃったから、そろそろ行くね」と言ってエコは洗面所で口をゆすぎ、玄関に座って地下足袋を手取る。どうして昨夜はこういうものが目に入らなかったのだろう。

「ああ、そういえば」とエコは向こう側を向いたまま言う。「今はもうすっかり本なんか縁のない生活になっちゃったけど、あなたの話を聞いていたら子どもの頃に読んだ絵本のことを久しぶりに思い出したよ」

「絵本ですか」

「うん。もう二十年も前のことだし、題名も忘れちゃったけど、こんな話。あるお姫様が小学校に通うために親許を離れて湖に浮かぶ小さな島に暮らしているんだけど、先生たちから毎日がみがみとうるさいことを言われているのね。あれもしてはいけない、これもしてはいけないって。そんな息の詰まる生活が嫌になって、ある日、お姫様は島から逃げ出そうと考える。でも島に橋は架かっていない。船も当分のあいだ来ない。あれこれ思案した末、彼女は学校の物置から給食のみかんゼリーの素をたくさん引っぱり出してきて、それを湖に撒くの。湖はたちまち固まって目にも鮮やかなオレンジ色のゼリーになり、お姫様はその上を走って島の外へ脱出する。テッテケテーっと。変な話でしょう？　どうしてそんなものを急に思い出したのかわからないけど」

わたしは少し考えてからこう言う。「島のお姫様は周りにしか行く場所がない。だから彼女は湖をゼリーに変える。湖とは現実のことで、ゼリーとは物語のことです。物語に人を信じさせる力があれば、ゼリーはより強固になる。物語の内容が優れていれば、ゼリーはよりおいしくなる。わたしの話は、味のほうはともかくとして、とりあえず普段は歩けないものの上を歩いて別の場所に移動する役には立ちそうだ。わたしの話を聞いていて、あなたはそういうふうに感じたということではないでしょうか」

エコはこちらを振り返り、わたしの顔をぼかんと口を開けて見上げている。

「あなた、確かに言葉のセンスはあるのかもしれないね」

「まあ一応、そういうものを伝えたくてやっているのよ」

「プログラムみたいなの？」

今度はわたしが彼女の顔を見つめる。

「そういう考え方をしたことはなかったけど、言われてみればそうなのかもしれないです」とわたしは答える。「……あの、最後に訊きたいことがあるんですけど」

「何？」

「こんなに早く家を出なくちゃならないのに、昨夜はどうしてあんな時間に公園にいたんですか？　それと、眠る前にどうしてあんなお酒の飲み方をしたんですか？」

うーん、と言いながらエコは足袋を履き終えて立ち上がり、こちらを向く。

「あなた、さっきの話の三人の登場人物がああ後どうなるかわかっているの？」

「見当もつきません」

「あなたがそれを語ることができくらい力をつけて、もう少しあたしの話をあたしの立場から聞けるようになったら、教えてあげる。あたしが仕事から帰って来る頃までにはできるでしょう？　時間の流れ方は世界によっていろいろなんだから」

「ああ……はい、頑張ってみます」

「正直に言うと、あたしも誰か信頼できる相手に相談したいところだったの。じゃあまた後でね。部屋にいてもいいけど、あたしのものに勝手に触らないでよ」

「大丈夫です。どうもわたしにはあなたの世界のものを勝手にいじったりすることはできないみたいなので。さっきまではできると思っていたんですが」

「想像して語るだけ？」

「想像して語るだけです。しかもそれはほとんど間違ってます」

「あはは」とエコは初めて笑う。それは彼女の名前の通り、どこか懐かしい感じのする笑顔だった。

「あと昨夜のことなんですが、わたしはまだちゃんと謝っていませんでしたね。自分で気がついていなかったとはいえ、あなたを尾けていたのはわたし以外の誰でもなかった。わたしは自分自身のことにもっと注意深くならなくてはいけないんだと思います。ごめんなさい」
「みんなが自分のことを自分だってわかっていたら世界はもっと平和になるんだろうけどね。それはもしかしたら」と言ったところでエコは少しくつむき、何かに思いを馳せているような顔になる。「この世で一番難しいことなのかもしれないけど。それじゃね、タピオくん」

「気をつけて」

エコは玄関の鍵を外し、ドアノブを回す。夜はいつの間にか明けていて、扉が開いていくにつれ、目が眩むほどに新鮮な冬の朝の光が差し込み、部屋の中を満たしていく。久しぶりに――八カ月ぶりに――目にするその光がハレーションを起こすようにエコの身体の輪郭をぼかしたとき、わたしには一瞬、彼女の姿がこの八カ月のあいだ頭の中で思い描いてきた六鹿茉莉の姿と完璧に重なって見える。戸成ニコではなく、六鹿茉莉の姿と。

世界がくるりと宙返りを打ったように感じて、わたしはドアが閉まった後もしばらく壁に手をついたまま、目をつぶって目眩が収まるのを待つ。六鹿茉莉の部屋で携帯電話の背もたれに使われていたあの題名のわからない本、あれは何の本だったのだろう、とわたしは思う。

居間に戻る途中、開きっぱなしになったユニットバスの扉の前を通りかかったとき、わたしは洗面台の鏡に目を留める。鏡の前に行き、そこに映った自分の顔を眺める。それはまるで他人の顔のように見える。赤信号のあいだだけ横断歩道を挟んで見つめ合い、すれ違い、じきに忘れてしまう他人の顔。「お前も可哀想な野郎だな」とわたしは鏡の中の男に言う。まだよく知らない女性の部屋にわたしは一人で佇んでいる。見慣れない家具。嗅ぎ慣れない匂い。次第に寄る辺のない気持ちになり、早く彼女にこの空間を満たしてもらいたい、とわたしは思う。これは満たされなくてはならないものだ。本物の持ち主によって。ちよつとやさつとでは想像することのできない、本物の暮らしによって。

でもわたしはエコの帰宅の場面まで時を早送りしようとは思っていない。わたしにはやらなくてはならない準備が山ほどあるし、今のこの不安定な感覚をもうしばらく味わっていたいから。この感じは全然悪くない。これはほとんど恋そのものだ。人がそのためだけ

に生きることが出来るほどのものだ。もちろん彼女が広い意味での自分自身にすぎないことはわかってる。でも広い意味での自分自身というのは、きっと広い意味での他人でもあるのだ。

わたしたちがお互いを理解できないのはいいことだ。そうである限り、わたしたちには向かうべき場所があるのだから。だからこそわたしたちは何度でも繰り返し想像し、語り合う。迷宮の中心で、川の底で、湖の上で、出会うことができるまで。